公開資料

機密性１

戦略的創造研究推進事業

（社会技術研究開発）

研究開発実施終了報告書

「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域

研究開発プロジェクト「農山漁村共同アトリエ群による産業の再構築と多彩な生活景の醸成」

研究開発期間　平成 28 年 10 月～令和 2 年 3 月

研究代表者　大沼 正寛

（東北工業大学大学院 教授）

目次

1. プロジェクトの達成目標 2
1-1. 全体目標及びリサーチ・クエスチョン 2
1-2. 背景 3
1-3. ロジックモデル 6

2. 研究開発の実施方法・内容 7
2-1. 研究開発実施体制の構成図 7
2-2. 取り組みの概要 8
2-3. 実施項目・内容 9

3. 研究開発結果・成果 35
3-1. プロジェクトの目標達成状況及び結論 35
3-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョンへの回答 43
3-3. 領域のリサーチ・クエスチョンへの回答 50
3-4. 実施項目毎の結果・成果の詳細 52
3-5. 今後の成果の活用・展開に向けた状況 61

4. 研究開発の実施体制 62
4-1. 研究開発実施者 62
4-2. 研究開発の協力者・関与者 63

5. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など 75
5-1. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など 75
5-2. 論文発表 80
5-3. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表） 81
5-4. 新聞報道・投稿、受賞など 82
5-5. 特許出願 82

1. プロジェクトの達成目標

1-1. 全体目標及びリサーチ・クエスチョン

＜全体目標＞

我が国の農山漁村では、元来の生業に加え、地域資源に根ざした近代産業が隆盛した時期もあったが、現在は衰退し、人口流出が進んでいる。東北地方にも多くの事例があるが、地場産品の需要は減り、日々のくらしの風景（生活景）から地域らしさが失われつつある。

本プロジェクトでは、農業、建築、鉱工業、ものづくり、アートなどの諸分野のうち、地域の資源・環境を活かして価値を生み出す技術を「地技」、地技にもとづく生業・活動を「地技型生業」、地技型生業を営む主体・組織を「地技アトリエ」と呼び、それらが多様な連携・共創を行い、広がることで、持続可能な地域産業の再構築につながることを大目標におく。

また、地域の資源・環境が健全で持続可能であることと、美しく地域らしい生活景が保たれることは同質的であるという認識にたち、生業を包む背景・環境にも考察の眼を向ける。このとき、高世代の地技や環境育成力を次世代が継承する、若世代による技術等によって地域資源の価値化が再興するといった「多世代共創」が、大目標に寄与する可能性は少なくないと考えられる。

そこで、本プロジェクトでは、地技型生業の共創様態を「共同アトリエ（Cooperative-atelier, 略称 Co-atelier または CA）」と定義して、具体例の創出・育成・支援を図るとともに、そのありようを多世代共創に鑑みて考察し、可能性を提示することを目標とする。また、地技型生業が営まれる景観を「生業景」、生業景を含む総体的なくらしの風景を「生活景」と定義し、持続可能な資源活用管理に照らした生業と景との関係性に関する基礎概念を得ることを副次的目標とする。

これらをふまえ、達成目標およびリサーチ・クエスチョンとして、各々３点ずつを挙げる。

＜達成目標＞

Ⅰ　農山漁村「共同アトリエ（ＣＡ）」の実践事例創出とモデル提示

旧来の家内工業的な生業様態を「単アトリエ（単Ａ：sole-atelier）」、連携・共創した様態をＣＡとすると、近代以前からの伝統的な単Ａは、しばしば副業も併有しながら「地技」を育んできたが、近代以降は同業者組合、工場・工業化、機械化等によって企業主義の地域産業が中心となり、現在はいずれも疲弊しているとみられる。残された地技を再評価しつつ、多世代・異分野間で連携・共創する地技ＣＡの取組みが有効となる可能性がある。そこでその具現化のため、多世代共創を通して課題解決に向かうような特定事例の創出・育成・支援を図るとともに、各地の多様な地技を取材して、多世代共創に留意したＣＡモデルの検討・提示を行う。

Ⅱ　地技の連携・共創を育むコミュニティ・ネットワーク形成のための情報共有ツール開発

地技の連携・共創を図るには、生業の現場における当事者の目標、意識、手法、情報などを誰とどのように共有するかが要点となる。そこで、顔のみえる特定プロジェクト活動を中心に据えながら、そうした活動成果や他地域の事例を互いに紹介できるブックレットの発行、プレイヤー相互の情報交換を行うサミット＆マルシェ、連携・共創の素地ともなり得るデータベースの構築などを行う。もちろん、一般市民への意識啓発も必要であり、ブックレットを簡略化したＷＥＢの開設、また、若い世代や地域参入者向けの「地域資源再発見ツール」を開発する。これらの情報共有ツールを通じて、地技の連携・共創を育むコミュニティ・ネットワークの形成に資することをめざす。

Ⅲ　生業景／生活景の基礎概念検討および記録・事例的考察

田畑、養蚕や保存食の干場、水産加工場、地域産材の加工場など地技のある「生業景」は、

その生業の地域立脚性を担保し、価値化にもつながる。また、そうして形成された田園風景や家並みなどの「生活景」は、地域のくらしを包みこむと同時に、地技の社会的価値を可視化すると考えられる。生業が経済的効果を生むことは直接的な目標であるが、それのみで十分とするのは地技型生業とは言い難い。こうした点をふまえ、目標Ｉに掲げたＣＡ調査・創出を通して、その背景・環境をあわせて観察し、基礎概念を検討する。既往の町並み保存や文化的景観、伝統的工芸品、産業遺産、農業遺産といった施策を参照しながら、生業景／生活景を構成する資源・環境を記録して、目標Ｉ・Ⅱを補完する事例的考察を深める。

＜リサーチ・クエスチョン＞

○RQ1　地技にもとづく生業にはどんな事例があるのか、連携・共創の萌芽はあるのか？

・・・地域の資源・環境を活かして価値を生み出す「地技」とこれにもとづく生業・活動（以下「地技型生業」と呼称）は、農山漁村地方のどこに、どのようなものが認められるのだろうか。また東北地方においてはどんな特徴があり、どのように分布しているのだろうか。そうした生業は孤立しているのか、それとも連携や共創の萌芽を有しているのだろうか。

○RQ2　地技は誰が担い、どのように多世代共創が可能か？

・・・地域の資源・環境を活かす「地技」の担い手とはどのような人々か。地域内外の人々による共創様態（＝ＣＡ）が、人材発掘やエンパワメントの一方法となるのではないか。そうした人々は、世代や志向などにおいて、相互補完性から多様なコミュニティ・ネットワークを形成する、多世代共創の傾向を有しているのではないだろうか。

○RQ3　地技にもとづく生業は、景（生業景／生活景）とどのように関係づけられるか？

・・・地技にもとづく生業は、地域の資源・環境の活用保全と不可分であることから、生業と環境を一体として捉える事象としての「景」が想起できる。多様な生業に照らしたとき、景として捉える概念が適用できる事例にはどのようなものがあるのか。またそれは、誰にとって、どのような意義があるのだろうか。さらにいえば、地技の担い手やつなぎ手、つかい手、ささえ手の共通目標の一つに、景の持続・醸成が潜在している（それゆえ能動的に環境管理に参画する気風がある）可能性もあるが、それは事実であろうか。

1-2. 背景

本研究開発領域では、都市・地域を、多世代・多様な人々が共にデザインしていくようなグッド・プラクティスを創出するとともに、そこでの知見を一般化・体系化し、問題に取り組む人々が活用できるような仕組みづくり、ステークホルダーが自立的に取り組みを継続し情報を共有できるような基盤的ネットワークを構築することをめざし、以下の３点を共通の目標としている。

（１）持続可能な都市・地域のデザイン提示
（２）多世代共創を促す仕組みづくり
（３）統合的な成果の社会実装に向けたネットワーク構築

本研究開発プロジェクトは、このうち（１）、とくに非都市地域のデザイン提示に深くかかわるテーマである。人口集中が進む都市社会における多世代の人々による共創社会のみならず、都市を支え、国土を保全する農山漁村地域における共創社会の構築が重要であることは論を待たない。地技型生業に着目し、その小さな営みを少しずつ連携、連動させようという構想・実践（プラクティス）に、本プロジェクトの特徴がある。また（２）の多世代共創については、直接目標というよりも、めざす地域デザイン像における必要不可欠な方法論であるといえる。地技の代表例の多くは高齢世代の熟練の技であるし、意識ある将来世代はその価値に気づいており、継承・共創を望んでいる状況が散見されるからである。さらに（３）について

は、小さな地技型生業の連携・共創を目標としている関係上、プラクティスの重畳化こそが社会実装に近づくと考えている。

さて、改めて我が国の農山漁村の衰退と人口流出、とりわけ東日本大震災からの復興を目指す東北地方の現状は厳しい。東北沿岸部の荒涼たる「景」をみると、単にハードウェアとしての住まいや町並みが失われたのではなく、そこに与えられた資源・環境を活かした地技や、それをとりまく営みのつながりが失われた喪失感が大きいことに気づかされる。

東北沿岸部のみならず、地技に留意して現代日本の現状を生活者の観点からみると、地域の資源・環境を活かした「つくり手（≒生産者）」の尊厳は失われ、「つなぎ手（≒商人ら）」は目まぐるしい消費流通に翻弄されてこれを商い届けることができず、利用する「つかい手（≒愛用者・消費者）」の選択肢は減って評価眼が低下する、という悪循環に陥っているように映る。同時に、公益性をはかる行政や、資源・環境の保全に向きあうリタイア世代といった「ささえ手」の余力が減少した結果、生活景の粗放化に至っているとみることができる。持続可能な開発目標（SDGs）に照らしながら、つくり手・つなぎ手・つかい手・ささえ手の相互関係性を再認識し、４者にとっての共創課題を見出すことが必要と考えられる（図1）。

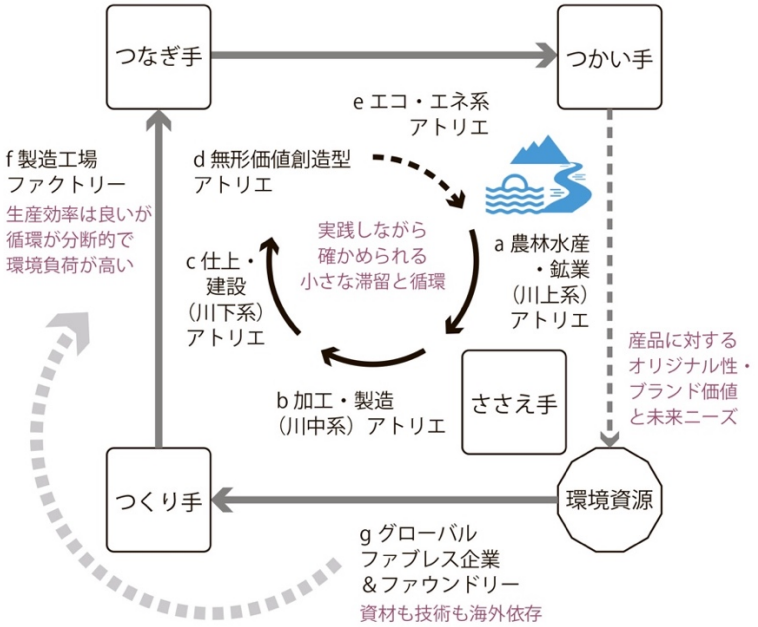


図１ 小さな生業の再構築による多様な価値創出と資源・環境の循環・保全

ここで、類似・関連の先行研究や取り組みについて、以下の７例を挙げる。

ⅰ）故・秋岡芳夫によるグループモノ・モノから東北裏作工芸への展開（1977-）[文2)]。研究代表者が属する学部学科の前身である工業意匠学科長の学科長をつとめた秋岡が実践した動きである。日本の第一線で活躍しながら「立ち止まった工業デザイナー」といわれ、地域の資源を活かしたものづくりを復興させ、消費者から愛用者を育てようという実践的研究を行った。本ＰＪも文脈を継承しているが、「工業化社会に対するアンチテーゼ」を「第一線のデザイナーが振り返る」という当時の構図はいかにも明快で、模倣することはできない。40 年以上が経過した現代、地域社会を正視し小さな試みを連動させていくことが、むしろ現代的と考えられる。

ⅱ）温井亨「生活・生業の場としての歴史的風景保全の研究史に関する考察」（ランドスケープ研究 64(5), 457-460, 2001）[文31)]。生活・生業と景観の関係を主題としている点で注目され

る。本稿ではその嚆矢を大正期の建築学、今和次郎らに見出し、以後戦中・経済成長期には計画論や歴史学など分野別研究が中心で、その後町並み保全等への関心が 1970 年前後に高まり、生きている歴史的景観を研究と実践の両面から捉える複眼的研究は 1980 年以降にようやく現れる、としている。本研究を位置づけるうえで参照すべき点が少なくないが、あくまで俯瞰した研究であり、その対象や方法を直接参照・引用する先行研究ではない。

ⅲ）佐藤利明「地域社会形成の社会学・東北の地域開発と地域活性化」（南窓社・2007）[文11)]。地方都市から農山漁村まで、東北各地の地域産業の現場がどんな歴史的背景をもち、どのように変容してきたかを俯瞰している近代東北産業史論である。具体例への聞取りも行われており、本ＰＪにおけるフィールド調査対象の参照例ともなり得る。ただ、同書は地域社会をマクロに観る視点がつよい印象がある。一方、本ＰＪは「生業景」のような現代的価値への新たな視点を提示しながら、計画・実装論を提示することをめざすものと位置づけられる。

ⅳ）伊藤正昭「新地域産業論・産業の地域化を求めて」（学文社・2011）[文15)]。グローバルとヴァナキュラーという過去の対概念が、現代の産業社会再構築論においては統合的にとらえ得ること、さらには産地といわれる資源豊かな農山漁村に、一定の優位性があることを示唆している点で参考となる。都市型の工業集積地、それらとのネットワークをも論じており、本ＰＪの試みを再定置するうえで有用である。

ⅴ）大沼正寛「建築資産の経年醸成価値」（日本建築学会総合論文誌・2012）[文40)]。景観と価値醸成に関わる基礎的論考で、本プロジェクトを含む代表者の一連の研究に通底しているテーマである。地域が主体的・自立的に資源活用・環境管理に関わることで醸し出される価値を愛着・経年美・歴史性の３様に大別、例証した。本プロジェクトは、巨大災害のあまり公共事業面での他力志向がつよくなった東北被災地に鑑みて、本稿をもとに、環境への主体的関与が残る生業に着目したことに起因する。いわば本プロジェクトの起点の一つと位置づけられる。

ⅵ）産業観光推進会議「産業観光の手法・企業と地域をどう活性化するか」（学芸出版社・2014）[文20)]。景観に関連する既往研究の一つとして、昨今注目されている産業遺産を我が国においてどのように価値化するか、といった視点から、多くの事例・知見を総合化して、企画・運営の実情や提言を述べている。本ＰＪが着目している「生業景」に関連する視点も盛り込まれており参照に値するが、評価している「景」を観光産業のコンテンツに利用すること自体への内省はあまり感じられず、徹底してビギナー読者向けに分かりやすい例示を心掛けている。すなわち、現役の生業の継承再生を中心に据えながら、その「横顔」や「背中」を「背景（環境）」とともに「景」とみたてる本ＰＪの視点とは、異なる点も散見される。

ⅶ）西堀耕太郎「伝統の技を世界で売る方法」（学芸出版社・2018）[文26)]。小さな生業にも可能性があることを勇気づけられる実録である。傘屋の家に生まれた著者は、世界を視野に、ものづくりと商売の可能性を痛快に論じる。とはいえ、多くの成功体験本がそうであるように、フォロワーが模倣すればよいかとは考えられない。小さくとも企業の体をなした事例と、窮地に立たされた農山漁村の個々の生業は、状況が異なる場合も少なくない。少なくとも大学としては、成功目前の事例よりは、課題の多い事例に寄り添うべき責務があるといえよう。

なお、このほか東日本大震災後の復興プロジェクトや、東北の中核都市仙台における文化事業等においても参照事例は少なくないが、本ＰＪの直接的な類似例は管見されていない。

1-3. ロジックモデル

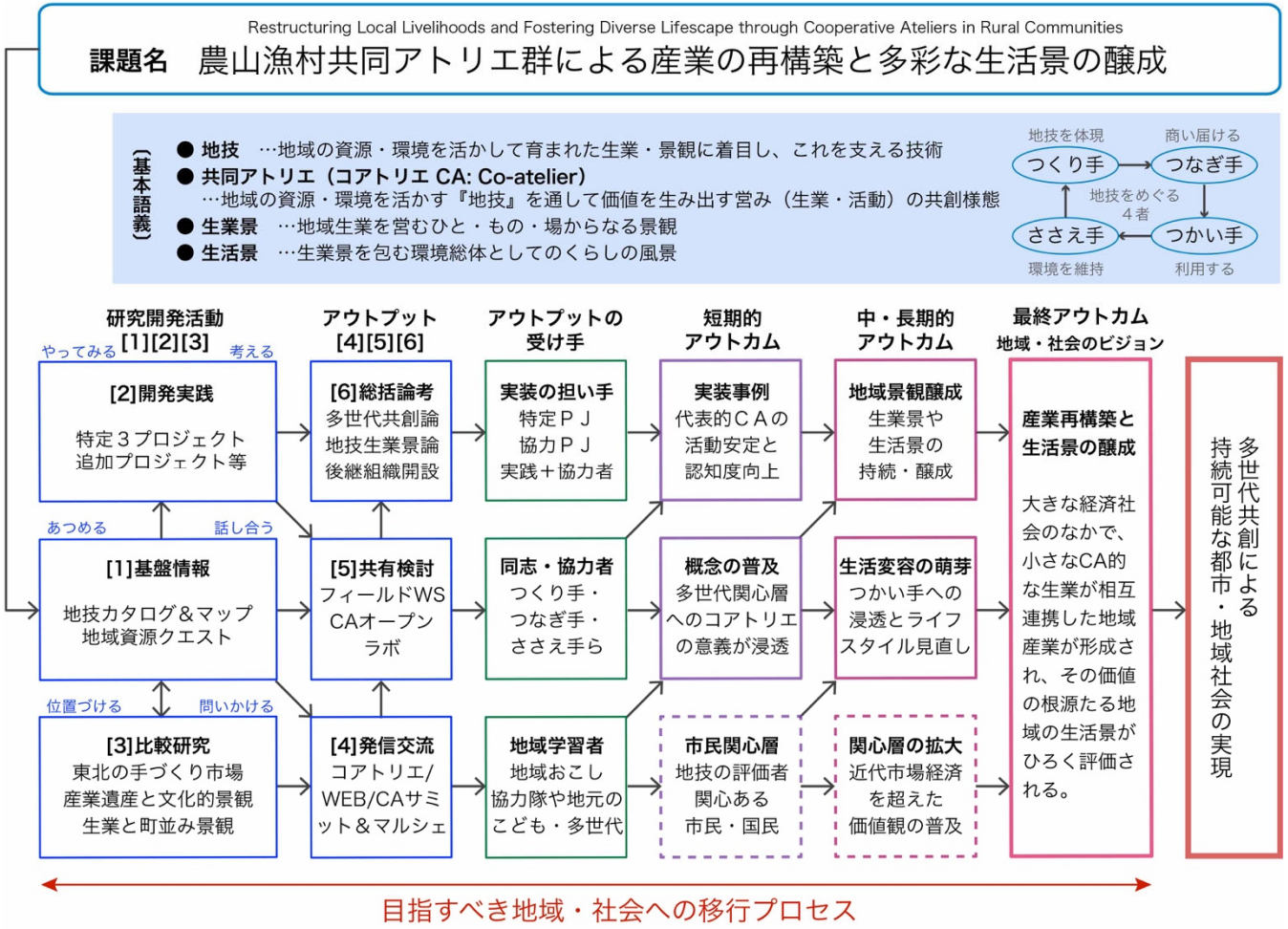
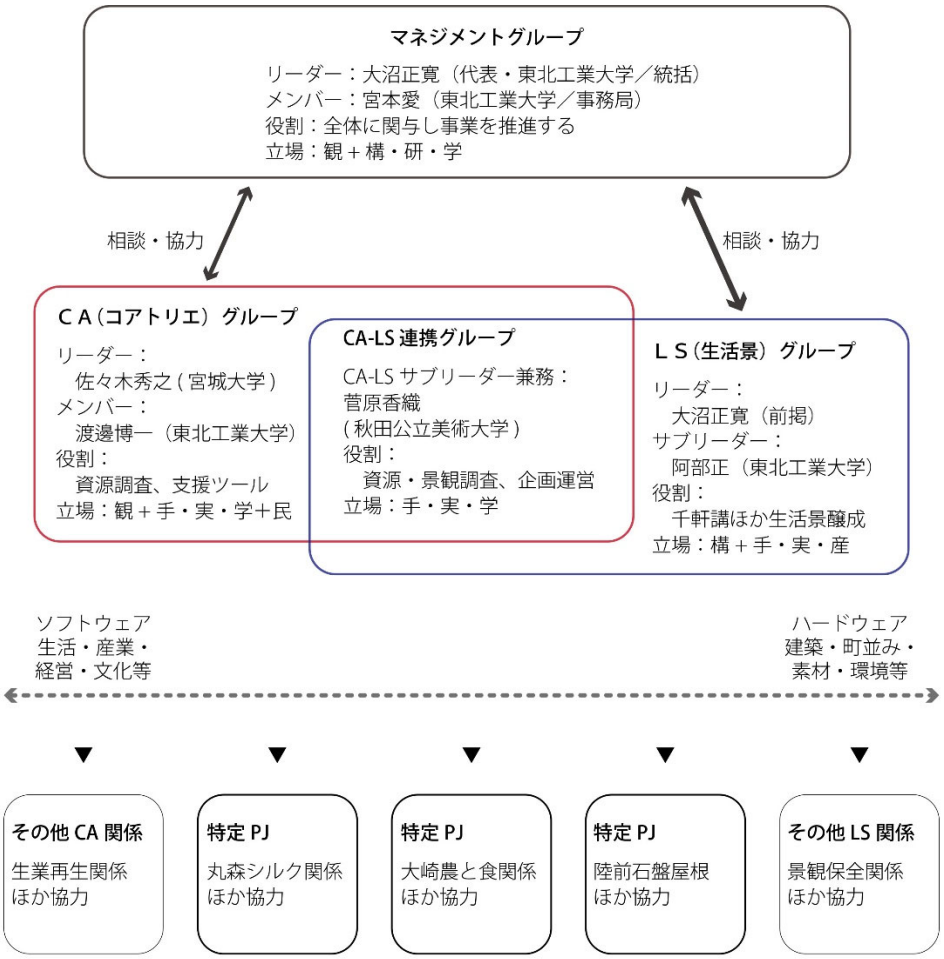


図 2 ロジックモデル

2. 研究開発の実施方法・内容

2-1. 研究開発実施体制の構成図



主な協力者

氏名　所属　役職　（または組織名）	協力内容
佐藤純子　宮城県丸森町教育委員会　教育長	丸森まなみやげ共創活動　助言協力
阿部倫子　宮城県丸森町地域おこし協力隊　隊員	丸森まなみやげ　共創マネジメント協力
田澤紘子　仙台市市民文化事業団　研究員	調査協力、分析考察協働、催事運営協力
雄勝硯生産販売協同組合	調査協力、助言
登米市教育委員会	調査協力、助言

図 3　プロジェクト実施体制図

2-2. 取り組みの概要

本プロジェクトの構成は、図 4 のように図化できる。実施項目としては計 6 項目、これに帰属する細目を全 16Works に区分して進めた。

はじめに中核となるのは、上述「地技型生業」の事例を抽出し、概念検討を重ねる実施項目（[1]基盤情報／[3]比較研究）と、注目した事例（特定プロジェクト）において多世代共創をエンカレジしながら目標達成をめざす実施項目（[2]開発実践）である。すなわち、[1]基盤情報をもとに、[3]比較研究に照らしながら、[2]開発実践をすすめる、双方向例証的な過程（図 4 左下部の三角形）を想定する。

次に、こうしたプロジェクト関係者を核としたショートサーキットだけでは客観性や対社会性に不足が生じることから、基盤情報・開発実践・比較研究で得られた知見や、景観を論じるための空間情報を分かりやすく集約した活動概報の発行、各地の実践者と情報共有を図るサミット＆マルシェなど、[4]発信交流のプロセスを設けるとともに、主に特定事例の課題解決法をともに探るフィールド・ワークショップ、広げた人脈から関係する知見を共有するオープンラボなど、[5]共有検討のプロセスを持つこととした。

以上をもとに、小さな三角形を一段階オープンに広げた二重弁証法的な構成により、[6]総括論考を通して一定の統合的知見を得ることをめざす。なお、未達成部分を含めた事後検討は、後継となる取り組みの方針を明示することとした。

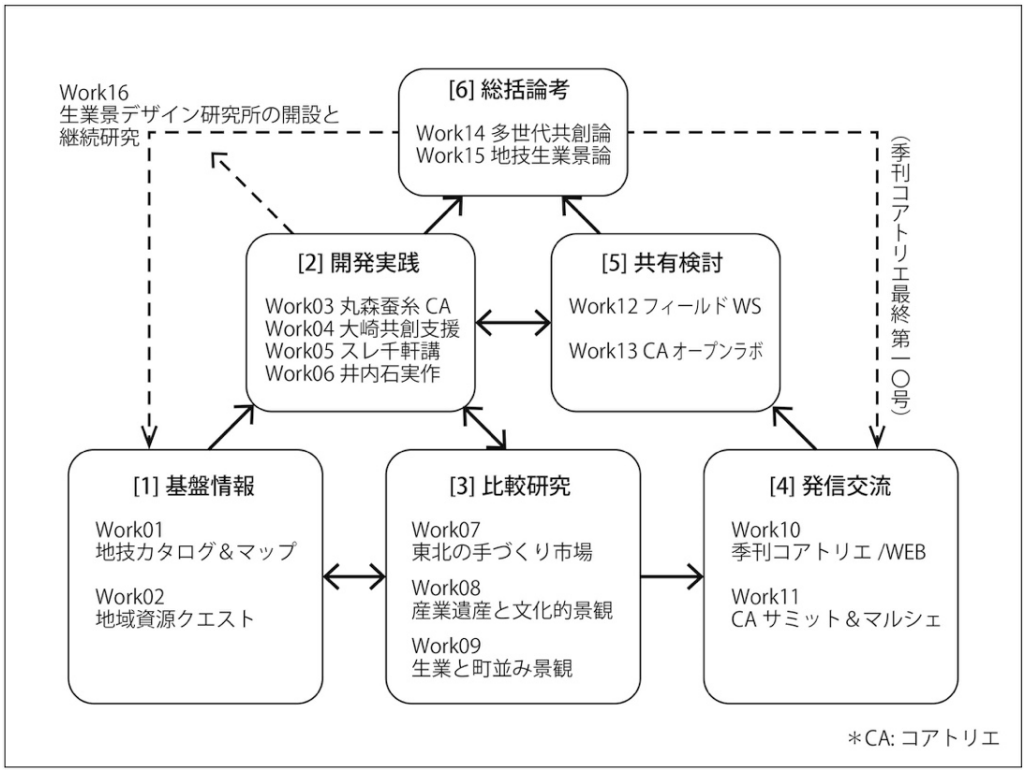


図 4 本プロジェクトにおける取り組み実施項目とそれらの構成

2-3. 実施項目・内容

2-3-1. 基盤情報

プロジェクトを進めるうえでの基盤情報を構築すべく、情報収集と取材調査を行う「地技カタログ＆マップ」の整備を行うとともに（work01）、地域資源の特徴について、地元住民や外部協力者が気づきを得るための導入学習支援ツール「地域資源クエスト」を開発した（work2）。

【work01】地技カタログ＆マップ

「地技型生業」とは何かを検討するため、多様な媒体・人脈から、地技アトリエ情報を 151 件収集した。続いて、つくり手・つなぎ手・ささえ手などの多様性に留意して対象を選び、110 件について、以降に述べる特定ＰＪや催事での知遇を得た。そのうえで、さらに多様性や立地、取材環境をもとに選考した対象について取材をすすめ（**表 1**）、WEB 版「地技カタログ＆マップ」にまとめた（**図 5**）。ここでは、メンバーのみならず「学生取材団」を結成し、若者の問いかけによって地技の伝承意欲を引き出すことも心がけた（**写真 1，2**）。

表 1　地技カタログ＆マップ　取材シート

地技カタログ&マップ東北　取材シート

1. データNo.（あとで記入）

2. 屋号 ※ふりがな付き

3. 所在地　県　都市町村

4. アトリエ区分
- 4-1. 立場　□つくり手　□つなぎ手　□ささえ手
- 4-2. 業種
  - もの系　□(1) 衣（繊維・工芸・一般製品ほか）　□(2) 食（農・水産・加工・飲食サ）
  - 場所系　□(3) 住（林・材・環境・建設・鉱業）　□(4) 交（運輸交通・観光宿泊ほか）
  - 近代系　□(5) 機（機械・情報通信・現代製品）　□(6) エ（電気水道ガス・エネルギー）
  - こと系　□(7) 販（販売・卸・小売ほか）　□(8) 金（金融保険・不動産・賃貸ほか）
  - ひと系　□(9) 医（医療・福祉・生活サービス）　□(10) 術（学術技術・教育・公務）　□(11) 他（その他分類不能なもの）

5. 代表者氏名 ※ふりがな付き　（　歳）（　年生まれ）

6. 体制
- 6-1. 人数　※分かれば家人数を書く（　）人
  - □1人　□4〜5人　□21〜30人
  - □2人　□6〜10人　□31〜50人
  - □3人　□10〜20人　□51人以上
- 6-2. 世代構成

最高齢年代	最も多い年代	最若齢年代
□10代	□10代	□10代
□20代	□20代	□20代
□30代	□30代	□30代
□40代	□40代	□40代
□50代	□50代	□50代
□60代	□60代	□60代
□70代	□70代	□70代
□80代	□80代	□80代
□90代	□90代	□90代

- 6-3. 体制について、その他の特殊な事情など（あれば）

7. 主な成果・作品の名前と素材、特徴
- A　名称　素材　特徴
- B　名称　素材　特徴
- C　名称　素材　特徴

8. 主要な協力先（仕入／外注／人材／支援／地縁団体ほか）

9. 事前情報
- □なし
- □あり：□新聞（　）　□雑誌（　）　□ホームページ　□その他

10. 貴アトリエは、何かに掲載されていますか？

取材日：　年　月　日（　）　取材者：　取材場所：

11. 主要な販路（直販／卸先／代理店／市場ほか）

12. あゆみ
- 12-1. その生業はいつから続けていますか？（時代、年代、何代目など）
- 12-2. 現在の生業にいたった経緯を教えてください。
  - □A 家業　□B 就職　□C 修業　□D 転職　□E 起業　□F 移住　□G その他（　）
  - （自由記述欄）

13. 生業の主目的
- 13-1. 専業の別　□専業　□第一種兼業　□第二種兼業
- 13-2. 主目的　□営利　□半営利　□非営利　□その他
- （自由記述欄）

14. 生業場の環境について（撮影画像キャプション）
- 手元（作業台まわりなど）　キャプション
- 近景（アトリエ内観）　キャプション
- 中景（アトリエ外観）　キャプション
- 中遠景（周辺環境）　キャプション

15. 貴アトリエが伝えたい「地技」とはどういうものですか？（例；○○が△△な手編の技）〔つくり手向け〕

16. 貴アトリエが届けたい「価値」とはどういうものですか？（例；○○でしか得られない△△な ××）〔つなぎ手向け〕

17. 貴アトリエが守りたいもの、環境、文化とはどういうものですか？（例；○○から伝えられてきた△△な××）〔ささえ手向け〕

18. その他、自由発言や気づいた点など

19. 貴アトリエの自己評価は？
- a. 創作・活動の質　b. 広報発信　c. 販路と利益　d. 素材・資源環境　e. 後継者の育成　f. 共創の仲間
- 5 かなりよい　4 まあまあよい　3 ふつう　2 やや問題がある　1 問題が多い

20. 回答者の基本事項
- 氏名：
- 担当・職位：
- 居住エリア：
- 連絡先：

※キーワードになりそうな語句にはアンダーラインを引いてください。

図5 地技カタログ＆マップWEB版 トップページ

写真1 学生による大崎市の農家取材

写真2 一戸町の漆掻き職人取材

【work02】地域資源クエスト

コアトリエ形成のつなぎ手・ささえ手を育成することを目的として、地域資源の利活用ワークショップツールとしてユーザーエクスペリエンスデザインの試作とワークショップを行った。試作過程では、有用性や課題を確認すべく、実装ワークショップを丸森町にて実施した（**写真 3, 4, 5, 6, 図 6**）。なお、当初「地域資源ジャーニーマップ」と称していたが、日本建築学会、デザイン学会での識者協議を経て、既定概念と区別する必要に帰着し、上記名称とした。

写真3 グループに分かれてワークショップ

写真4 進め方の解説と確認

写真5 想起と再発見の過程を記録

図6(右) ツールをWEBで公開

2-3-2. 開発実践（３つの特定プロジェクト＋追加プロジェクト）

自身の既往研究と基盤情報より得られた多様な事例をもとに、「衣／食／住」の好例・適地を選び、「コアトリエ形成」や「共創支援」などを特定プロジェクトとして進めた。実践にもとづく知見を得るとともに、多世代共創を実装へとステップアップさせる糸口を探った。

【work03】丸森シルクまなみやげ（特定プロジェクト１「衣」／宮城県）

宮城県伊具郡丸森町では、養蚕およびシルクに着目すると、養蚕家、織物作家などのいわゆる単アトリエが町内に散在しながら、必ずしも連携していないことが分かった。地技の保持者の多くは高齢者だが、若手の養蚕家も存在し、コミュニティ形成の中核には地域おこし協力隊員がいた。そこで 2017 年より、顔合わせを行い（**写真 6**）。相互に地技アトリエを訪問する会を重ね（**写真 7**，**図 7**）、繭細工の工房として間借りしている町家の一部を模様替えして（**写真 8**）、会議や共同作業、展示販売を行う、多世代共創の取り組みが始まった。

写真 6 養蚕家・つくり手の顔合わせ , 2017 年 5 月

写真 7 各工房を相互に見学 , 2017 年 6 月～10 月

写真 8 作品を持ちよる場の創出 , 2017 年 12 月

図 7 宮城県南端の立地／繭をめぐる共創の輪

2018 年には定期的催事のほか（**写真 9**）、コアトリエにおける新たな産品開発を本格化することとなり、中央に「共創テーブル＆シェルフ」を置くとともに（**写真 10**）、一連の作品を共通の小さなブランドで表現していくため「まなみやげ」なる名称を発案し、今後の布石とした（**図 8**）。

これを受けて、和紙を織り込んだタペストリー＆敷物、養蚕農家から譲り受けた「くず繭」等を生かして織ったマフラーなど、作り手らも意欲を高め、産品をもちよる年３回のイベント「丸森まなみやげ・夏展／冬展／春展」を開催した。これらの経過のなかで、他県の紡績メーカーから視察が来る、仙台市内のシルク商社が視察に来るなど、小さな反響があった。

2019 年には、夏展開催のほか、大日本蚕糸会の取材を行った。川上・川下連携の取り組みが各地で展開する一方、成功例は限られ、消滅したエリアも多くあることが分かった。そこで、後述する**【work13】**にて、オール宮城での共創可能性を検討した。なお、丸森の中核を担った地域おこし協力隊員Ａ氏の任務が同年 7 月で終了し、「まなみやげ」の新展開とともに、地域で求められていた「糸つむぎ」に焦点をあてた次世代活動（検討中仮名「まるもり糸ラボ」）に移行する方向が見出された。

写真 9　広がりをみせた丸森夏展 , 2018 年 7 月

写真 10 共創テーブルを製作設置 , 2018 年 12 月

図 8 共創ブランド「丸森まなみやげ」パンフ抜粋

【work04】大崎・農と食の生業景（特定プロジェクト２「食」／宮城県）

世界農業遺産に認定された大崎耕土（**図 9**）、その中核をなす大崎市を中心に、農・食に関わる地技型生業の担い手と人的ネットワーク、多世代共創の実態を把握するため、取材や活動協力を重ねた。とくに、人々が過去から受け継いだ社会資産に手を入れ続け、その価値の真正性を保持するという、世界農業遺産における「動態的保全」の考え方は、本プロジェクトとも通底するものがある。実際には、多様な地技が各地に散在しているが、それらの連携が維持されてはじめて水管理など農業システムや景観の保全が達成されるからである。

たしかに当地方には、世界農業遺産の関連資産か否かは別として、地技アトリエが散在する。岩出山エリアを中心に生業や景観、プレイヤーの調査を重ねたところ、凍み豆腐製造を行うＫ家やＮ家の視察（**写真 11**）のほか、農家、醸造家などのつくり手、農家ブランディングで活躍するつなぎ手（**写真 12, 13**）らと知遇を得、キーパーソンの構想と課題認識を聞くことができた。次世代リーダーの一人、唐辛子生産や調味料製造を手がけるＴ氏は、近隣の温泉街にて、農家が産物を持ちよってもてなす共創企画「農ドブル」などをけん引するほか、副業講座「工房ストローの藁細工ＷＳ」なども運営する（**写真 14, 15**）。

当プロジェクトからは、Ｔ氏の竹林から牡蠣筏用の竹材を搬出する海山連携の小さな試みを実践したほか、2019 年 9 月には、農・食・温泉街の多世代プレイヤーが共創する企画「TOJI WEEK」が開催され、沿道に学生屋台を出店する「海彦山彦市」にて支援協力を行った（**写真 16, 17**）。

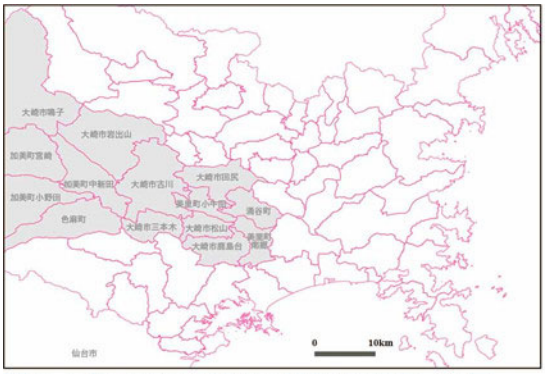


図 9 大崎市ほか世界農業遺産認定関連エリア

写真 11 岩出山凍り豆腐の生業景 , 2018 年 1 月

写真 12 共創で価値化を図るつなぎ手 , 2018 年 1 月

写真 13 名産醸造品を視察，屋内生業と景の再考

写真 14 唐辛子と中山間の農村風景を育てるＴ氏

写真 15 藁細工職人を招き副業講座 ,2018 年 12 月

写真 16 TOJI WEEK 会場の東鳴子温泉 , 2019 年 6 月

写真 17 TOJI WEEK で学生共創参画 , 2019 年 9 月

【work05】陸前スレート千軒講（特定プロジェクト３「住」／宮城県・岩手県）

その地に固有の素材がおりなす景観を守る建築技術も、地技型生業の一つに数えられる。この観点から、代表らの既往研究を発展させてきたのが**【work05】**である。陸前地方（宮城および岩手県南≒旧仙台藩領）は、日本全国の明治洋風建築に葺かれている石屋根「天然スレート」を局所的に産するエリアを有し、今なお周辺の民家・集落には、これらが惜しげもなく使われている。その嚆矢となった石巻市雄勝地区は、国内屈指の硯の産地であるが、この屋根材と硯石は同じ粘板岩を原材料とする。すなわち、地域固有の素材が工芸にも建築にも用いられているのである。このため本プロジェクトでは、景観保全と生業再生の両観点から、産業史を紐解いて産地周辺の４エリア（雄勝・入谷・登米・矢作）に着目し（**図 10**）、調査や技術継承支援を進めた。

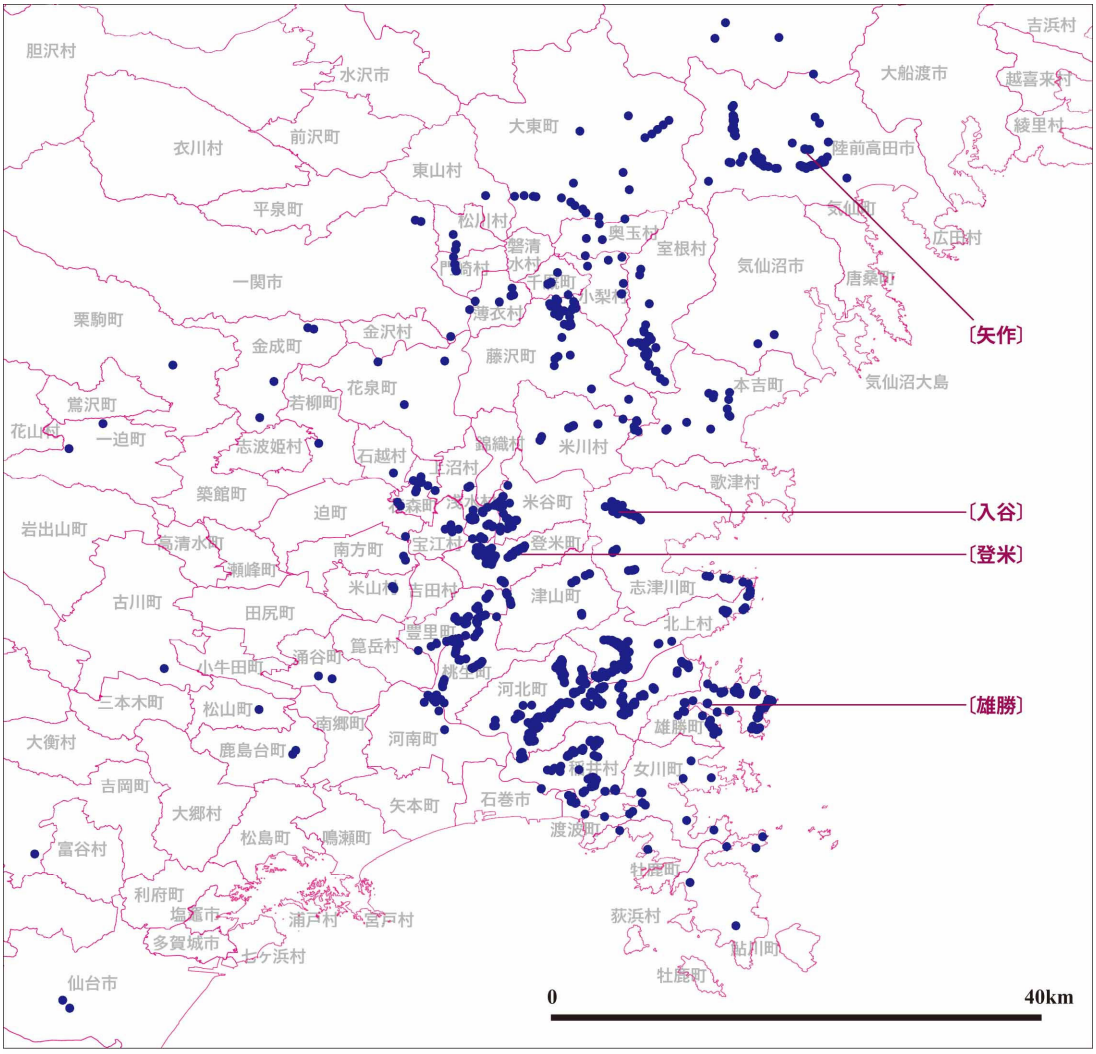


図 10 陸前地方主要部（石巻・登米・南三陸・気仙沼・一関・陸前高田他）のスレート民家建物分布

2017 年は、４大産地を縦断する企画「スレート千軒講ワークショップキャラバン」を行い、各地で地元関係者や技術者を招き、特徴や課題を話し合う一方（**写真 18～21**）、文化財保存の専門家にも相談した（**写真 22**）。沿岸部から平地農村、中山間まで、一見同質の家並み景観が広がるが、震災復興や人口減少、価値認識の多様と事情が細やかに異なることが再認識された。

写真 18 スレートＷＳ@雄勝大須，2017 年 6 月

写真 19 スレートＷＳ@本吉入谷，2017 年 7 月

写真 20 スレートＷＳ@登米寺池，2017 年 9 月

写真 21 スレートＷＳ@高田矢作，2017 年 11 月

2018 年から 2019 年には、産業史のメッカ雄勝にて、大須地区古家・K家住宅の調査や学習会を開催した。入谷では、同地区居住のスレート葺職人やコアメンバーと協議・調査を重ねた。登米では、景観まちづくりの講話を行ったほか、別事業にてスレート葺きの商家建築の活用デザインに協力し（**写真 23**）、民俗資料の記録協力も進めた。さらに矢作では、景観保全のささえ手（かつ、つかい手）である住民らが「矢作天然スレートを守る会」を発足させ、2019 年 3 月には雄勝大須で開かれた調査報告会に住民代表らが足を運んだ（**写真 24**）。このほか、国選定石盤葺技術者の佐々木信平氏が主催する技術講習会に協力するなど、つくり手・つかい手・ささえ手との反復的な連絡調整を進めてきた。

これらを通して、広域にわたる特異な地方景観の保全において、情報・資材・技術をゆるやかに共有し、厳密な文化財保存を高コストで進めるのではなく、地域主体で活用しながら保全するコミュニティ・ネットワーク「スレート千軒講」の取り組みを具現化する基盤が構築できた（**図 11**）。

また、一連の活動成果が関係業界で伝わったことから、専門誌「建築士」（日本建築士会連合会）にて、これに至る建築史研究の経過や活用保全の考え方を紹介する連載記事の依頼を受け、2019 年 2 月号から 12 月号までに掲載され、本プロジェクトを紹介する場ともなった。

写真 22 文化財専門家への相談，2017 年 5 月

写真 23 登米市都市景観協議会等，2018 年 10 月

写真 24 矢作スレート保全会視察，2019 年 3 月

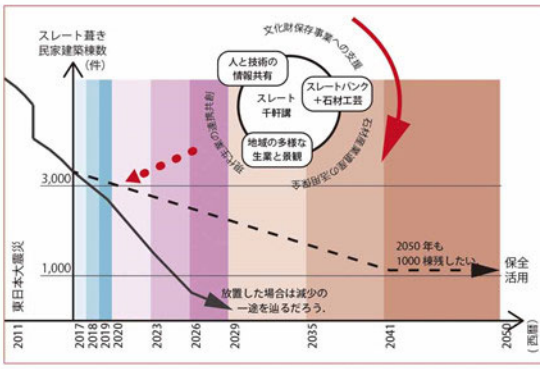


図 11 スレート千軒講の基礎概念と取り組み目標

【work06】石巻牡鹿・井内石を活かした震災慰霊碑の設計（追加プロジェクト・宮城県）

2018 年、後述のサミットにも参加した石巻市の稲井石材商工業協同組合より、代表者に対して、市発注の慰霊碑等設置業務へのプロポーザルコンペへのデザイン協力依頼があった。これに応えたところ当選となり、その設計・建設に対し、全面的に協力した（地区名は主に「稲井」、石材名は主に「井内」を用いる）。

井内石もスレートと同じ粘板岩に属し、稲井地区もまた雄勝地区に隣接する（**写真 25**）。このため、割裂を主とする石材加工法や（**写真 26**）、産業史の栄枯盛衰は類似するものがある。大型材を産することから、戦前までは石碑、戦後は墓石を経営主体としてきたものの、いずれも将来の大型需要は見込みがたい。このため、建築や環境構成要素への参入を企図していたが、大型材から墓石加工へシフトしていた生業の実情もあり、震災復興の重要な業務を受注できずにいた。

そこで、環境デザインにおけるランドマーク的構造物は、共創に加わった地元技術者が扱いやすい鉄筋コンクリート性とする一方、銘板や芳名板、台座、舗装面などに様々な表面仕上げの井内石を用いることで、石材そのものは小径ながら、多様な利用可能性が感じられる造形を心がけた（**写真 27**）。本作はＰＪの直接成果ではないが、産業史をひも解き、地技をもつ人々の力を結集して風景を共創したという点で、関連成果の一つに数えた。

写真 25 稲井石材商工業協同組合 採石場

写真 26 井内石の割加工風景

写真 27 牡鹿地区慰霊碑等設置業務 工事完了直前風景（石巻市牡鹿地区）

2-3-3. 比較研究

基礎調査と学習支援ツール（2-3-1）をもとに「地技型生業」の広がりを把握する一方、衣食住３様の特定プロジェクトにおける開発実践を深めることで、多世代共創の可能性や課題を探求してきたが（2-3-2）、これらを様々な比較対象に照らして考察する必要がある。このため、地技型生業の参集場の一つと考えられる「手づくり市場」の比較研究【work07】や、産業遺産と文化的景観の比較研究【work08】、生業と町並み景観の比較研究【work09】をすすめた。

【work07】東北地方における手づくり市場の比較研究

昨今「〇〇市」「〇〇マルシェ」といった催事が開かれているが、これらは地技型生業の成果を持ちよる場として、一定の意義を有している可能性がある。そこで、東北の事例も多く扱っている WEB「つう工房」の情報から各々の動きを整理したところ 68 件が抽出された（表 2）。開始 10 年になる「お薬師さんの手づくり市（仙台市）」をはじめ（写真 28）、昭和初期の蚕室群を現代流に活かした「kito kito マルシェ（新庄市）」（写真 29）、500 年以上の歴史をもつ「五城目朝市」（写真 30）など、実に多様であった。

多世代共創の観点からは、秋田県五城目町の展開が特筆される。新世代が取り組んで３年になる「五城目朝市＋（プラス）」なる動きが興り、醸造業を営む古家の試飲ギャラリー（写真 31）やこどもが遊べる空き店舗活用（写真 32）が創出される一方、農村部では「村民税」と称する会費で運営する古民家の宿「シェアビレッジ町村」（写真 33）が人気を博す。キーパーソンの多くは県外出身者で、シェアオフィス「馬場目ベース」（写真 34）も展開している。つくり手・つなぎ手・ささえ手の多様な連携が起こり、歴史ある市場の多世代共創が実現している。

表2　東北６県における手づくり市68件の多様

	No.	市区町村	名称	併設タイプ	出展募集数
青森県	1	青森市	夏の工芸学校	公共施設	30
	2	青森市	青森クラフトフェアA-line	商業施設	120
	3	板柳町	クラフト小径	公共施設	200
	4	黒石市	こでんてん 手しごとアート展	街路	28
	5	五所川原市	アートクラフト展・あじ彩	公共施設	100
	6	田子町	タブコブマルシェ	文化財	50
	7	八戸市	はっち市	公共施設	90
	8	平内町	椿山クラフトキャンプ	公共施設	50
	9	弘前市	津軽森	公共施設	160
	10	弘前市	ひろさきアートマルシェ	公共施設	80
秋田県	11	秋田市	秋田アートクラフト市	商業施設	60
	12	仙北市	秋彩こみちinかくのだて	公共施設	60
	13	仙北市	たざわこクラフト市	公共施設	120
	14	仙北市	あきた芸術村　手創る市	商業施設	61
	15	仙北市	仙北は❤あーと展	商業施設	30
	16	大仙市	秋田手作りマーケット カラフルdays	公共施設	30
	17	大仙市	大曲手作り雑貨マーケット	公共施設	30
	18	にかほ市	にかほっとクラフト市	公共施設	60
	19	横手市	よこてお城山クラフトフェア	公共施設	115
	20	横手市	秋田ふるさと村アート＆クラフトフェア	公共施設	100
岩手県	21	一関市	花泉互市（春・秋）	街路	60
	22	一関市	一関ハンドクラフト展	公共施設	40
	23	岩泉町	いわいずみ手仕事市	街路	80
	24	金ケ崎町	グリーン・スマイル・フェスティバル	商業施設	100
	25	北上市	夏油てしごと市・新緑まつり	商業施設	69
	26	北上市	夏油てしごと市	商業施設	40
	27	雫石町	どんぐりコロコロCRAFT市	商業施設	50
	28	紫波町	ポラーノまつり	商業施設	36
	29	滝沢市	チャグチャグ馬コの里・工房フェスタ	商業施設	150
	30	花巻市	アート&クラフト@土澤マーケット	街路	320
	31	花巻市	花巻温泉商店街ストリート　クラフト市	街路	65
	32	盛岡市	手づくり市 “てどらんご”	文化財	70
宮城県	33	加美町	加美マルシェ	公共施設	30
	34	蔵王町	宮城蔵王クラフトフェア	公共施設	75
	35	柴田町	しばた匠まつり	公共施設	60
	36	仙台市	定禅寺ストリート　杜の都のアート展	街路	200
	37	仙台市	新寺こみち市	街路	80
	38	仙台市	杜の都のクラフトフェア	街路	70
	39	仙台市	earth day tohoku	公共施設	114
	40	仙台市	ハハノワ	公共施設	80
	41	仙台市	Smileマルシェ	商業施設	110
	42	仙台市	Hand Art Marche	商業施設	100
	43	仙台市	まちくるマルシェ	商業施設	100
	44	仙台市	手ん店　あきうクラフトフェア	商業施設	100
	45	仙台市	秋保ハンドメイドテント村	商業施設	50
	46	仙台市	荒井なないろマルシェ	商業施設	20
	47	仙台市	お薬師さんの手づくり市	文化財	130
山形県	48	酒田市	中町わくわくマーケット	街路	30
	49	酒田市	まつやま大手門くらふとフェアー	文化財	120
	50	寒河江市	寒河江の 野の市 ののの市	公共施設	75
	51	寒河江市	さがえクラフトフェア「てとて市」	公共施設	40
	52	新庄市	kitokitoマルシェ	文化財	100
	53	鶴岡市	こしゃってマルシェ	公共施設	20
	54	鶴岡市	鶴岡クラフト・フェアin小真木原	公共施設	150
	55	東根市	手づくりたんとマルシェ	公共施設	60
	56	山形市	七日町クラフト天国	街路	180
	57	山形市	みはらしくクラフトミュージアム	公共施設	100
	58	山形市	みはらし手しごとマルシェ	公共施設	20
	59	山形市	山形クラフトフェアinピッグウイング	商業施設	80
	60	山形市	ＭＯＮＯＭＯＮＯマルシェ	商業施設	50
	61	遊佐町	クラフト・フェスタ島	商業施設	60
福島県	62	郡山市	ふくしま手づくりマルシェin郡山	公共施設	60
	63	伊達市	モノ作りびとフェアinつきだて花工房	公共施設	50
	64	福島市	福島空港ハンドメイドマーケット ソライチ	公共施設	120
	65	福島市	あつまTeshi-got市場	公共施設	100
	66	福島市	ふくしま手づくりマルシェ	商業施設	47
	67	三島町	ふるさと会津工人まつり	公共施設	160
	68	南相馬市	みなみそうまものづくりフェア	公共施設	30

※基礎調査はWEB「つう工房」掲載情報を元にし、その後WEB/文献/電話ヒアリング/実地調査等を重ねた．詳細は 木村一気「東北地方における手づくり市場の研究」東北工業大学大学院 修士学位論文（設計）要約集, 平成30年度

写真 28 仙台・薬師堂手づくり市

写真 29 新庄・キトキトマルシェ

写真 30 数百年つづく五城目朝市

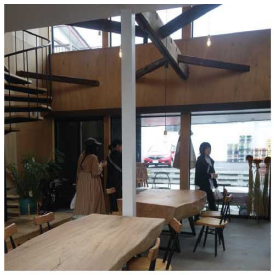


写真 31 醸し室 HIKOBE

写真 32 ただの遊び場

写真 33 シェアビレッジ

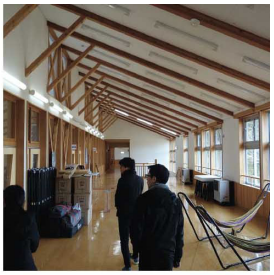


写真 34 馬場目ベース

【work08】産業遺産と文化的景観の比較考察

列挙抽出した地技アトリエ情報【work01】を定置するため、一定の客観的評価を受けた生

業・生業景観を参照すべく、東北７県における「産業遺産」「伝統的工芸品」「文化的景観」をマップ化し、また海外視察等を通して生業景のありようを再考した。

東北の産業遺産は、地下資源や灯台・隧道など近代開発を代表するものが多い（**図 12**）。対して文化的景観は、自然環境との格闘を示す歴史的なものが多い（**図 14**）。それらのあいだに育てられてきた伝統的工芸品は、起源を近世以前とするものが多いが、分布域が産業遺産とやや近いものもある（**図 13**）。つまり広大な東北において、さらに多様な地技を「主体的に」評価し、指定の有無に関わらず活用保全していく視点が重要であることに帰着する。

なお陸前スレートの場合、これら３つの地図のいずれにも関連づけられる地域文化資産であって、この分類しにくい面にこそ特徴があるともいえる。そこで、海外のスレート産業の現状および建物保全・産業遺産と比較するため、英国の産業遺産と台湾の文化的景観を視察した。

前者では、独自の文化と風光を有する英国ウェールズ北部に局所的に粘板岩を産するエリアがある。ここが航路・鉄路で結ばれ、石材産業が華開き、地元の民家にも使用されたことは類似している（**写真 35**）。現在も採掘が続けられ（**写真 36**）、国立スレート博物館までもが開設されている（**写真 37**）ことは、産業革命でも産業遺産でも先駆を走る英国らしい一面といえる。

他方、後者の台湾では、いわゆる原住民村といわれる少数民族の集落と、市街地の日治時代の建造物の双方のスレート屋根を確認した。日治時代の石材は陸前地方から送られたとみられるが、先住民の集落景観も個性的で、廃村ながら観光地化しようとしている老七佳村（**写真 38**）、町並みの至る所が巨石で構成される霧台村（**写真 39**）、台風害で集団移転してもなお住形式のなかに石材を取り入れた礼納里村と（**写真 40**）、各々の違い、地域素材への固執を確認した。

以上より、改めて**【work05】**を念頭に、東北各地の産業遺産／文化的景観を小活すると、それぞれの一面的特質を保存するだけでなく、屋根下の地技型生業を統合的に捉えた「景」を見出して価値を置き、活用保全を考える本プロジェクトの方針に、一定の意義を再確認した。

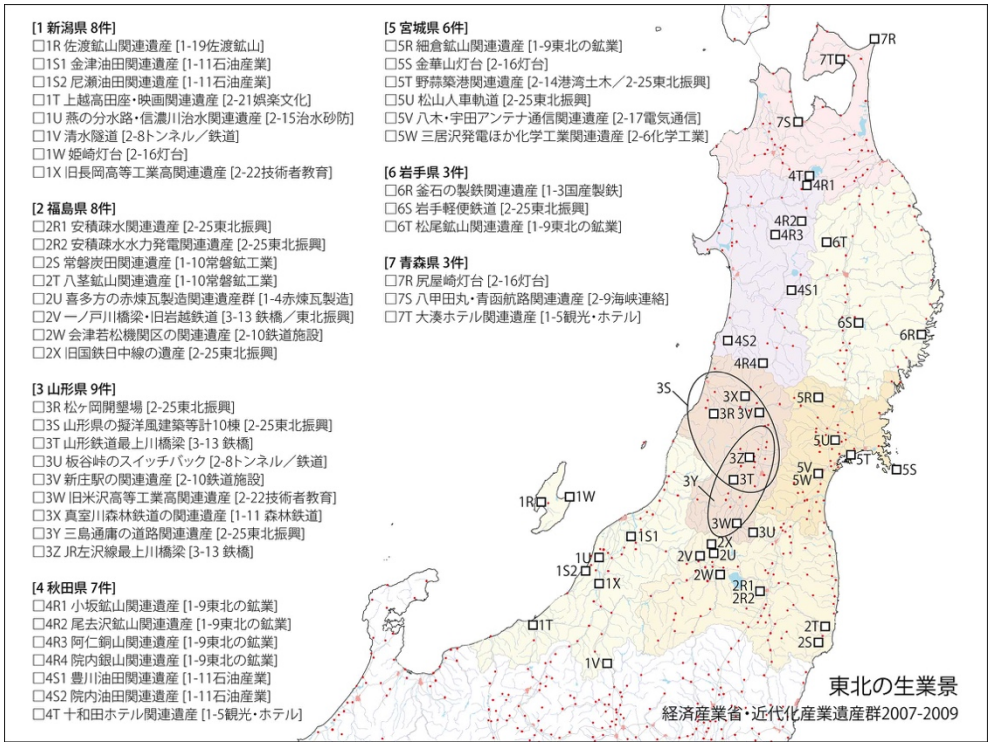


図 12 東北７県の主な近代化産業遺産

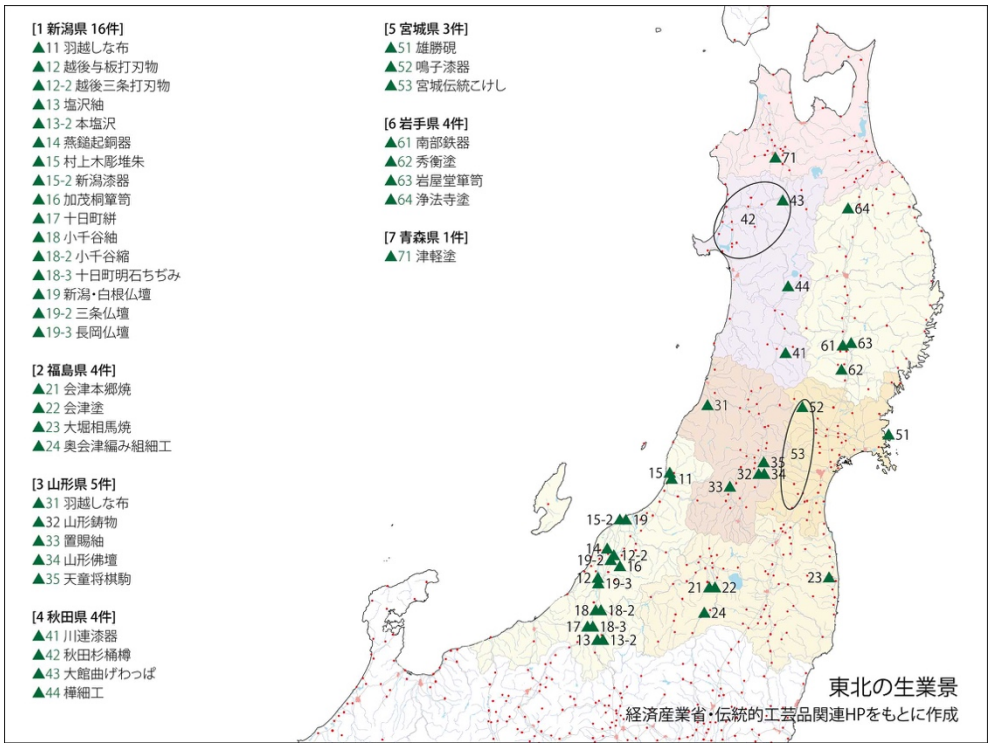


図 13 東北７県の主な伝統的工芸品

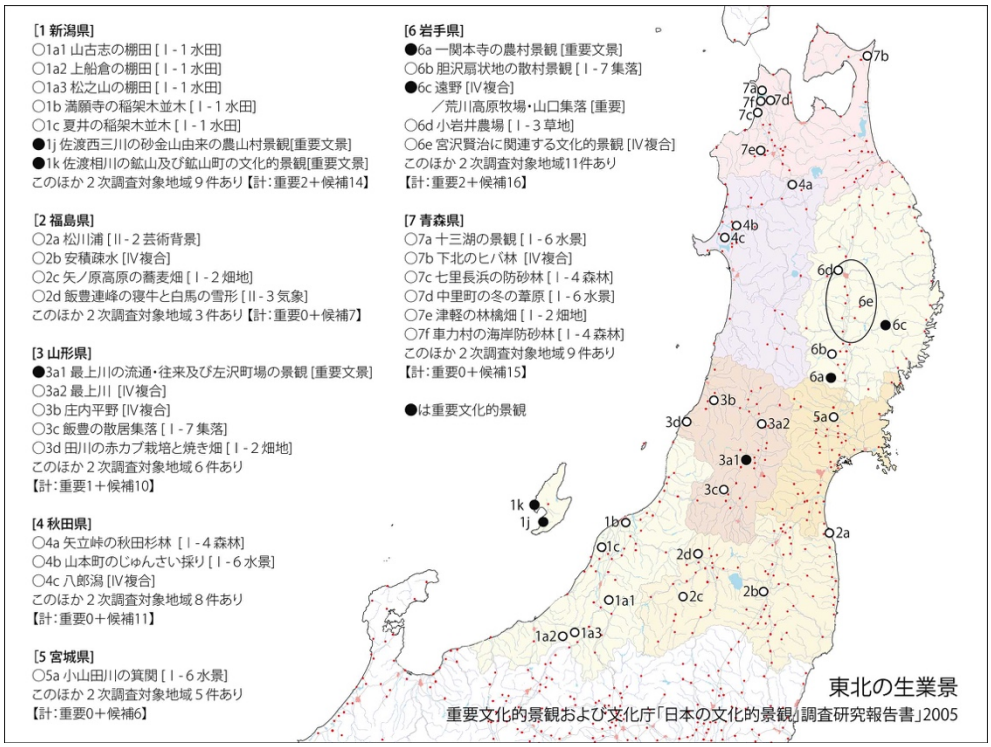


図 14 東北７県の主な文化的景観

写真 35 北ウェールズの町並み

写真 36 ペンリン採石場加工場

写真 37 国立スレート博物館

写真 38 観光廃村・老七佳（ラオチーチャー）村

写真 39 巨石からなる霧台（ムタイ）村

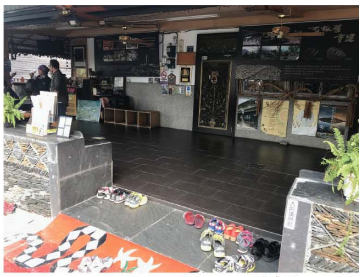


写真 40 水害移転した礼納里（リナリ）村

【work09】地技型生業と町並み景観の比較研究

海外を含む広域の視点から比較考察した前述の内容より、改めて地技型生業と町並み景観の連関重要性に帰着したことから、国内各地で視察した経過概略を報じる。

まず、東北農山漁村において重要な生業景の文化遺産がある。元鶴岡藩士らが拓いた松ヶ岡開墾場（**図 12,3R**）は、特定プロジェクト**【work03】**にも関連する東北蚕糸絹業の先駆で、現在は日本遺産に選定されている。ここを拠点の一つとする地元繊維会社は、SAMURAI SILK と銘打ったシルク洋装品を海外向けに製造・販売している（**写真 41**）。

また、日本海側は豪雪地帯が多く農閑期に工芸等が発達したが、経済調査のほか副業の開発につとめた積雪地方農村経済調査所（雪調）が昭和 8 年、新庄に設置され（**写真 42**）、90 年近く経った現代も、条件不利地の生業再生に示唆を与える。

さらに、日本海域の北前船寄港地と瓦産地の沿岸地域の民家の家並み景観に着目し、北海道（函館市）、秋田県（秋田市・由利本荘市・にかほ市・西目町）、山形県（遊佐町・酒田市・鶴岡市）、富山県（高岡市）、石川県（金沢市・加賀市・輪島市）、島根県（太田市・浜田市）、兵庫県（南あわじ市）の視察調査を実施した。生業（瓦産業・漁業・北前船）があって生まれ現代まで継承される瓦屋根の家並み景観は、生業景の遺産と位置づけられる（**写真 43**）。

一方、より積極的に現役の「生業景」を確認できる対象として、西日本の焼き物のまちの事例を挙げる。九州佐賀では伊万里が代表的であるが（**写真 44**）、その一部でもあった有田（**写真 45**）がとくに近代に栄え、有田の支援産地だった波佐見が最近はむしろ注目されている（**写真 46**）。他方、大分県日田市の小鹿田焼（おんた，**写真 47**）は、窯元の作家性ではなく、産地製法を厳守した造りに人気が高まっている。また中京地方では、常滑（**写真 48**）や多治見（**写真 49**）などが著名だが、いずれも生業場が外面し、煙突や登り窯が建ち並ぶ光景は、生業景として分かりやすい。ちなみに、石巻市の旧観慶丸商店は、瀬戸物商時代にこの地方で集めたタイルを約 100 種類散りばめた意匠である可能性が指摘されており（**写真 50**）。地場素材のみならず、産業がつくる景観の動態性や広域連関性を示唆するものといえる。他方、新潟県の三条燕地域では、「KOUBA の祭典」において生業場を期間限定で公開している（**写真 51,52**）。興味深い取り組みで、捉えるべき景のありようを検討するうえで示唆に富む。

いずれにせよ、つくり手・つなぎ手の別や兼務、開放／閉鎖性、時季・時間、活動者の人数や

行動といったファクターも「景」に関係する。また、著名産地の産業遺産のほか、被災地など新規創成する景（**写真 53**）もある。いわば「景の多世代」も想定できることなどが指摘された。

写真 41 松ヶ岡開墾場，洋装展開

写真 42 積雪地方調査所の生業景

写真 43 北前船住文化圏と羽州瓦

写真 44 伊万里 大川内山

写真 45 有田 伝建地区

写真 46 波佐見 中尾山

写真 47 日田 皿山地区

写真 48 愛知県常滑市の町並み

写真 49 岐阜県多治見市の町並み

写真 50 石巻・旧観慶丸商店

写真 51 三条・鍬鍛造の生業場

写真 52 三条・梨栽培の生業場

写真 53 大槌・サケ養殖の生業場

2-3-4. 発信交流

[1]基盤情報、[2]開発実践、[3]比較研究の３項目をもとに、より開かれた社会技術研究とするため、情報発信の方法として、**【work10】**季刊誌発行・WEB および**【work11】**サミット＆マルシェを企画運営した。SNS 発信も併せて行ったが、小さな地技アトリエに対する取材内容は、個人情報に近い内容となるため、広く・浅く・早く・小まめな SNS 発信よりは、近く・深く・何度も読み返せる媒体を主軸とすることにした。なお、WEB も整え、発信力を補完した。

【work10】季刊コアトリエおよびWEBサイトの編集・発行

季刊小冊子「コアトリエ」は、プロジェクトの記録、広報、発信を漸進的に進めるため、それまでの約３ヶ月間に実施した内容を編集したものである。現在、第９号まで各号1000部を発行し、知遇を得た協力者らに加え、関心ある研究者や市民に提供、好評を博したる（図15）。また、ＷＥＢサイトは、季刊誌情報のほか催事の告知などを載せ、機能を果たした（図16）。

図15 季刊コアトリエ 第１号～第９号

図 16 本プロジェクトの紹介 WEB サイト

【work11】コアトリエとうほくサミット＆マルシェ

コアトリエとうほくサミット＆マルシェは、知遇を得た多くの地技アトリエ群のなかから各分野の取り組みを持ち寄り、成果や課題について話しあうことを目的とした催事である。同時に、市民に向けて作品・産物などを発信する場としてマルシェ会場も用意することで、協力者にとってのメリットも考慮した（**図 17**）。2018 年 9 月 1 日、サミットはせんだいメディアテーク（**写真 54**）、マルシェは勾当台公園市民広場「LIVE+RALLY PARK」（**写真 55,56**）で開催した。

当日はやや悪天候のため、人出がやや少なかったが、マルシェ会場では周知によって来訪した人々に加え、通行客が足を止める場面もみられ、個性ある出展者が異彩を放っていた。ただし、日本建築学会大会の関連企画とすることでメディアテークの使用を実現したものの、マルシェ体験者がやや離れた会場のシンポジウムに赴く例は限定的だったとみられ、関心層以外にも波及するイベント企画手法については広報や催事の専門家指導を仰ぐべきだったかもしれない。

とはいえ、各分野が一同に会し、相互に成果や課題を話し合うというサミットとしては、一定の成果が得られた。前半は、衣・食・住のセッションごとに、分野の共通言語をもって情報共有を行い、後半は総括座談会を行ったが、ここでの討議経過はイラストを交えたグラフィックレコーディングなる手法にて記録した（**写真 57～写真 60, 図 18～図 21**）。

セッション「住」では、**【work05】**に関連するスレート４産地の関係者・技術者に加え、茅葺き技術者Ｓ氏および野鍛冶専門店経営者Ａ氏らを招致した。全国から鍬の補修依頼を受注するＡ氏によれば、鍬ほど多様な土地のかたちに合わせた造形物はなく、独自の地技データベースが形成できる可能性があるという。またＳ氏によれば、伝統的な茅葺きは、ヨーロッパでは富裕層が現在も求めるが、日本では過去のものとされ、良さを発信するため仮設構造物を用いて社会教育にも参画している。スレート関係では、住民自らが「屋根を守る会」をつくった矢作地区の紹介があり、つかい手、ささえ手の重要性も再確認され、相互への関心と質疑応答が旺盛であった。

セッション「衣」では、【work03】に関連する丸森シルクの関係者・技術者に加え、大野木工生産グループのN氏に登壇いただいた（前日の豪雨で真室川町の藁細工多能職人T氏は欠席）。東北工業大学の支援による裏作工芸から 40 年、大野木工からは、他人に渡したくないほどの作品、地技に至っているのかを今なお自問している、という深い内省の談がある一方で、自然体で続けながら徐々に共創を始めつつ暗中模索しているという丸森女性陣のことばがあった。地技共創活動としては先輩・後輩になる両者の多世代対話は興味深く、また双方が、互いに敬意を表していることが印象的であった。欠席となったT氏の新庄地方での取り組みのように、単アトリエ「帯」ともいうべき連携のあり方や、共創地域間の広域交流の可能性をも感じる時間となった。

セッション「食」では、【work04】に関連する唐辛子生産の Th 氏、NPO で和ぐるみ活用を探求する盛岡の Tr 氏、気仙沼地域戦略の O 氏、そして阿仁マタギ関係の S 氏らと、多彩な顔ぶれとなった。マルシェを含めた特徴ある紹介に始まり、営みを支える人的体制・仲間や、守りたい／変えたいものなどを話し合った。授かり物を全員で分配するという阿仁マタギの普遍的シェア、単アトリエ農家ながら若手が連帯した大崎岩出山、くるみ拾い含め高齢寄りの多世代で進める岩手盛岡、そして漁師から水産関係その他まで多様な連携がある気仙沼と、共創の多様性が浮き彫りとなると同時に、恵みの根源である自然や「景」の重要性にも立ち返る討議となった。

そして、総括セッションでは、山形大学教授・山形在来作物研究会会長の江頭宏昌氏、丸森町教育長の佐藤純子氏、BLUEFARM Inc.代表の早坂正年氏、RISTEX 多世代共創社会のデザイン領域アドバイザーの大和田順子氏に登壇いただき議論を重ねた。登壇者らが進めてきた先駆的活動においても、20-30 代の若手が地技に価値を見出し始めており、鍛える意味では抵抗勢力となる高齢世代が居てもいいくらいであるが、むしろ若手に期待しすぎるほど、ある意味では共創が求められている状況が示唆された。「寒い夏はカブラ漬け」といわれ、お盆に作物の良否を占い、収穫時の美味さではやや欠ける在来品種を大切に伝えてきた鶴岡市温海地方や、「一焼百生」といわれ、営みののちに万象が生まれ出る生物多様性を念頭に、祈りを捧げて火を入れる宮崎県椎葉村など、育ててきた価値、意義を、近年は都市民や若者が、再評価し始めている様相が伺えるという。そして、民俗学者・宮本常一がイネの衣食住活用を指摘するように、むしろ地技の各分野は、相互に連関した分かちがたい事象であることも確認された。

だが一方で、災害や環境変容による獣害などが深刻化しており、針葉樹林を広葉樹林に戻すなど、人間側が行うべきことも山積している。世界農業遺産などの社会的評価が、こうした問題解決への気運をはぐくむ一助となることが期待されると同時に、きちんと「食える」農や食の現場が不可欠、との話も展開した。美味なものがあふれるなかでは、他と差別化できる物語性や発信力が必要であり、よそ者・若者・バカ者が騒ぐだけでなく、中心に「本物がある」ことが、こどもの教育などに照らしても重要であることが指摘された。

そして、そうしたことを育む「共創の場」、あるいはその「仲間づくり」がはじめの一歩となる。ただ、コアトリエを例にとれば、共同の「コ」を、ただ寄り添うだけと解釈するのでなく、多様で自立・自律した「個」をめざして痛快に頑張ることを理想とすることが健全と考えられる。その力を養う場としても、コアトリエは活かせるのではないかと考えられ、そうした学習の場としての役割をも再認識することとなった。

なお、これらの詳細は、ページを大幅に増刷した特別編・コアトリエ第 7 号に記している。

図 17 コアトリエとうほくサミット＆マルシェ 告知フライヤー（左＝表，右＝裏）

写真 54 会場 A：メディアテーク

写真 55 会場 B：勾当台市民広場

写真 56 マルシェ内体験コーナー

写真 57 サミット・セッション「住」

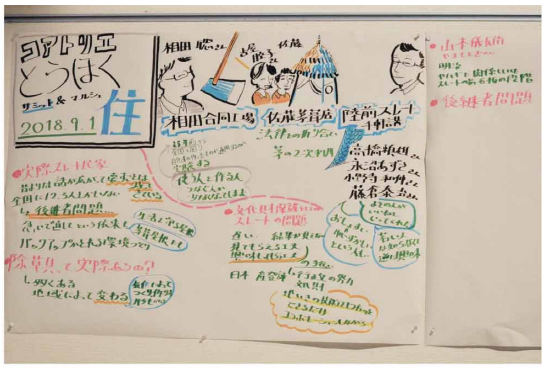


図 18 セッション「住」グラフィカルレコード

写真 58 サミット・セッション「住」

図 19 セッション「衣」グラフィカルレコード

写真 59 サミット・セッション「住」

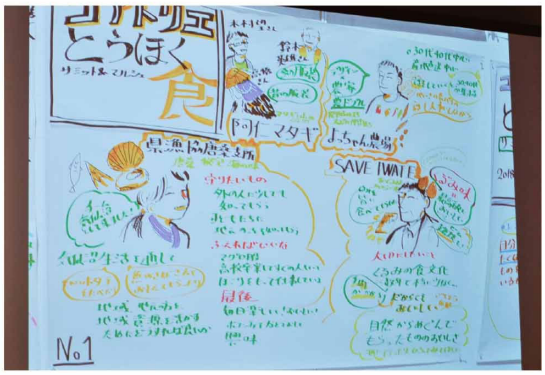


図 20 セッション「食」グラフィカルレコード

写真 60 サミット・総括座談会

図 21 総括座談会 グラフィカルレコード

2-3-5. 共有検討

３年間のプロジェクトの後半からは、[4]発信交流 に続いて、[2]開発実践 に立ち返っての課題共有・解決を目した【work12】フィールド・ワークショップや、【work13】コアトリエ・オープンラボを行うことで熟議検討に重きを置き、今後の取り組みを方向づけることとした。

【work12】フィールド・ワークショップ

特定３プロジェクト、【work03 丸森】【work04 大崎】【work05 スレート】に関わるフィールド・ワークショップついて概略を記す。

【work03 丸森】では、同じ町内における異分野間の連携素地を組立て、まなみやげブランドを立ち上げたものの、養蚕家と創作者の連携に不足があることや、作品評価と価格設定などが課題であった。このうち後者は、期間内に大きな方向を見出すことはできなかったが、前者は、養蚕家と創作者をつなぐ「糸」の重要性に帰着した。すなわち、糸自体を地域で製造しにくいという蚕糸絹業界特有の構造的問題（国内の製糸会社が２社に限られ、それらへの出荷を最優先にせざるを得ないなど）があり、それ自体が高価であるため、日常使いの素材となりにくい。だが大日本蚕糸会のヒアリングなどでも明らかになったように、これからは淘汰がさらに進むこともあり、安定量産する産業と個性を出す生業の併存がポイントになる。すなわち、能率が悪く不均一で高価な糸であっても、地元で製造することで一定のニーズに応えられるのであれば、実施の意義はあることになる。そこで、絹・綿・麻などの染め／織りを多彩に手がけるまなみやげメンバーのアトリエで座繰技術を相談したり（写真 61）、学生の研修を兼ねた古式の座繰器を復原したりと（写真 62）、糸の問題を解決するための小さな相談・共創を重ねた。

【work04 大崎】では、個々の農家の取り組みや食品開発製造が一定の評価を受けている一方で、それらの連携が可視化され、景観を含めた地域の価値に反映されることが課題である。そこで、地域屈指のつなぎ手・ブランディング会社を営むＨ氏らが着目したのは地元の温泉街であり、これを活かすための企画が TOJI WEEK である。本プロジェクトとしては、仮設構造物で交流場をつくる協力など（写真 63）、相談と共創に参画してきた。また、農家が背景を整えることの重要性をつよく意識しているのが、サミットにも登壇した Th 氏である。そこで本プロジェクトからは、Th 家の孟宗竹林から、東松島の大規模牡蠣養殖業を営む Ts 氏に養殖用の竹材を切り出せないかという提案を持ちかけた（写真 64）。なお現段階では、基本的方向については合意されたものの、双方の需給バランスの着陸点には至っていない。今後の可能性に期待したい。

【work05 スレート】では、産地周辺を中心とした陸前地方広域の分布状況、それぞれの違い、歴史地理的な概略が明らかになったものの、相対的に古式な民家物件が雄勝地区を中心に被災したことから、個別物件の歴史学的編年に曖昧さを残し、文化的価値を明確に説明しにくい事情が残されていた。もちろん、石材生産の再興が可能であるのか、さらには文化財修復への対応、技術継承など課題は尽きないが、「スレート千軒講」なる連携組織の存在が関係者に認知されてきたことから、むしろ学術的な不明点の解明も急がれる。こうした経緯のなかで、これまでの実地踏査でとくに古式さを醸していた雄勝町大須地区のＫ家住宅の調査を行い、地元に報じる機会を得た（写真 65）。陸前高田市矢作地区のスレート屋根を守る会の面々も参加したのがこの企画で、広域連携の萌芽という意味では一定の成果といえる。また、仙台市中心部の東北大学構内に残されていた歴史的建造物の屋根詳細調査について所有者側から連絡を頂戴し、国内トップの屋根葺き師２名に検分頂く機会を得た（写真 66）。これらによって建築史学的に明らかになった点は日本建築学会にて報じ、今後のスレート民家の評価にも活かせるものと考えられる。

写真 61 丸森 - 座繰り糸の相談

写真 62 丸森 - 複製座繰器の報告

写真 63 大崎 - 温泉街の空地視察

写真 64 大崎 / 鳴瀬 - 海山連携

写真 65 雄勝 - K 家住宅調査報告

写真 66 仙台・屋根構法史の相談

【work13】コアトリエ・オープンラボ

特定プロジェクトに重点を置きつつ、現代東北の実情に照らして興味あるテーマを設定し、車座談義を行う公開研究会である。関係者を含め約 40 人の定員が埋まり、議論を交わした。

○ラボ・セッション１『みやぎ蚕糸コアトリエの展開可能性』

丸森町養蚕農家の M 氏、宮城県蚕糸会事務局の Y 氏、養蚕指導員の A 氏、結工房 Y 氏、染織工房琉の N 氏、佐野地織保存会の H 氏、陽だまり工房の A 氏の計 7 名を迎え、特定ＰＪの中核である A 氏のコーディネートで、川上から川下にわたる課題について共通認識を持つことができた。近代日本を支えた蚕糸絹業が淘汰された現在は、一定量を生産販売する養蚕家に配慮しながらも、東北のこの地だからこそ、また手技だからこそ得られる風合いや特徴に可能性がある、といった意見が交わされた。また、そのためのオール宮城での連携の可能性や、核となる『糸』の製造の重要性が確認され、今後も同様な機会を創出する方向で一致した（**写真 67, 68, 図 22**）。

写真 67 みやぎ蚕糸絹業界の方々

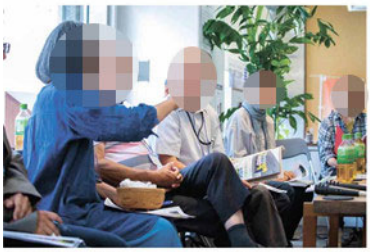


写真 68 川上・川下連携の可能性 図 22 セッション１ G. レコード

○ラボ・セッション２『秋田・しょっつる研究会の歩みとこれから』

研究会のＴ氏、Ｓ氏を招致し、名物しょっつるの形成史や７店舗の違いを紹介頂くとともに、産官連携によるさまざまな状況改善の取り組みについて話を頂いた。これに対し、大崎市岩出山からは、よっちゃん農場のTh氏夫妻に、しょっつるとの比較を交えながら、唐辛子生産や製品加工にまつわる話、周辺環境の変容、さらに竹林を通しての海山連携の話を頂いた。北陸の「いしる」に起源をもつとされ、西日本に営業をかける戦略案も出たが、甘めに味を変えることは本末転倒となる。何を守り何を変えるか、誰に届けるのか。地元の風景にどう還元されるのか。食の地技を多彩に彩る調味料関係者に談義頂いた効果が現れ、視点の広がる談義となった（**写真69, 70, 図23**）。

写真69 しょっつる研究会の紹介

写真70 宮城の調味料製造農家と

図23 セッション２ G. レコード

○ラボ・セッション３『青森・北の工芸ネットワーク』

青森県弘前市から木村木品のKm氏、仙台箪笥を手がける熊野洞のKn氏、大学の木工場で技師として教えつつ家具作家を続けるＳ氏に対談頂いた。Km氏からは、玩具から建築未満までの広領域にわたる仕事を紹介。商品の質が営業力というつくり手の自負から、地元のりんごの木を活かした玩具まで、グローバルとローカルを横断した仕事を紹介頂く一方、Kn氏からは、伝統工芸を通して人をつくり、地域をつくるという考え方、伝統継承の苦悩などを紹介頂いた。創作の質向上だけでなく、資源を活かす新たな取り組み、担い手論が討議されたが、対して、小さくとも自由で分野を超えた創作要請に対応することで、結果的に有効活用したい木材資源が集まってくるというＳ氏の仕事法も現代的で、今後のつくり手像の可能性を三者三様に示唆頂いた（**写真71, 72, 図24**）。

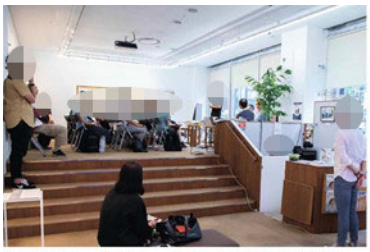


写真 71 木工・家具関係の参集

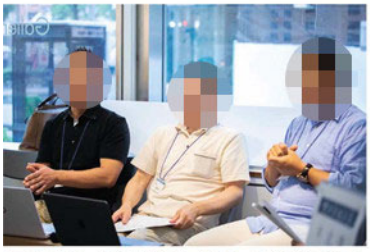


写真 72 経営者から独立創作まで

図 24セッション３ G. レコード

（ラボ・セッション４）『みやぎの景保全と建築技術者の共創』

建築の活用保全をテーマに、「つかい手」「つくり手」の意見交換をした。被災地・雄勝にて人々の思いを結びつけ、オリーブを新たな復興名産品にしようという海の開拓者らしい Tm 氏、地元の旧家を、国籍不明なるコンセプトによって比類ない魅力的な空間に変貌させている人気カフェ・くさかんむり主宰者の Sr 氏・所有者の Sn 氏に、資源活用の自由な視点を示唆頂いた。対して、宮城の建築士会で保存活用の動きを先導している Tn 氏・K 氏からは、寄せられる相談・ボランタリーな業務と、大きく見える事業費イメージとの乖離、保存論が技術者に閉じがちであった実情が吐露された。ゆえに、立場を超えた人々の共創が重要で、Tm 氏、Sr 氏のような「つかい手」を中心とした「活用を通しての場の共創」を広げるべきことが確認された（**写真 73, 74, 図 25**）。

写真 73 建築と［景］保全

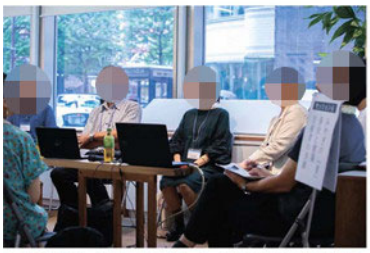


写真 74 活用主体と技術者が談義

図 25
セッション４
G. レコード

（ラボ・セッション５）『岩手・鉄のストーブがつくる環境社会』

釜石のエジソンとも呼ばれる石村工業の I 氏、木材や薪炭をはじめ山林の保全に多面的に取り

組んでいる登米町森林組合のT氏に対談頂き、環境配慮建築を手がける東北工業大学教授の武山教授に進行役を依頼した。鉄鋼業が幕を閉じるという岩手県釜石市におきた危機のなかから、アイデアと製作力で克服した鉄ストーブの力強さは印象的で、これに加勢するようにT氏からは、山林の現状と保全に関わる超世代的視点、木質バイオマスは発電よりも直接熱源とすべき、というあるべき活用法が説かれた。広大な山林があちこちで粗放化している現在、用材・熱源としての川上・川下流通に立ち返りつつ、新たなライフスタイルを形成することが重要で、これをSDGsのなかで再定置する議論にも達し、まとめに相応しい重層的な談義となった（**写真75, 76, 図26**）。

写真75 鉄のストーブと森林資源

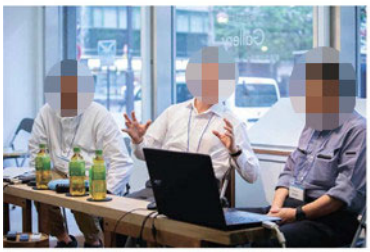


写真76 木材の川上と川下で談義

図26 セッション5
G. レコード

2-3-6. 総括論考

本プロジェクトでは、広大な東北地方において、地技と生業景の再発見、価値化をめざし、実践と思考を往復しながら再考を重ねるプロセスを経てきた。その成果・結論は、第3章の結果・成果にて報じるとして、ここではとくに、多世代共創モデル**【work14】**について、「景」の意義と関係性**【work15】**について、の2点が重要論点であったことを記しておく。また、この「総括論考」なる実施項目を受けて、本プロジェクトでは後継となるヴァーチャル研究所の設立に至った**【work16】**。

【work14】地技型生業の多世代共創モデル

本プロジェクトが注目する地技型生業の多くは、農山漁村に散在し、しばしば孤立している。このことから、どのような共創があり得るのか、当初は「多世代」に拘泥せずに、取材と特定プロジェクトでの創出試行から考察を重ねた。

状況としては、地技の体現者が高齢化し、外部からの関心層が若手であるという異世代の出会いを起点とする状況が分かりやすく、これを考察の起点としたが、その内実は多様であった。また、地技型生業に従事するプレイヤーの多世代のほか、生業そのもの、そして景そのものが多世代と捉えられる視点も指摘され、考察はいくつかのフェーズで論じる必要に帰着した。

【work15】地技型生業と相補的環境を総括する「景」の視点

生業景、生活景を、本プロジェクトではどのような概念領域として定義し、それを地技型生業

とどう結びつけるのか、思考は紆余曲折を繰り返し、一時は生業論だけに命題をしぼることも検討された。しかし、SDGs をはじめとした包括的視点、自然豊かな東北を主対象域とした地技型生業こそ、その周辺環境とどう関係づけられるのかを考察すべきとの認識に立ち返り、副次的テーマとして考察対象に据え続けることとした。もちろん主要メンバーが建築学に帰属し、日常的に景観の問題を扱っており、「住」の地技型生業もテーマに含めたことも一因である。その一方で、プロジェクトの経過において「景」の視点の重要性を再認識する場面も少なからずあり、後述の結語では、これらを通して得られた基本的考え方について報じる。

【work16】生業景デザイン研究所の開設と継続研究

本プロジェクトにより、地技型生業と景観論に関する一定の成果を得たことから、今後は特定プロジェクトを継続するとともに、事例収集を重ね、さらなる知的統合をめざす共創研究グループを形成したいと考えた。おりしも、代表者の所属大学においてヴァーチャル研究所を奨励する動きが出てきたことからこれに応じ、開設することとなった。ここで、統合知のイメージをどう設定するかを討議した結果、地技型生業を産業経済として、あるいは社会文化として捉まえる視点が想起できるものの、代表者が拠って立つ建築・景観論に帰着することが、これまでの文脈を活かしながら研究を継続させる最善法と考えられた。幸い「生業景」は本プロジェクトで創出した新しい概念であり、これを深めていく研究所名を標榜することとし、「生業景デザイン研究所」とすることとなった。

そこで、**【work13】**に連続した３日目の催事として、2019 年 8 月 21 日に「生業景デザイン研究所開設記念シンポジウム・この地から醸成する東北の生業景」を東北工業大学一番町ロビーにて開催した。約 70 人の定員が埋まり、レクチャと討議を重ねた。

基調講演では、「＜民藝＞のレッスン」などの著作で知られる鞍田崇氏（哲学者・明治大准教授)、「ソローニュの森」「柿（こけら)」が注目を集める田村尚子氏（写真家）の二人を招致し、「景」の意味を熟考する機会を得た（**写真 77**)。

続いて、地技カタログ＆マップの情報収集状況、生業景デザイン研究所のＷＥＢ開設計画、前日までのオープンラボ**【work13】**の結果について研究報告を行ったあと、最終座談会では、領域アドバイザーの大和田順子氏（NPO 法人ロハスビジネスアライアンス共同代表）に登壇頂き、本プロジェクトの評価や位置づけについてのコメントを頂くとともに、鞍田氏とも親和性深い山間部の地技型生業や、世界農業遺産に関する講話を頂いた（**写真 78**)。この新しい研究所が、単なる情報収集・記録を超えて、何をどう見つめるのか、何に気づき、何を生み出せるのか、思考を深める好機を得た。

写真 77 基調講演・鞍田氏(右)と田村氏(左)

写真 78 生業景の可能性について討議

3. 研究開発結果・成果

3-1. プロジェクトの目標達成状況及び結論

本プロジェクトでは、地技型生業の共創様態を「共同アトリエ（CA）」と定義して、具体例の創出・育成・支援を図るとともに、そのありようを多世代共創に鑑みて考察し、可能性を提示することを主目標とした。また、地技型生業が営まれる景観を「生業景」、生業景を含む総体的なくらしの風景を「生活景」と定義し、持続可能な資源活用管理に照らした生業と景との関係性に関する基礎概念を得ることを副次的目標とし、この両者を全体目標に掲げた。

また、これを達成するための具体的目標として

Ⅰ　農山漁村「共同アトリエ（ＣＡ）」の実践事例創出とモデル提示

Ⅱ　地技の連携・共創を育むコミュニティ・ネットワーク形成のための情報共有ツール開発

Ⅲ　生業景／生活景の基礎概念検討および記録・事例的考察

を掲げ、研究開発プロジェクトを実践してきた。

これらを通して、以下の結論が得られた。上記３点の具体的目標に関する達成状況は、その後に述べる。

【結論その１　主目標：多世代共創による地技の継承発展と共同アトリエの可能性】

農山漁村各地には、地域資源・環境と、これらを活かして価値を生み出す地技が、現在もなお散在している。またこれを評価し、新たな価値創出、地技型生業に結びつけようとする若い世代も活躍しはじめている。地技および地技型生業は、20 世紀的な貨幣経済の面では最後尾にみえても、持続可能な開発目標（SDGs）的な観点においてはフロンティアに再定置され、かつ、多世代共創の実現例と重なり合うことも少なくない。そしてこのとき、共同アトリエ（CA）という様態は、地技の継承発展に寄与する可能性を有している。

本プロジェクトでは、それらの事例調査と具体例の創出・育成・支援を通して、以下のような様態の可能性に帰着した。

◆プロセス・リストラクチャリング型：CA-P；Co-ateliers for Process restructuring
　産業成長期に成立した川上・川下の分業を再び結びつける CA。丸森蚕糸絹業の関連生業でつくる共創事例「丸森まなみやげ」の例など。

◆インナー・ダイバーシティ型：CA-I；Co-ateliers by Inner district diverse players
　従来共同することがなかった域内の多様な異分野生業を結びつける CA。農家・食産業・温泉街が共創した宮城県大崎市の「湯治ウィーク」の例など。

◆エリア・ビヨンド型：CA-A；Co-ateliers with groups located beyond their own Areas
　旧領域を超えて広域連携する CA。「スレート千軒講」の例など。

◆コミュニティ・サポート型：CA-C；Co-ateliers with Community supported
　ユーザーが技術者と共創する「スレート千軒講」の例など。

◆ビジネス・リード型：CA-B；Co-ateliers by Business leading activities
　企業が地技再生をけん引する「気仙沼ニッティング」の例など。

なお、本プロジェクトでは、地域の主体性を重視し、必ずしも認知・評価が十分でない潜在的事例を集めたため、CA-B の事例には関与していないが、一般的には経済的効果が期待される事例として参照できよう。また「スレート千軒講」のように、一つの様態が複数類型にまたがることはあり得ると考えている。

ところで、共創の持続性・更新性は、要点の一つである。プロジェクトベースの単発的な共創活動は共同アトリエとは呼びにくいが、共創活動の永続が自己目的化するような硬直化した様態では、新たな価値創造には至りにくい懸念もある。そして、共創の世代構成と中核が重要である。多様な事例を観察すると、構成メンバー（人）の多世代や生業（組織）としての多世代が混在するが、実質的に共創をけん引するリーダーや事務局的な人材の重要性にも帰着する。近年の例では、地域おこし協力隊など若手が担うことも少なくなく、血縁、地縁、分野、立場、同世代的価値観などにとらわれない純朴な遂行力が、多世代共創の中核となり得ることが示唆された。

以上、地技の継承発展をめざすうえで、一定の持続性・更新性と、中核的人材の重要性に鑑みながら、上記５様をはじめとする多世代共創の共同アトリエが有効となる可能性が示された。また、具体例の創出・育成・支援を実践することで得られた多くの副次的知見を顧みると、こうした「地技と多世代共創」は、今後の地域計画における要点となると考えられる。

【結論その２　副次的目標：地技と生業景の基礎概念】

地技型生業において、その地技は真に地域で育まれたものなのか、トレーサビリティや文化的特質などの真正性は維持できているのか、といった課題を考えるとき、持続可能な環境資源の活用管理（サステナブル・リソース・マネジメント、SRM）の重要性に帰着し、生業・活動と、それを成立させる背景・立地性とを関係づける包括的概念の必要性に帰着する。

「生業景」は、このSRMに関わる包括的概念のうち、景観的表象をとらえた新概念である。端的には地技型生業の現場写真が想起されるが、正確には、資源から地技を経て製品になり、つなぎ手・つかい手へ届く川上から川下までのプロセスや、当該の地技をささえる重要な背景を含めた地域の総体も重要であり、「景」は、その「生業『系』の断片」ともいえる。つまり、一つの地技型生業に対して、生業景を１枚の写真で表すことはできるかといえば、否というほうが明瞭である。その表現に可能性が認められるとすれば、それはアートの領域とも考えられる。

一方、生業景を視覚情報に限定するのも本質に欠ける懸念がある。地技とは、五感のすべてを動員するものに他ならないからである。つまり、生業景は、２点以上の静止画や動画、あるいは音や臭気など五感に訴える空間情報を総合して「景」と解釈するもので、それによって、地技型生業が保持している資源・環境・社会の結びつきが把握できる情報群、と考えることができる。

他方、地技型生業の痕跡が現れつつも、そこに人影がない景観や、過去のものとなってしまった景観が、農山漁村のあちこちに存在する。これらについては「生業景遺産」と定義することで、現役の生業景と区別することができる。もちろん、人々の関与によって再び資産（現役の生業景）に復活させられる可能性も有している。そして、生業景や生業景遺産を含む、人と生活行為と周囲環境の調和に注目したランドスケープのまとまりを「生活景」と再定義する。

これらは、研究期間全体を通じて紆余曲折しながら帰着した考察の成果である。斜陽の手仕事生業を偲びながら活性化するのであれば、民族文化映像研究所「映像民俗学シリーズ」の後続を探求することも一方法かもしれない。しかし現在は、地技がより断片化、淘汰されてしまったと同時に、SDGs的観点から、営みそのものがもつ環境連関性を問われ、かつ、未来に活かされる道を探る必要性に迫られている。「景」なる切り口を、遺産活用や環境連関性の糸口とする構想に対し、上述の実践３プロジェクトをはじめ多くの現場との知遇が考察を支えた。

以上、本プロジェクトでは、地技型生業が地域の資源・環境と相補的な営みであることを確認するための「生業景」なる概念提示を行い、それらが現代的な価値を生み連鎖することにより、最終的に「多彩な生活景の醸成」という社会的価値につながる、と総括した。好印象な写真１枚だけでは表しにくい生業景や生業景遺産を見出し、地域的あるいは分野的に情報群を収集・共有しておくことは、さらなる循環共創型の地技型生業を生み出すことにもつながると考えられる。

【目標達成状況：具体的目標の３項目をもとに】

Ⅰ　農山漁村「共同アトリエ（CA)」の実践事例創出とモデル提示

開発実装面では、３つの特定プロジェクトにおいて、地域主体の多世代共創による地技型共同アトリエ形成にかかわる取り組みを創出・育成・支援し、さらに１つの実物（牡鹿慰霊碑）を創出することができた。実施項目別に再掲すると

① 丸森まなみやげ（本プロジェクトの関与：創出）**【work03】**

・・・町内に散在し、それまで必ずしも協力関係には至っていなかった５軒の養蚕家、染織家、地織保存会、繭細工、和紙工房といった地技型生業に従事する人々が集まる機会をつくり、蚕糸絹業の川上川下が集う共創ブランド「まなみやげ」を立上げ、旧家店舗の一角を改装した拠点を整備して共同アトリエ空間を形成した。その事務局を、製糸・染織に深い関心をもつ地域おこし協力隊員が務めたこともあり、CA-P 型の多世代共創に至った（詳細は 3-4-2)。

② 大崎湯治ウィーク（本プロジェクトの関与：一部支援）**【work04】**

・・・まず、米、豆、発酵・醸造食品、凍み豆腐、調味料、農家とデザイン事務所の融合会社など大崎市に散在する多彩なプレイヤーへの取材を重ねた。とくに、隣接する鳴子地区の温泉宿に自慢の料理を集めてもてなす新企画「農ドブル」を手がけた若手が、旧来の湯治文化に示唆を得、域内の異分野共創による新たな滞在スタイル「湯治ウィーク」を開発企画していたことから、これを一部支援し、CA-I 型の共創様態を観察した（詳細は 3-4-2)。

③ 陸前スレート千軒講（本プロジェクトの関与：育成）**【work05】**

・・・宮城から岩手県南の北上山地の一部で局所的に産する粘板岩・陸前スレートは、石巻雄勝の硯をはじめ、文具・工芸・食器、屋根外装建材に用いられる変幻自在な石材で、全国の洋風建築に葺かれる一方、二次良品が地元民家に波及し、独特の広域文化的景観を呈している。職人ら専門のつくり手、集落住民（つかい手）と、各地と連携しながら生業景遺産の活用保全をめざす CA-A 型／CA-C 型の「共創コミュニティの広域ネットワーク化」を主導、育成した（詳細は 3-4-2)。

上記３つは、多様な CA のありようを考える好機となったが、その歩みは必ずしも順調ではなく、課題解決のためのフィールド・ワークショップ**【work12】**等を重ねることで、個別の目標達成に漕ぎつけることができた。もちろん、地域経済に波及するほどの理想的事例には至っていないが、本プロジェクトによって創出・育成・支援が叶い、期間終了後も関係が継続されていることは、CA の具体例として実装に近づいていると考えることができよう。

研究面では、実践と併行して、東北各地から 100 を超えるアトリエ群を情報収集し、その一部については学生団とともに取材を行い、「地技カタログ＆マップ」にまとめた。このカタログ＆マップは、取材協力頂いたアトリエ関係者が情報共有できる半公開型の WEB ツールで、将来的な異分野・地域内外の共創に資することも念頭に置いている。

これらを通し、地技を担うつくり手、地技に関わるつなぎ手・ささえ手・つかい手の多様な実態を明らかにして、地技、地技型生業、生業景等の諸概念を　表３　のように定義づけた。

表３　本プロジェクトにおいて創出・提言した重要な用語と語意

用　　語	語　　意	事例・備考
地技 じわざ	地域の資源・環境を活かして価値を生み出す技能・技術のこと。本プロジェクトにおいては、「地域の資源・自然環境を育んできた前世代から引継いで、身体的技能を用いて価値創出を行うつくり手」を、主たる「地技の担い手」と捉える。	農業や蚕業の技能、食品加工技術、鍛冶技能、伝統的建築技能など

地技型生業 じわざがた なりわい	一次から高次産業まで様々ある生業・活動のうち、地技（地域の資源・環境を活かして価値を生み出す技能・技術）をもとにした生業・活動のこと。本プロジェクトにおいては、安定した貨幣価値を生み出すものに限定しない。	農・漁家、林業家、養蚕家、陶芸家、染織家、大工、鍛冶屋など
地技アトリエ じわざ あとりえ	広義の「アトリエ」のうち、地技型生業（地域の資源・環境を活かして価値を生み出す技能・技術をもとにした生業・活動）を実践する創作場のこと。本プロジェクトにおいては、専用の建築空間などの設えがあるものに限定しない。	農作業場、倉庫、加工場、工房・工場、田畑、樹園、一部の研究所など
共同アトリエ （コアトリエ） きょうどう あとりえ	主に異分野の地技型生業（地域の資源・環境を活かして価値を生み出す技能・技術をもとにした生業・活動）が、繰り返し共同参画して創作・開発にあたる共創様態のこと。本プロジェクトにおいては、権利・義務を調整する同業者組合は概念に含めない。	丸森まなみやげ、大崎農ドブル、スレート千軒講、三条鍛冶道場など
生業景 なりわいけい	地技型生業（地域の資源・環境を活かして価値を生み出す技能・技術をもとにした生業・活動）と、それを成立させる背景・立地性を関係づける２点以上の静止画（作業近景と中景の写真）や、動画などの空間情報群。音など五感を含めてもよい。	田畑と食品加工現場の２枚一式画像、建設現場と槌音、魚醤店とその臭気など
生業景遺産 なりわいけい いさん	地技型生業（地域の資源・環境を活かして価値を生み出す技能・技術をもとにした生業・活動）の痕跡を示す景観遺産のこと。産業遺産景観のうち、身体的技能を伴った痕跡のある景観要素が主対象で、すでに人や作業現場が現役でない景観も含める。	農地・生垣・庭園・剪定樹木、石積み、工場跡、無人のスレート民家など
生活景 せいかつけい	生業景や生業景遺産を含む、人と生活行為と周囲環境の調和に注目したランドスケープのまとまり。本プロジェクトにおいては、農山漁村を主対象としたことから、生業景および生業景遺産を含め、とりわけ地技に着目した地域景観を指している。	生業景や生業景遺産を含む農山漁村の風景、コアトリエ活動と周辺の風景など

また、基盤調査【work01】をはじめ、多様な比較研究（市の研究【work07】・産業遺産と文化的景観【work08】・生業と町並み【work09】）等を参照し、催事（サミット＆マルシェ【work10】・オープンラボ【work13】）などにおいて多様な事例を傾聴・取材・観察しながら、多世代共創に留意して検討した結果、地技に着目した多世代共創のありようを把握するための「地技共創シート」を基本モデルとして考案・提示し、結論の導出に役立てた。

この基本モデルは、「共創のありようを総括する地技型生業・活動群の記入用紙『地技共創シート』」である（図 27）。また、地技に着目した多世代共創のありようを把握するための「地技共創シート」を考案・提示した。これは２つの図表からなる。一つは「多世代メンバー表」で、縦方向に共創参画者の年齢を、横方向にはメンバーのライフバースケールを列挙して、多世代共創の状況が一目でわかるようにしたものであり、もう一つは「共創体制マトリクス」で、メンバー・生業の動きが「資源・環境⇔ユーザー」「伝統継承⇔現代的価値」の２軸それぞれにおいて、どちらに比重をおいたものであるかをプロットするものである。本シートは、どのような歩みをもつ生業が、どのような特徴をもって共創しているのかが瞭然となることから、結論の導出に有用なものとなった。

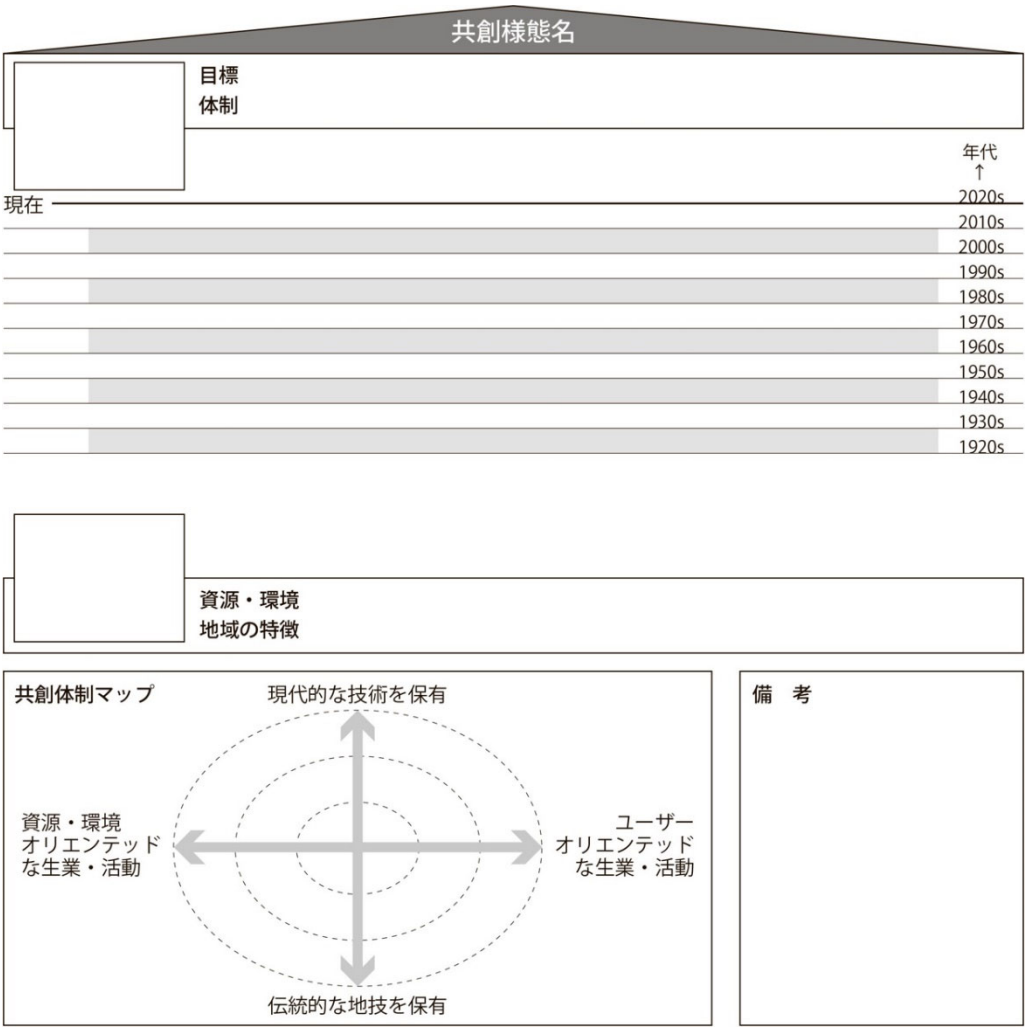


図 27　地技共創シート（記入用）

このシートについて、記入例を例示する。まず、世代模様をみる。２つのつくり手（赤帯）、つなぎ手（青帯）・つかい手（黄帯）・ささえ手（緑帯）が１つずつ、計５件の生業・活動が共創に至り、このうち設立 20 年に満たない最若手の「ささえ手」が事務局を担ったと仮定する（**図 28**：記入シートは白黒、事例別記入内容はカラーとした）。ここで、設立・取得 40 年程度の「つなぎ手」「つかい手」と、若い事務局の計３件は、いずれも地技とは言い難いが、世代を超えて続けてきたつくり手２件は「地技」といえ、この共創様態における支柱となるだろう。これら５件が赤い糸で結ばれ、共創様態を示しているが、その結びつきにも幾つかの段階がある。プロジェクトベースの連携、日常的な連携、日常的な共創、そして経営的共創と、ここでは４段階に分類した。次に共創体制マップをみると、事務局（ささえ手）を原点に置いたとき、地技のつくり手２件は相対的に、伝統的な地技を有した資源・環境オリエンテッドな生業・活動（≒第３象限）といえるが、つかい手はもちろん、つなぎ手などは、むしろ現代的な技術を有したユーザーオリエンテッドな生業・活動（第１象限）に位置づけられよう。

つまり「地技共創シート」を用いることで、共創のありようを総括しながら、多世代の構成を把握するとともに、地技型生業を併有しながら不足する技術を補う共創計画にも活かすことができるのである。

なお、調査事例の適用例については、リサーチ・クエスチョンにて報じることとする。

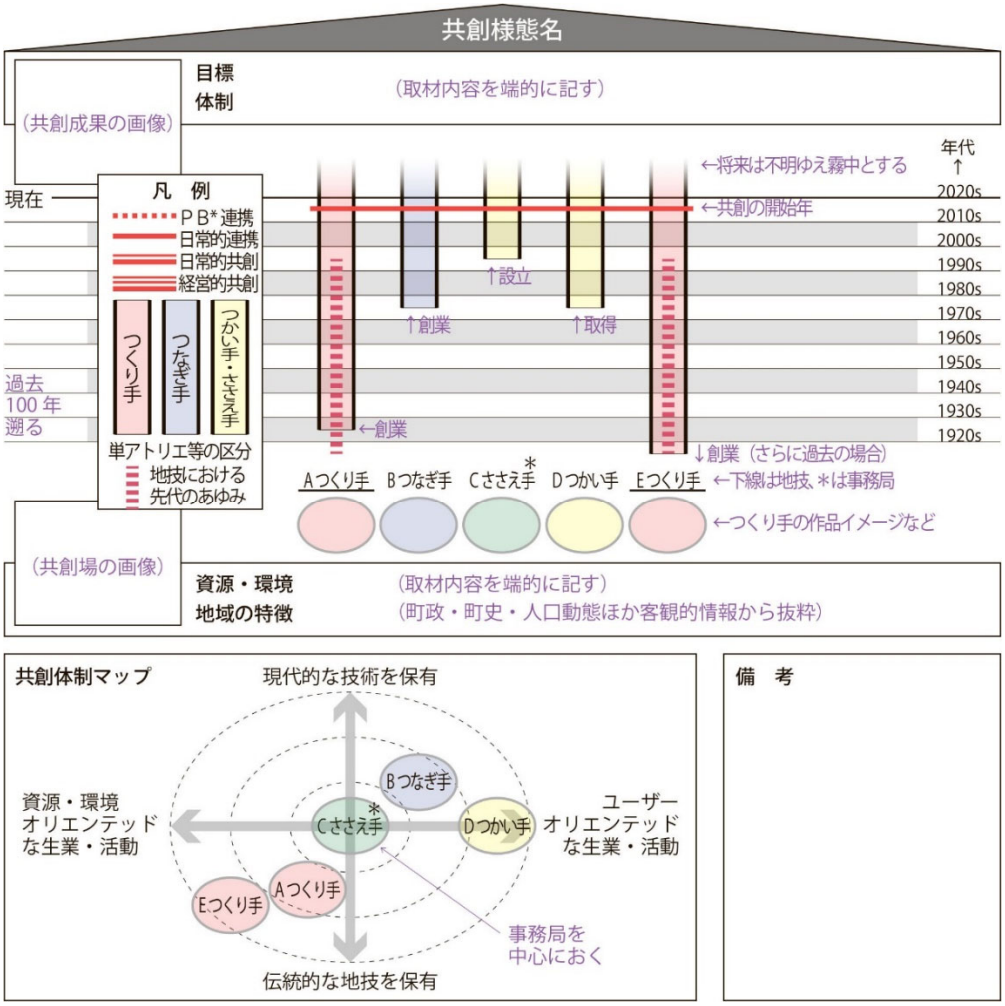


図 28　地技共創シート（記入例）

Ⅱ　地技の連携・共創を育むコミュニティ・ネットワーク形成のための情報共有ツール開発

本プロジェクトは、基礎研究・特定プロジェクト・比較研究からなる中核活動と、これを研究メンバー外に報じ、開かれた場で議論を重ねる活動（コアトリエ・サミット＆マルシェやコアトリエ・オープンラボ）の二重構成とした。このことにより、着想から帰結までの直線的フローを連ねるのではなく、開発と研究が双方向的に進むような動態的プロセスを採った。

これに資する情報共有の手法・実施項目としては、比較研究（市の研究【work07】・産業遺産など【work08】・生業と町並み【work09】）等を参照し、多様な事例を取材・観察しながら、基盤調査の一環として「地技カタログ＆マップ」を制作した【work01】。これは後継の生業景デザイン研究所【work16】においても継続している。

また、一般市民への意識啓発も必要であり、地域資源を再発見する手法として「地域資源クエスト」なるワークショップツールを開発した。ユーザーエクスペリエンスデザインにおける「ジャーニーマップ」を参照し、地域資源を擬人化して、その活用法を検討、共創することを意図したものであり、地方創生系統の市民協働事業等において活用できるよう、オープンなものとしている【work02】。

なかでも重要視したのは、個別事例を匿名化して浅く広く早い発信を行うのではなく、具体事例を載せ、得られた知見を反すうし、その後の展開について関係者に繰り返し相談できるような

報告・発信媒体をつくることである。結果として、もっとも効果的なツール兼アウトプットとなったのが、活動報告誌「季刊コアトリエ」である【work10】。期間内に第 1 号から第 9 号までを発行し、最終年度には総集編を兼ねた第 10 号を発行した。また、季刊誌を核としたホームページの開設、イベント時の SNS 発信を行い、意識層に閉じがちだった活動の周知に尽力した。

また、開かれた議論の場として、関心層以外にも話題を提供することを意図し、話し合いの場と協力者の作品販売を兼ねた「サミット＆マルシェ」と【work11】、より密なテーマ別討議を交わすための「オープンラボ」【work13】の２様を試行した。前者については天候不順等もあり、周知・発信に課題が残ったが、後者は充実した議論を重ねることができ、結論の導出にも大いに寄与した。

以上５つの諸活動【work01,02,10,11,13】を通して、地技の連携・共創を育むコミュニティ・ネットワークの形成に資する情報共有ツールを開発してきた。以上から、概ね上記の目標は達成することができたと考えている。

なお、予定外の共創プロジェクトとして、期間中に知遇を得た石巻市の稲井石材商工業協同組合から研究代表者が協力依頼を受け、被災地・牡鹿地区の慰霊碑・モニュメントの設計に携わった【work06】。この石材および地域は、特定プロジェクトでもある陸前スレートと起源が近い粘板岩であり、斬新な近代的構造部と伝統的な石材利用を併設したデザインとしてまとめあげ、概要を「シェルと空間構造に関する国際学会 IASS2019（バルセロナ）」にて報告し、活動報告の一つに加えた。

Ⅲ　生業景／生活景の基礎概念検討および記録・事例的考察

生業景については、特定３プロジェクト【work03,04,05】、追加プロジェクト【work06】、産業遺産と文化的景観【work08】、生業と町並み【work09】、サミット＆マルシェ【work11】、オープンラボ【work13】、そして論考・地技型生業と相補的環境を総括する景の視点【work15】を通して、考察を重ねてきた。

田畑、養蚕や保存食の干場、水産加工場、地域産材の加工場など地技のある「生業景」は、その生業の地域立脚性を担保し、価値化にもつながる。また、そうして形成された田園風景や家並みなどの「生活景」は、地域のくらしを包みこむと同時に、地技の社会的価値を可視化すると考えられる。生業が経済的効果を生むことは直接的な目標であるが、それのみで十分とするのは地技型生業とは言い難い。こうした点をふまえ、基礎概念を検討した結果、上記「結論」に述べた内容に帰着した。

なお補遺になるが、特定プロジェクト（大崎【work04】）の主要なプレイヤーである T 氏は、代表者らによる初ヒアリングの席で、「自分たちが農業を継いでいるのは、この地域の風景を残し伝えるためである」と、当方の研究目的を伝える前から明言していたことは注目に値する。地域の資源・環境に裏打ちされた地技型生業の意義、価値は、包括的にとらえるのが正しく、それを「風景」と農業者自身が考えていたことは大変重要である。「景」は地技型生業の目標の一つであることを確認することとなった次第である。

だがその一方で、「対象と環境を関係づける、五感のいずれかで感受できる動的または２以上の静的な空間情報」というように、生業景を捉える方法論を見出したのは、研究開発プロジェクト期間の最終期であった。また、このような地技型生業の痕跡が現れつつも人影がない景観や、過去のものとなってしまった景観について、「生業景遺産」として整理するに至ったのも、同様に最終期であった。それまでは「生業景」「生業景遺産」を混同していた面がある。

こうしたことから、生業景／生活景の基礎概念検討についてはかろうじて達成したといえる一方、その具体例を改めて記録し、ふたたび事例的考察する熟考は十分とはいえない点もある。この達成目標Ⅲについては、不十分な点を残したと内省している。

なお代表者は別途、2019 年より科学研究費基盤 C「ルーラルワークプレイスの基礎的研究」に着手しており、生業景や生業景遺産の実存事象を解明していく必要があるため、この事例検討についてはあわせて検討していく。

こうした未成熟部分を抱えながらも、これまでの一連の活動成果が代表者の所属大学で認められ、本プロジェクトの後継となる共同研究組織として「生業景デザイン研究所」を開設することとなった。施設を持たないヴァーチャル研究所ではあるが、本プロジェクトで得られた知見をもとに、さらなる研さんと社会実装に励む場を得た。引き続き関係地域との連携をはかり、研究を深化させていきたい。

【提言・補遺】

結論・達成状況をふまえ、以下４点を今後への提言としたい。

〇地技型生業の再評価に関する産官学民金による共創・情報共有

本プロジェクトでは、特定プロジェクトの推進と、客観性を心がけた情報収集を並行して行ってきたが、地域の産官学民金が、資源や地技アトリエの再発見段階から共創することが望ましく、それはある意味、都市部の商人よりも情報として地域が先行取得している必要がある。疲弊散逸している地技型生業が、都市に対して価値供給できる体制を備えている状況は多くないからである。地技型生業群の共創体制や場づくりを整え、資源・環境の健全性を担保したうえで、地域ビジネスの検討など次なるフェーズへ移行するのが良いだろう。そのための萌芽的取組みとしてのコアトリエを多彩に創出しておけば、地域は魅力にあふれ、人材も集まるだろう。

〇地技共創による新たな価値の多角的なデザイン検討

本プロジェクトの事例調査においては、核となる地技の担い手（つくり手）の情報収集が第一義であったが、地技を活かし、地技と共創できる技術はむしろ、現代的な技術であることもあり得る。また、比較研究でも度々示唆された瓦やタイルなどの近代産業史をみても、海運ネットワークによって生業景遺産に類似性がみられるなど、領域概念は今後ますます、柔軟にとらえる必要があろう。新旧の技術技能協力、地域間連携など、共創による価値創出は、無限の可能性を秘めており、代表者らが帰属する建築学においては常にデザイン検討・提案を行う風土がある。地技型生業や生業景のデザイン検討を行い、机上の空論ではなく、地域との対話を通して進めることが必要である。こうした開かれた取組みが多彩に展開することが望ましい。

〇多世代共創を促す参加の機会づくり

地技型生業は、それ自体が多世代共創のテーマとなりやすいことは上述のとおりである。とくに、プロジェクトの実施経験からいえば、「地技の次の担い手を募集するという後継型に映る取組み」よりは、「中年・青年・少年世代の創造的活動のなかで、地技をもちいて現代的な課題解決を図る取組み」のほうが、域内の人々を巻き込みやすい印象がある。防災・環境・教育・文化・芸術といった多分野において、催事・反復学習・習得などの様々なプログラムを設定することで、多世代共創を促す参加の機会づくりが実現できると考えられる。

〇社会資産を用いた場づくり　―共創空間としての活用と文化資産の保全―

本プロジェクトでも実践したが、空き家活用はもはや全国的課題である。課題は所有者からみた利用形態に対する不安であって、農山漁村の空き家資産の多くは所有者が都市居住していて管理ができず、人には貸せないということが多い。重要なことは上記のような地域ぐるみの共創活動を位置づけ、所有者らに報告・連絡・相談することであろう。とくに、特定プロジェクト・スレート千軒講の運営的視点からも、屋根下の多彩な営みこそが不可欠であることはいうまでもない。私有財産にも社会資産の一面があって、有効活用するべき責務がゼロではないことを共通理解としていく市民力向上の取り組みも必要であろう。

3-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョンへの回答

PJ-Q1. 地技にもとづく生業にはどんな事例があるのか、連携・共創の萌芽はあるのか？

（回答）

本プロジェクトにおいて最重要視する地技の担い手とは、「地域の資源・自然環境を育んできた前世代から引継いで、身体的技能を用いて価値創出を行うつくり手」である。それらのなかには、現代において、安定した貨幣価値を生み出す存在から引き下がったものもある。だが、グローバル経済に迎合した領域に限定せず、次世代の環境資源活用型の生業を整えることは、SDGsの観点にも整合する。このとき、むしろ経済的対価に屈せず、ニッチななかで女性らが地技をはぐくむ状況すら、しばしばみられたことも付記する。

そうした、地域の資源・環境を活かして価値を生み出す「地技」とこれにもとづく「地技型生業」の事例は、結論に述べた語義（**表 3　抜粋再掲**）のとおり、具体的には、農・漁家、林業家、大工など、各地に無数に散在している。本プロジェクトにおいて視察や取材の対象としたものは、**2-3-1【work01】**に示したとおり 100 以上の件数に達したが、氷山の一角に過ぎない。

その一方で、現代的価値の創出をはかるための連携・共創の萌芽を考えると、興味ある産業分類のみに着目すべきでもない。そこで、敢えて「地技型生業」のみに限定せず、地域に存する生業について、産業分類をもとに通覧したうえで、「衣食住」なる分類に立ち返り、可能な限り統合して一覧とし（**表 4**）、これを「地技カタログ＆マップ」にも活かすこととした。

このなかでセルに着色しているのは、特定プロジェクト等で本プロジェクトが例示しているものである。川上のつくり手は、連携・共創の主対象であるが、つくり手論に終始し、これを活かすつなぎ手やターゲットであるつかい手、公益的なささえ手ら川下への視点が不足してよい訳ではない。丸森のように［ウ１］の地域おこし協力隊員（ささえ手）が事務局を務める共創や、大崎のようにデザイナー・プロデューサーらつなぎ手がけん引する事例、陸前高田矢作のスレート屋根を守る会のように［エ 3］の住人ら（つかい手）が連携グループを形成した事例もある。大崎地方の世界農業遺産など、連携・共創をさらに公益的な観点からも検討するなど、多様に見立てる必要があろう。いずれにせよ地域の可能性を広げることが、この作表のねらいでもある。

また、プロジェクト経過を振り返ると、重要な指摘を得たことを想起する。一つは「地技や地技が扱う資源・環境は、衣食住といった分野に限定されない場合がある」という点である。例えば「陸前スレート」は元々石盤や硯などの文具であり、建材でもある。岩手盛岡にて健闘している「和ぐるみ」は、食品はもちろん樹皮を用いたカゴの製作も行われている。「阿仁マタギ」に至っては、森とどう暮らすかという地技であり、衣食住を分けること自体がナンセンスである。**表 4** を基盤にしながらも領域横断した事象を想定する発想の自由度が、持続可能性の観点からも求められるといえよう。もう一つは「食やモノがあふれる現代において、美味しい、使いやすい、格好良いは当たり前であり、つかい手が一歩リードした価値を認めるのは物語である」という、いわゆる「コト消費」の現代的傾向である。地技型生業とてこの傾向にあらがうことはできないし、むしろ地技だからこそ「コト消費」における個性、優位性が認められる可能性もある。

例えば、丸森まなみやげグループが将来目標としている「おくるみ」は、蚕糸絹業＝「衣」に加えて、「医」「学」とも連携・共創すべきものであろう。空き家対策と観光と学生研修をセットにした「住」「交」「学」などはすでに各地で進んでいる連携・共創であろうし、近年激化している山林の獣害を考えて、山菜を採るマタギ農家と銃砲店、さらには田畑の損害保険を絡めた「食」「機」「金」の連携・共創がありうるかもしれない。

すなわち、地技型生業の共同アトリエを示唆とすることで、地域固有の地技を再評価することと、新たな連携・共創のために従来無関係と捉えられていた産業領域をも再評価することとが、相補的に想起される可能性があるといえよう。

表 3（再掲・抜粋）　本プロジェクトにおいて創出・提言した重要な用語と語意

用　　語	語　　意	事例・備考
地技 じわざ	地域の資源・環境を活かして価値を生み出す技能・技術のこと。本プロジェクトにおいては、「地域の資源・自然環境を育んできた前世代から引継いで、身体的技能を用いて価値創出を行うつくり手」を、主たる「地技の担い手」と捉える。	農業や蚕業の技能、食品加工技術、鍛冶技能、伝統的建築技能など
地技型生業 じわざがた なりわい	一次から高次産業まで様々ある生業・活動のうち、地技（地域の資源・環境を活かして価値を生み出す技能・技術）をもとにした生業・活動のこと。本プロジェクトにおいては、安定した貨幣価値を生み出すものに限定しない。	農・漁家、林業家、養蚕家、陶芸家、染織家、大工、鍛冶屋など

表 4　地域に存する関連生業の多様と立場分類（地技型生業と呼べるものはこのなかの左上の一部である）

区分略称	ア　つくり手	イ　つなぎ手	ウささえ手	エつかい手
⑴衣 （もの）	染織、工芸、養蚕、陶芸家ら	左記の販売者ら	ウ 1	
	繊維・工芸・一般製品など			
⑵食 （もの）	農・漁家、食品加工者ら	飲食店、販売者ら	ウ 2	
	農・水産・加工・飲食サ			
⑶住 （場）	林業、建設、鉱業、環境など	左記の経営者ら	ウ 3	エ 3
	林・材・環境・建設・鉱業			
⑷交 （場）	旅客、運送、観光など	左記の経営者ら		
	運輸交通・観光宿泊ほか			
⑸機 （近代）	機械製造、クリエイターら	左記の経営・販売		
	機械・情報通信・現代製品			
⑹エネ （近代）	燃料、公共インフラ従事者ら	左記の経営		
	電気水道ガス・エネルギー			
⑺販 （こと）	–	販売・卸・小売		
⑻金 （こと）	–	金融保険・不動産・賃貸ほか		
⑼医 （ひと）	医療・福祉・生活サービス	左記の経営		
	医療・福祉・生活サービス			
⑽学 （ひと）	学術技術・教育・公務	左記の経営		
	学術技術・教育・公務			
⑾他	その他分類不能なもの	その他分類不能なもの	その他分類不能なもの	その他分類不能なもの

PJ-Q2. 地技は誰が担い、どのように多世代共創が可能か？

（回答）

本プロジェクトで関心を寄せている事例の多くは、地域で長い時間をかけて培われた「地技」を身につけているのはしばしば高齢者で、これを若手が継承する、というモデルが少なくない。例えば、藁細工の人気作家として知られる山形県の T 氏は、山形県下で藁細工の最高名人とされ

る高齢職人のもとで手技を身につける一方で、現代生活にも映える素材の妙味を上手く引き出すことによって、工芸分野で新しい風を吹き込んでいる。しかもそれは農業の副業として実践しているため、これを学ぼうと大崎市の農家の面々が副業講習会を企画した。このように、地技と、これを活かそうという新しい志の双方が同居するとき、多世代共創による現代的価値の創出が実現する。そして、そうした人々が新たなコミュニティやネットワークを形成している。

各地の「手づくり市場」は近年脚光を浴びているが、例えば仙台市内で 10 年以上続いている定期的な手づくり市場に着目すると、そこでの出展者や主催者は、持続可能な利益の確保を尊重しながらも、むしろコミュニティづくりに価値を置いて出展している人々が少なくない。深い付き合いとは別の、好みや価値観を共有できる「顔見知り」ともいえるゆるやかな人々の輪のなかに身を置く楽しさや、思わぬ「同志」に遭遇する期待感もあるという。

そこで、この手づくり市場研究とコミュニティ、ネットワークなどといった概念を整理したものが**図 29** である。コミュニティ（右下）とネットワーク（左上）は本来、地縁性の有無において対置される関係であるが、手づくり市場研究で得られた「同志」や「顔見知り」を直交軸においてみると、同質性と多様性、地縁性と遭遇性といった性質に、それぞれの人間関係用語が位置づけられる。そして、つくり手やささえ手は、比較的コミュニティ論に近い領域で活動することが多いのに対し、つなぎ手、そしてつかい手は一般的に、不特定多数に向けて商うことも含めてネットワーク論に近い領域で活動することが多いことにも気づかされる。

地技の継承や新展開を考えるとき、こうした人間関係の構図のなかで、どこに可能性や課題があるかを考慮し、誰とどのように共創することができるかを検討することには一定の意義があると考えられる。結論で述べた「地技共創シート」とともに参照しうる帰結の一つに数えたい。

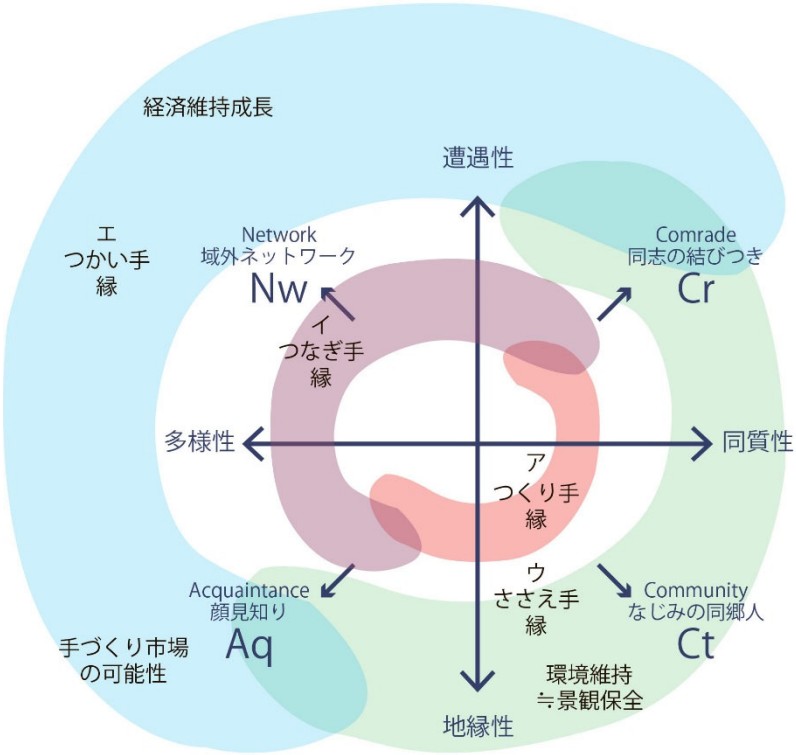


図 29　多世代共創の端緒を見出すコミュニティ／ネットワークにおける地技関係４者の広がり

そこで次に、「結論」に記した「地技共創シート」を用いて、特定プロジェクトから２件の例示をしたい。

まず、宮城県丸森町では、**2-3** に示したように、養蚕・織物・和紙などの地技単アトリエが連携共創に至り、共創の場づくりを行い、共通ブランド「丸森まなみやげ」を作って制作と定期的な展示販売を進めてきた。ここでは、メンバーそれぞれとの知遇を得ていることから、人のバースケールも併記した。これは、縦の長さを、願いも込めて 90 年（つまり全員 90 歳まで存命と仮定する）とし、青から赤へと移ろうグラデーション・バースケールとしており、人間の熟度に呼応させている。これを見ると、事務局を若手の地域おこし協力隊員らが担い、つくり手同士が多世代共創に至った共同アトリエの創出事例となっている（**図 30**）。

ただし、全体としては高齢の様相は否めず、つくり手がほぼ全体を占めるため、つなぎ手・つかい手らとの共創も検討する必要があるとみられる。事業は途についたばかりで、今後も課題解決やエンカレジが必要といえる。こうした課題について確認するのに、本シートは一定の有用性があるものと考えている。

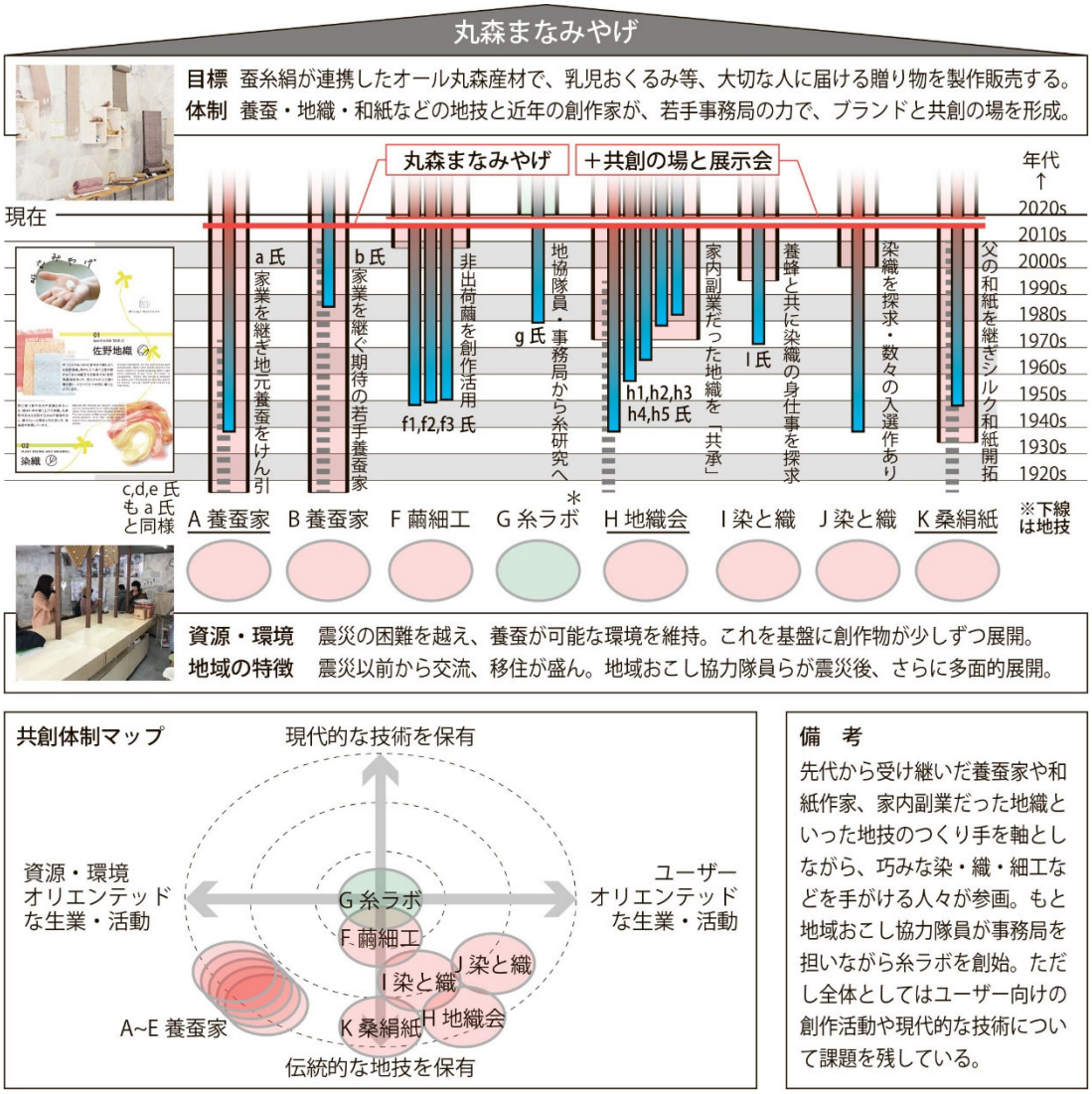


図 30　地技共創シート（丸森まなみやげの例）

宮城県大崎市では、**2-3** に示したとおり、岩出山地域の中堅・若手がけん引し、農家が産物を持ちよって温泉宿でもてなす共創企画や副業講座など、すでに連携・共創が進められていた。本プロジェクトとしては、これらの延長線上に企画された催事にて学生団による協力を行い、多世代化に寄与した。なお、この催事では 10 年以上前の共創事例・鳴子の米プロジェクトも連携しているが、基本的には中堅若手による共創の動きが中心で、そのなかの一部に先例が定置されるという、未来志向の多世代共創を示していた（**図 31**）。

とはいえ、農家（つくり手）はいずれも先代から継いだ自立的な地技アトリエで、これをどう次世代へつなぐかに腐心していた、すなわち、地技アトリエとしてはマンネリ化に悩むの家が多かったとみられる。ゆえに、新風をもたらした C デザイン会社の存在感が大きく、企画のリーダーはむしろ若手、という状況が続いているようである。

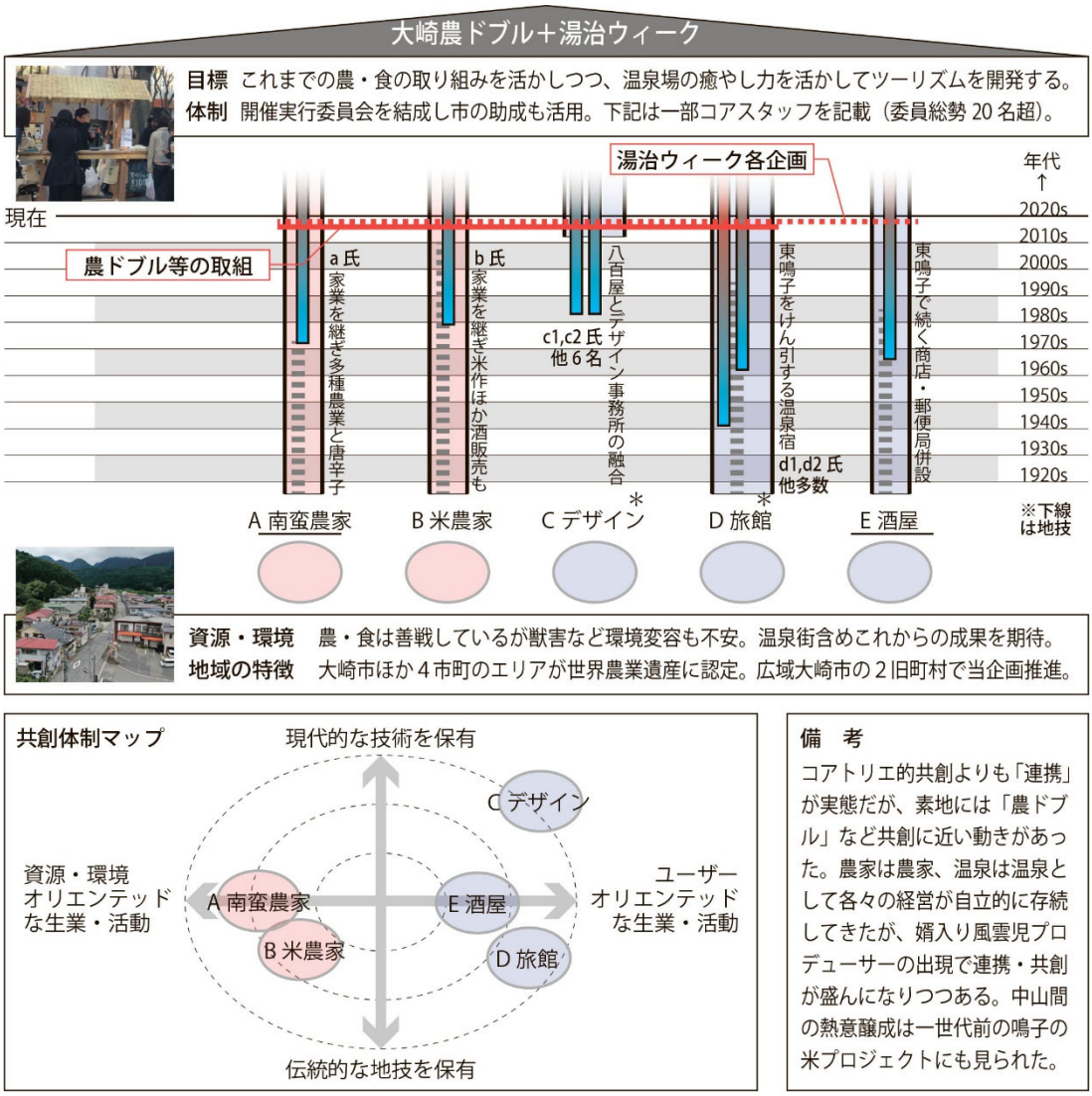


図 31　地技共創シート（大崎湯治ウィーク等の例）

PJ-Q3. 地技にもとづく生業は、景（生業景／生活景）とどのように関係づけられるか？

（回答）

結論にて上述したように、「生業景」は、当該の生業・活動と、それを成立させる背景・立地性とを関係づける包括的概念のうち、主として景観的表象をとらえたものの一様である。また、このような地技型生業の痕跡が現れつつも人影がない景観や、過去のものとなってしまった景観については「生業景遺産」とする。例えば、単にスレート民家の家並景観を眺めるときには「生業景遺産」、屋根の維持修繕、技術的な様子を眺め聞くときは「生業景」とする。また、生業景または生業景遺産を含めながら、人と生活行為、その存在感に注目した地域・都市景観の総称を「生活景」と再定義する（**表 3　再掲・抜粋**）。

この定義を念頭に、以下の３点から、生業と景の関係を事例的に考える（**写真 79**）。

一点目は「営みの断面群としての景」である。丸森の養蚕、大崎の凍み豆腐、陸前のスレートの３例を挙げたが、これらはその地において生み出されるものであり、個々の作業風景一枚だけで、そのつながりを示すことは難しい。だが、それらを２枚以上、数枚程度並べてセットとするだけで、各々の作業の意味が表出してくるという特徴があり、これらは地技の類であればこそ、景になり得る（オフィスワークではこのようにはならない）。こうした観点から、地技型生業と、それを成立させる背景・立地性を関係づける動的または２以上の静的な空間情報と定義した。音などの五感を含めてもよいものと考えている。

二点目は「地技の関わりが生んだ成果としての景」である。４点目の民家写真が示すように、こうして写した景そのものは、すでに「生業景遺産」であり、くらす人々が働きかけた痕跡を示すものといえる。そのような遺産が一掃されたのが津波被災地であり、それゆえ今後の生業景が重要となる。

そして三点目は「目標としての景」である。生業の現場にて外観としての景を日常的に意識することは少ない（見られることを意識して仕事をする余裕はない）かもしれないが、目標像としての風景がありうる、そのような発言があることは上述した。日々の生業景が、生業景遺産として地域に蓄積され、それらに包まれた地域の「生活景」がある。それは、営みの成果が少しずつ可視化され、時間とともに価値を深める「醸成される」価値であろうと考えられる。草むしりにも「地技」があり、他人には任せられないというが、そこには人間の土地に対する根源的な思想が現れているともいえる。

表 3（再掲・抜粋）　本プロジェクトにおいて創出・提言した重要な用語と語意

用　　語	語　　意	事例・備考
生業景 なりわいけい	地技型生業（地域の資源・環境を活かして価値を生み出す技能・技術をもとにした生業・活動）と、それを成立させる背景・立地性を関係づける動的または２以上の静的空間情報のこと。端的には作業近景と中景の写真で示せる。音など五感を含めてもよい。	田畑と食品加工現場の２枚一式画像、建設現場と槌音、魚醤店とその臭気など
生業景遺産 なりわいけいいさん	地技型生業（地域の資源・環境を活かして価値を生み出す技能・技術をもとにした生業・活動）の痕跡を示す景観遺産のこと。産業遺産景観のうち、身体的技能を伴った痕跡のある景観要素が主対象で、すでに人や作業現場が現役でない景観も含める。	農地・生垣・庭園・剪定樹木、石積み、工場跡、無人のスレート民家など
生活景 せいかつけい	人と生活行為、その存在感に注目した地域・都市景観の総称。本プロジェクトにおいては、農山漁村を主対象としたことから、生業景および生業景遺産を含め、とりわけ地技に着目した地域景観を指している。	生業景や生業景遺産を含む農山漁村の風景、コアトリエ活動と周辺の風景など

写真 79　特定 PJ をもとにした生業景３様および生業景遺産の情報イメージ（複数画像による表示例）

3-3. 領域のリサーチ・クエスチョンへの回答

以下では、領域のリサーチ・クエスチョン（平成 30 年 1 月現在）を簡略化して見出しとしています。全文については、下記をご参照下さい。

領域 WEB：https://www.jst.go.jp/ristex/i-gene/introduction/research-question.html

領域-Q1. 持続可能な社会に向けての多世代共創の意義とは？

持続可能な社会の実現には、人々の「直観的で無理のない知足」が要る。そこには、自然環境と対峙してきた「地技」をもつ高世代の英知と、若世代の科学の双方が必要である。それゆえ、多世代共創となりうる課題共有の機会が重要である。この意義ある多世代共創という方法論を活かすうえで、地技型生業は、有効なテーマの一つとなると考えられる。

領域-Q2. 特に若い世代が多世代共創的活動に参加するインセンティブとは？

単に笑えるという意味にでない、楽しく、興味深いテーマであること、主体的に関わることができ、創造性があることが重要である。そのうえで、環境や防災といった、利他を要するテーマを絡めることがポイントとなろう。往時の地技を見せつけ、自慢し、その後継を促すのではなく、次世代の創造的プログラムを前提として、適切に地技の援用を試みるコーディネートが必要といえる。導入時の関心啓発は重要で、そうした適切なツールの開発も求められよう。

領域-Q3. 効果があるのに多世代共創に参加しない場合の世代別の方策とは？

モチベーションが低い人々に対する方策は、世代だけでは括れない。上述の「好奇心型インセンティブ」は、意識・知識が高い人々向けであり、それは多数派には達しないかもしれない。残念ながら、災害対策などの必要に迫られた行動でしか、巻き込めないことはあり得る。また、多世代共創的な社会的意義のある催事が構想されたとしても、現代社会において一堂に会することを志向しない方がよく、それは IT で代替できる可能性がある。むしろ能動型・体験型の少人数企画を繰り返し設定する回り道こそが、最終的に多様な 100 人に伝えていくうえで近道となるかもしれない。

領域-Q4. 持続可能な社会及び多世代共創における新技術の影響や含意とは？

扱ったテーマが真逆のローテクゆえ、一見得意としない設問であるが、新技術が上述の「知足」を無理なく促すレベルにあれば、すなわち人間を賢くする新技術であれば、それは有意な存在となる。だが、単にこれまで以上に時間距離を短縮するとか、監視社会を強化する、格差を生む、といっただけの技術であれば、持続可能な社会とは適合しない面が出てこよう。本来は一定の距離をおく哲学・倫理が必要であろうし、新技術という近現代の甘美で麻薬的な魅力に人間が弱いことも、十分に自覚しておくべきであろうし、現時点でのソサエティ 5.0 の構想は、未成熟であると捉えざるを得ない面がある。

領域-Q5. 多世代共創的活動は人々にどのような意識変化をもたらすか？

今後厳しくなる経済局面においては、むしろ若者が高齢者をいたわる精神的余裕が無くなる懸念もあろう。多世代共創に関わる様々な動きは、これを解消し、相互を思いやる精神風土の醸成につながる可能性を有している。来るべき社会的課題に、どちらかだけの世代では太刀打ちできないことを相互に理解しなくてはならないし、被災地では意識変化が起こっていることも特筆す

べきであろう。

領域-Q6. 多世代共創が社会に普及・定着するには？

(1) 地技を活かした地域の価値創出といった多世代で向かうべき困難で充実した課題を見出す。
(2) リーダーもしくは事務局担当を、その場にいる集団から選ぶ場合、なるべく若手から選ぶ。
(3) 共創の場は、一定の期限（達成可能な短期目標）を設け、長ければ期間に分割し、リーダー格人材の性格・特徴を活かすとともに、建設的・明朗に意見し合える場づくりを行う。
(4) 資金の前に技や知恵や資材をもちより、それを糧に、できる共創活動を見出す。
(5) 多様な関心者／無関心者に対しては、それぞれに対して交流術がある人が対応できるとよい。が、そうした体制がままならない場合は無理をしない。
(6) 自治体の協力をとりつけることも、上記の交流術と同じ話と考えられる。学識の存在もその一つであろうが、学識は有害なこともあるため、目線を同じくする人だけがイニシアチブをとれるような集団運営が必要と考えられる。
(7) マニュアル化については、歴史上の御誓文や条項のように、命題を掲げながらも、自ら考える余地のあるものが望ましい。あるべき論が、べからず論より多い方が、コミュニティ形成上は雰囲気が良いかもしれない。

領域-Q7. 多世代共創の程度と持続可能な社会への有効性を評価するための指標とは？

(1) 本プロジェクトで示した「地技共創シート」のように、単純に参加者の出生年を記入するだけで多世代共存状況が分かる、多元的で包括的な基盤指標があると良い。年限目盛に対応して、その共創集団が手掛けてきた成果を縦覧できるような場づくりがあれば、それぞれの老いと向き合ったり、新たな人材確保に奔走したりと、次のストラテジーを構想することができる。すなわち、フォアキャスティング的であっても将来構想のある集団形成に寄与できる。
(2) 持続可能な社会をどんな面から評価するか、その項目が多すぎても、また一面的すぎても有効ではない。例えば、環境配慮政策の重点項目をプラゴミ、エネルギー、地域祭事の３項目に絞ったとして、その３大項目が、サブ項目を包含し、シンプルな命題達成が関連事項にも波及するようなスキームデザインが要る。もちろん、その３大項目自体も、自己評価できる、項目間の関係性が明確化されている、などの仕掛けがあると良いだろう。

領域 Q-8. 持続可能な社会及び多世代共創における地域の自然の意味とは？

(1) 多世代共創が共通に見出すべき目標やテーマの源泉が地域の自然にあると考えるべきであることはいうまでもない。都市部と農山漁村では相当に異なるが、どんな立地であっても、恩恵と災害がどのような領域において発生するのかを児童期から教育する必要があろう。
(2) 今後、都市や地域のなかに、管理の行き届かない荒廃するエリアも発生してくる懸念があることから、地域の自然の重要性はむしろ増していくと考えられる。獣害の頻発、伝染病など、これまで以上に生物多様性の中でどう生き抜くかが課題となってくるであろう。
(3) すべての地域が独自の途を見出すことは、論理的には可能と考えるが、現実的には起こらないかもしれない。歴史的にみても、農山漁村の営みはかなり時代に左右され、同質の行動をとってきた。とはいえこれからは、同じような成功モデルが通用しない、または求められない傾向もみられてくるであろうから、一定の多様性はあるのだろう。ただしそれは、スマホ文化のような超強大な同質性に飲み込まれたうえでの、小さな多様性に過ぎないのかもしれない。

3-4. 実施項目毎の結果・成果の詳細

3-4-1. 基盤情報

・情報収集と取材調査を行う「地技カタログ&マップ」の整備を行うとともに（work01）、地域資源の特徴について、地元住民や外部協力者が気づきを得るための導入学習支援ツール「地域資源クエスト」を開発した（work2）。

【work01】地技カタログ&マップ

・多様な媒体・人脈から、アトリエ情報を 151 件収集し、つくり手・つなぎ手・ささえ手などの多様性に留意して 110 件を選び知遇を得た。
・ここから、交通アクセスなどの事情にもかんがみて、学生取材団の協力を経た調査を行うべくさらなる選考をすすめ、取材後は WEB 版「地技カタログ&マップ」にまとめた。
・県別候補数などの内訳は **表 5** のとおりであり、全体として宮城県が多いなど偏りがある（今後は充実化させていく所存である）。ここで、例えばベン図の多重エリア「つくり手&つなぎ手」の計 31 件とは、当該アトリエが、生産にも、また販売にも従事しているものである。
・地技アトリエは木工、編み細工、パン屋、材木店、鍛冶屋、凧製作など多彩で、容易には比較できないが、それぞれの沿革や創作の目標・課題、連携先、自己評価などを訪ねた。
・いくつかの事例について、**表 6** に抜粋した。情報は紙幅内に納めたが、地技の多様性と地域資源の変容、後継者、震災といった様々な課題と対峙している様相が浮かぶ。

表 5 本プロジェクトにおいて調査対象に挙げた「地技型生業の関連アトリエ群」2016-2019

取材等対象／候補総数	
青森	4/6
岩手	5/28
秋田	17/18
宮城	66/75
山形	8/10
福島	1/5
新潟	9/9
計	110/151

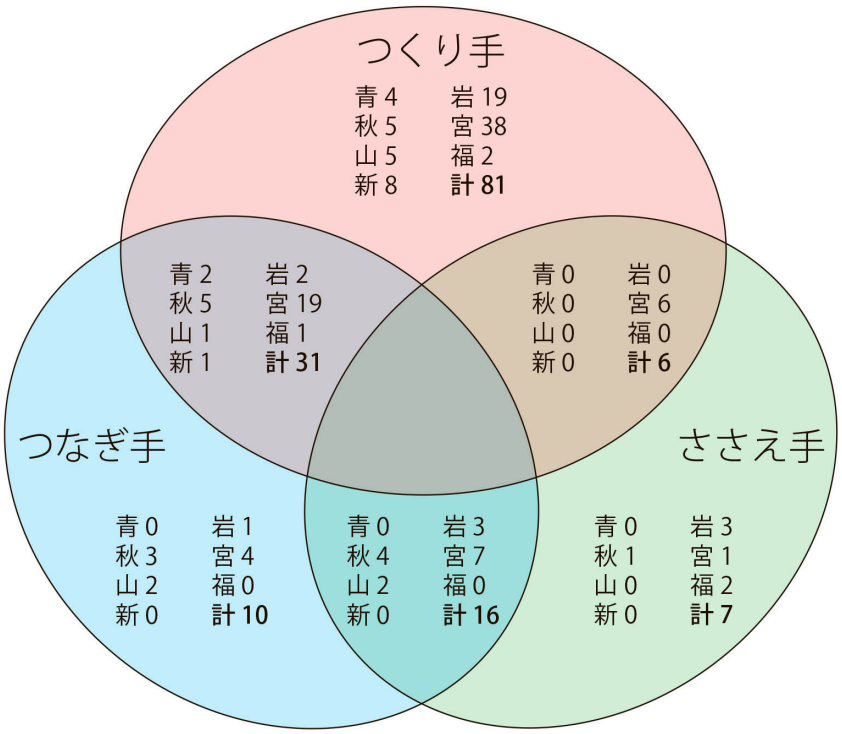


表 6　地技カタログ＆マップの取材先の一部例（実際の聞取り項目は 2.3.1 表 1 参照）

地技アトリエ等	地技アトリエに対する取材内容（一部）
森林組合 宮城県	・町内全体が組合員として属しているため、同組織も含めて全体が高齢化している。 ・共創仲間は多くはない。継続させること自体が地技である。
つる細工研究会 山形県	・仲間づくりや後継者育成ではあまり問題を抱えていない。 ・広報、販売についてはやや難がある。
農事組合法人 （生産組合） 宮城県	・名取川流域の肥沃な土壌を活かし朝採りの新鮮なレタス栽培が有名で、個人農家でも毎日 2 トントラックで出荷するほどの生産量があった。100 世帯ほどの小さな集落の中で、専業・兼業合わせて 75 世帯が営農していたが、東日本大震災で機械が流失。 ・個人農家でも新たに機械を揃えようとすると 1,500 万円は下らない。・地区住民が中心となって農事組合法人を立ち上げ、同地区の住民の農地を借り受けながら大規模な農業を展開していくことで住民が合意。レタスから「ねぎ」にシフトした。
漆掻き職人 岩手県	・今日、漆の需要が現在上がっており、漆を掻けば掻いた分売れる状態 ・現在主流の殺し掻き（掻き切って伐採）では数年のうちに獲れなくなる大問題が。 ・植林が必要だが、掻けるまで 10～15 年かかる。需供バランスが崩れている。
手技工芸館 岩手県	・町の商工観光課と協力して特産品を年に 6 回ほど、町内にて展示販売を行う。 ・竹細工をはじめ、裂織や木工品や天蚕など手技によって作られた作品が多い ・資源のバランスは問題無い。しかし作り手の後継者不足がある。
凧(いか)の製造販売 新潟県	・藩が凧(いか)揚げを奨励し、旧暦の端午の節句に陣屋と町民間の凧合戦が行われるようになったのが起源とされ、平成 27 年に新潟県の無形民俗文化財に指定。 ・昭和初頭には専業店が約 12 軒あり組合も組織されていたが現在は 2 軒のみ。 ・竹を六角形に組んだ骨組に小麦粉を煮た糊で和紙を貼り、染料で絵を描く。 ・基本的に職人一人で全工程を手作業で行う。絵柄や大きさなど注文にも応える。 ・昭和 63 年、アメリカの専門誌「KITE LINES」にて紹介され、世界の凧愛好家に有名になった。現在はパリ他での企画展の依頼を受けている。 ・技量がないと合戦場には出られないが、10 代から 80 代が現役で活躍、30 年の歴史がある女性だけのチームもある。

【work02】地域資源クエスト

・コアトリエ形成のつなぎ手・ささえ手を育成することを目的として、はじめにメンバー間で話し合って試作を行い、丸森町でのワークショップ検討を経て本格開発に移行したものである。例えば「スレート石」ならば、石を擬人化し、その石になったつもりで「何に活かされたいか」「どんな形になりたいか」などを想起、討議するものである。

・丸森町では、地域おこし協力隊に検討いただいたことから、モチベーションの高い方々に有用な指摘を頂き、最終形に反映させることができた。

・今後は、宮城県大崎市にて、このツールを実装させる可能性が出ており、引き続き改善を重ねていく。

3-4-2. 開発実践（３つの特定プロジェクト＋追加プロジェクト）

・「衣／食／住」の好例・適地を選び、「コアトリエ形成」や「共創支援」などを特定プロジェクトとして進め、概略として以降のような知見が得られた。

【work03】丸森シルクまなみやげ（特定プロジェクト１「衣」／宮城県）

・宮城県丸森町では、養蚕家、染織家など地技アトリエが存在するも、連携していなかった。
・阿武隈川沿いの冷涼な風が養蚕に適しており、福島伊達郡の蚕種などとの縁が深い。
・同町は旧町村からなり、各地に歴史的建造物がかなり残っているが、金山地区には佐野製糸工場があり、敷地だけが残る。工場があったのはかなり以前だが、文脈の継承は重要といえる。
・視察を通じて、共創空間候補を求めたが、中心部の旧「しおや」と呼ばれた商家は、地技アトリエの一つが間借りしている状態で、ここに入れていただくことが合理的と考えられた。
・その一部を模様替えしたことで、会議や共同作業、展示販売が可能となり、さらに相互視察が活発化し、小学校の教頭だった方がシルクを探求しているなど人材が豊かなことが分かった。
・当初の顔合わせをけん引したキーパーソンが、丸森町の教育長に抜擢されることになり、事務局は地域おこし協力隊のＡ氏に引き継がれることとなった。
・定期的催事のほか、小さなブランド「まなみやげ」を創出したが、最大の悩みが価格設定である。同質の作品が仙台などでは倍程度の価格で売られている一方で、同町では小さな町の商店の隅に置かれており、しかも知り合いが多い中で、値段を簡単には上げられない空気があるという（後継研究所にて検討に加わっていく予定）。
・シルク和紙工房の実測を行い、その基本的な用具と構成を把握することができた（図 31）。
・丸森の養蚕のサイクル（年 5 回）が明らかとなり、うち１件の蚕室を実測調査し、ボンビックスなる給餌用の巨大な電動機械を使っている（図 32）。
・拠点とした共創空間に、他県の紡績メーカーから視察が来る、仙台市内のシルク商社が視察に来るなどの小さな反響があったが、すぐに製造対応するほどの体制にはなく、延期となった。
・染織家の工房を訪れ、古式の座繰器を借用した。学生の卒業研修を通して、そのレプリカを作成した。いわゆる上州式のもので、材質は不明であったが、基本的な機構が分かった。
・関連して視察した英国では、17 世紀には絹織の家内工業が広まり、とくにチェシャー州マックルズフィールドは絹の糸ボタンの製造拠点となった[文6)]。1743 年初の水力製糸場が建設され、50 年には広幅織りが始まった。19 世紀にはこうした織物が主流となり、仏国のリヨン、伊国のコモなどと並ぶ世界有数の絹産業町となった。美術学校だった施設は 1877 年に建設され、ウィリアムモリスも講義を行った。現在は、シルク産業史を伝えるパネル類や古資料・道具類が保管・展示されている。展示品の中には三井物産による蚕種から繭をつくるまでの標本があり、製作者銘板に『鶴岡製作所 東京市外日暮里 1044』とあった。標本の出自については不明という。隣接するのは 1862 年築の 4 階建ての工場で、フランス式のジャガード織機は、パタン孔のついたカードを使うことで、正確な織模様を大量に織ることを可能にした。以上は華やかだが、中国産繭の上に成立した産業遺産に対し、全行程が現存する我が国の優位性はあると考えられる。
・このほか大日本蚕糸会の取材を行った。蚕糸業法が廃止され、養蚕を支え補助金を出してきた先導組織も、財産の切り崩しで運営しているのが実態であり、地域ごとの自立が求められていることが分かった。全国における川上・川下連携の取り組みが当初は 58 件あり（図 34）[文13)]、助成金を配分して各地で展開された一方で、成功例は限られ、消滅したエリアも多く、現時点で 20 件強しかない。今後はさらに淘汰が進むと見られ、逆に廃止前に扱えなかった品種も扱えることから、地域のオリジナリティが求められる状況にあることが再確認された。

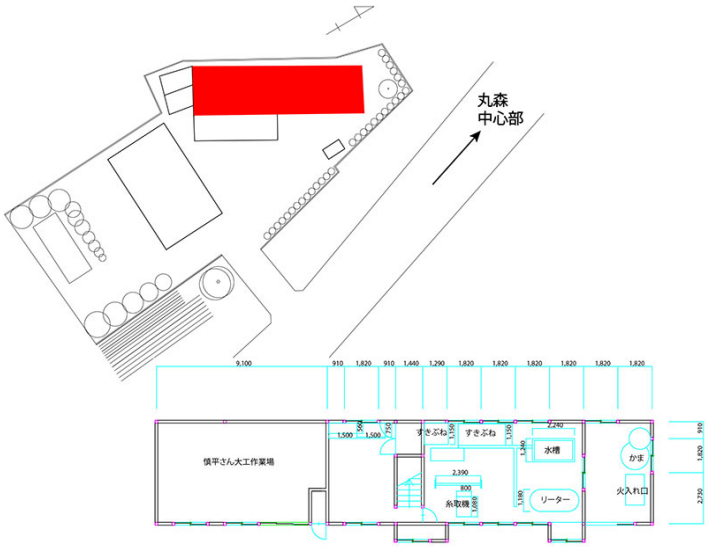


図 32 丸森町の和紙工房の実測図

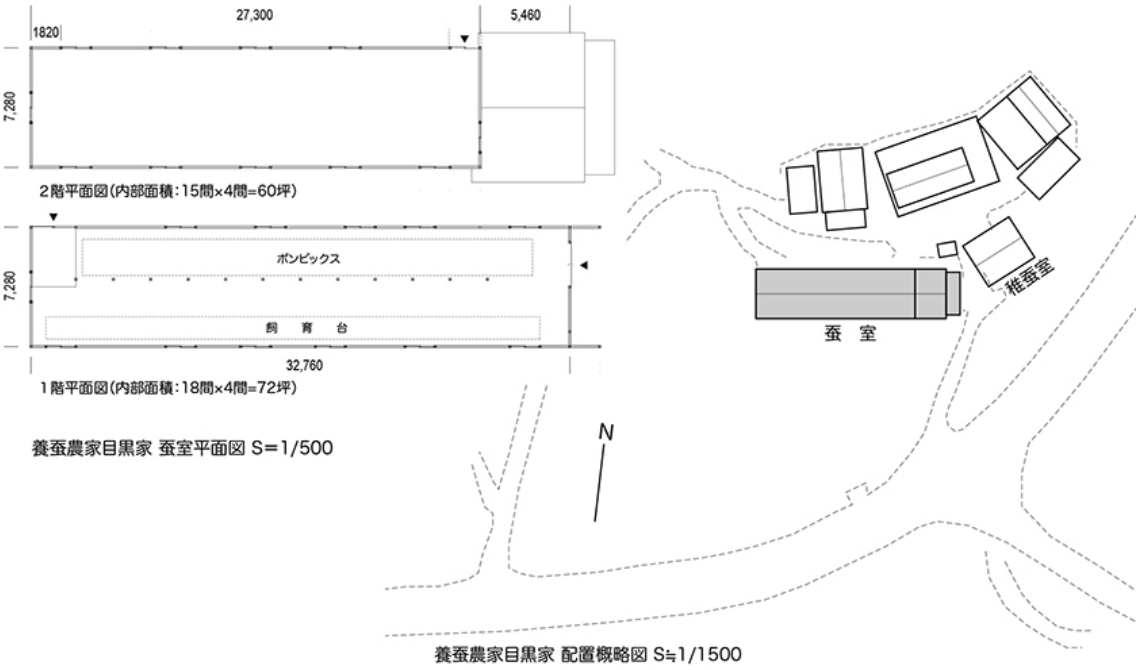


図 33 丸森町の養蚕農家の蚕室実測図

図 34 全国 58 の養蚕をめぐる川上・川下連携（2011 頃／現在は半減　出典：大日本蚕糸会シルクレポート）
（画像は割愛）

【work04】大崎・農と食の生業景（特定プロジェクト２「食」／宮城県）

・2017 年 12 月「持続可能な水田農業を支える『大崎耕土』の伝統的水管理システム」が国連食糧農業機関（FAO）の世界農業遺産に認定された。申請主体は大崎地域１市４町（大崎市、色麻町、加美町、涌谷町、美里町）と宮城県らで組織する大崎地域世界農業遺産推進協議会である。

・当地方の中核をなす大崎市は、西部の中山間的な農業と、東部平野の広大な水田農業を有し、近年の米の生産調整などもあって大豆が盛んとなり、日本食の二大要素・米と豆を生産する。ここで基礎調査として、幾つかの地技アトリエを取材した。

・K 醸造は 17 代目。地主であったが、明治 36 年に米の相場制が始まり、麹屋からの婿養子だった 13 代目が醤油を仕込んだ。昭和 60 年に味噌生産を本格化。最近は嗜好性の高い製品が求められているから、国産大豆を自ら生産し、すべて自家製のものを作っている。連作障害があるため水田農業との回転作をすすめ、1 年大豆・2 年米の転作に至り、現在では周辺の指導的な農家・醸造家とされている。

・「八百屋とデザイン事務所の融合」と銘打ったデザイン事務所は、プロデュースとデザインを担当する２人を中核に、適宜仲間と共創を進めている。当初話題を呼んだのは、デザイン料金を「物納可」とする「物々交換マルシェ」で、3 万円分の資源を報酬としてデザイン協力をする。東京方面に高級品を出荷する一方で、地元への集客事業も構想している。湯治ウィークの仕掛人の一人でもある。

・岩出山地区では凍み豆腐製造が盛んで、現在は５軒が稼働している。生産基盤となるのは、冬季の岩出山地域の気候である。製造法としては、機械で製造し冷凍庫で製品として仕上げるものと、手作業で編み込み等の作業を行い、主に自然乾燥で仕上げるものがあり、両者に取材・視察協力を頂いた。気候変動もあり、相補的な２つの製法が共存していることには合理性がある。

・農大の醸造学卒という麹屋の 5 代目にも取材した。祖父世代から味噌麹一本に絞り、醤油・味噌・麹それぞれの状態で販売。最近は地元の若い世代で「エボラボ」を結成し、試行を続ける。

・このほか、県の主催でレシピ提案会なども行われ、農家民宿、食品店、レストラン、カフェといった食の店を経営する方々が出席して意見交換を行った。「必要なのは文化」「ハレとケ、単独と組合せなど多彩な活かし方」などの意見があった。

・唐辛子はもともと、穀物のみを食べた貧しい農村時代からの食材だったようだが、現在は万能調味料に仕立て上げるに至った。中山間の農業は多角的に進めるしかなく、多品種による豊かさもあるが、近年は獣害などに悩まされている。そこで副業も学び合おうと声掛けをしている。

・東鳴子地区の温泉宿の一つは、10 年以上前の「鳴子の米プロジェクト」でも関係者の相談拠点になったが、その意味で大崎地方は、豊かな「場」の資産が多い。

・のちに湯治ウィークを先導する当地区の別の温泉宿も、歴史的に古い。ただし地域全体に波及する動きをなかなか創り出せずにいたことから、農家の方々が自前の収穫物でめいめいつくった食事を持ち寄ってもてなす「農ドブル」企画のホスト役をつとめ、海外からの客を含めた幅広い方々に好評だったという。

・このほかにも多彩なプレイヤーが広域に散在し、思いのほか連携しているという印象を得た。農ドブルなどは、もはやコアトリエに近い。そこで、本プロジェクトとしてはむしろこれらを取材・総括しながら、地域主体の共創プログラムに対して支援するかたちをとることが適切であろうと帰着した。

【work05】陸前スレート千軒講（特定プロジェクト３「住」／宮城県・岩手県）

・日本全国の明治洋風建築に葺かれている石屋根「天然スレート」に着目し、景観保全と生業再生の両観点から、産業史を紐解いて産地周辺の４エリア（雄勝・入谷・登米・矢作）に着目して調査や技術継承支援を進めた。

・産地ごとの歴史ならびに産業遺産の状況を確認する調査研究を行った。採掘もさることながら、歩留まりの悪い石材開発における端材の山が、複数の産地で確認された。
・集落視察調査をさらに広げ、建築本屋（大工）の造りに呼応した微妙な造形意匠の違いを比較考察し、職人の技法の差に気づかされた。
・東京駅の屋根を手掛けた国内筆頭のスレート葺き職人ほか、当業界に関わる重要関係者のほぼすべての方々と知遇を得るに至ったが、往時の記憶には限りもある。そこで、国内最高峰の文化財保存修復技術者にもヒアリングを行った。
・当該遺産群の価値を明らかにするための建築史研究の一方で、広域農山漁村に分布する遺構の活用保全について、地域の特色に応じた解法が求められることに帰着した。４大産地を縦断する企画「スレート千軒講ワークショップキャラバン」は、この観点にもとづいている。
・建築史研究としては、雄勝のＫ家、Ａ家、登米のＫ家、入谷の複数家屋などを個別調査対象として進め、それぞれ日本建築学会等にて報じた。
・さらに、一連の活動が発端となって東北大学から連絡が入り、明治 30 年代築の歴史的遺構の調査をする機会を経た（ただしすでに解体廃棄）。この建物と、上記の古家の両方が、もとは栗木羽葺きであることが判明し、口伝と一致する結果が得られた。
・専門誌「建築士」（日本建築士会連合会）にて、これに至る建築史研究の経過や活用保全の考え方を紹介する連載記事の依頼を受け、2019 年 2 月号から 12 月号までに掲載され、本プロジェクトを紹介する場ともなった（図 35）。

図 35 月刊発行・日本建築士会連合会誌「建築士」連載記事（上記は第 1 回・第 2 回の冒頭ページ）
（画像は割愛）

【work06】石巻牡鹿・井内石を活かした震災慰霊碑の設計（追加プロジェクト・宮城県）
・経緯は **2-3-2** の実施内容に示した通りである。
・稲井石材商工業協同組合の沿革は、雄勝硯生産販売協同組合のそれとは異なるものの、戦前のような巨大石碑の受注が激減し、また危険な採掘も禁じられてきた経緯のなかで、戦後は墓石一辺倒に傾倒し、その結果外材に頼る時代も到来したという、近代後期特有の歩みをみせ、その時代的空気は類似するもの（アトリエとしての世代類似性）があるとみられる。
・なおこの成果は、シェルと空間構造に関する国際会議（Proceedings of the IASS Annual Symposium 2019 – Structural Membranes 2019 Form and Force, 7 – 10 October 2019, Barcelona, Spain）にて発表し、本プロジェクトについても紹介した。

3-4-3. 比較研究

地技型生業の参集場の一つと考えられる「手づくり市場」の比較研究**【work07】**や、産業遺産と文化的景観の比較研究**【work08】**、生業と町並み景観の比較研究**【work09】**をすすめた。

【work07】東北地方における手づくり市場の比較研究
・経緯および解明点の要点は **2-3-3** の実施内容に示した通りで、既往情報[文 14)]にない東北地方の動きを一定程度明らかにした。
・多様な手づくり市場の相互定置をみる視点として、開催頻度、立地、企画コンセプト、出店者の募集・選考方法などが挙げられるが、単純に商業的成果のみを追求したものはほとんどないと

いって良く、多かれ少なかれ、まちづくり、地域おこし、あるいは作家の支援といった意図が込められていることが多いことが分かった。
・共通しているのはコミュニティ形成を意識し、かつその効果を発揮しているものが少なくないことである。こうした場が、つくり手のエンカレジにつながっている可能性もあるといえる。
・総じて、人口集中地区など都市部にちかい立地の催事は頻度が高く、商業的成果も得られている実情は否めなかったが、それらは「地方の生産成果を買い支える」という社会的意義を趣旨とした面があることが分かった。
・逆に、山間部などで行われるものはイベント性がつよく、都市部から集客して、その地域自体を知ってもらう機会にしようと企画しているものが多い。

【work08】産業遺産と文化的景観の比較考察
・経緯および解明要点は **2-3-3** の実施内容に示した通りである。
・ここでは、海外視察で得た知見の幾つかを補足しておく。
（英国）
・建築修復コンサルタント T 氏へのヒアリングでは、英国の建築保全とスレート産業遺産、民家建築の実態などについて聞いた。イギリスでも伝統的な仕事はみな斜陽という。ただ、国立屋根工事業連合という商業的な団体や、一方、遺産会議という専門家団体がある。屋根スレートだけを挙げれば業者は 100 ほどあるが、登録技術者は 60 人くらい。粘土瓦、石では砂岩、石灰岩、スレートが主なもので、最近はビデオに編集している。英国には４つの国があり、それぞれ法と遺産保存を担う政府機関をもっている。基本的に第一類、第二☆類、第二類の計三段階があり、一が最重要。このほか建物の詳細について伺い、帰りにペンリン採石場をご紹介いただいた。
・ベセスダという人口 4,000 人強の小さな町にある Walsh Slate 社の営業担当の O 氏に、産業の実情について聞いた。採石場の名を Penrhyn Quarry といい、英国最大級である。開発が始まったのは 1750 年代くらいで、小さな家族経営で始め、酪農家に屋根用として売っていた。縦に岩脈が出ているから露天開削して鉱床を掘り下げることができ、マイニング（坑道堀）にはならない。運送は鉄道もあるけど主に海路。バンガー港には専用港があった。ここの石は紫がかった青色なので、バンガー・ブルーと呼ばれている。産業としてのピークは 1880 年頃で、最盛期は 3500 人くらいが働いていた。加工場は石炭で沸かした蒸気で回る梁のうえのシャフトとベルトで動いていた。採石では火薬の黒粉を使い原石を切り出す。石の組成と劈開面の方向を見極める熟練の技は大切だが、高齢化しているという（平均 48 歳だから日本ほどではない）。使える石の割合（歩留まり）は、３～４％で、これでも良い方だという。
・ポースマドクからカーナヴォンに向かう国道沿いにある、英国歴史的建築家名の親戚筋というイニゴスレート石材店。観光プログラムにおける経由地、土産物店としても機能している。創業 1861 年で、製品の産地は、地場産もあるが、中国産も多いという。店内にはスクールスレートの生産光景が飾られていたが、日本に出荷したという話は聞いたことがないという。
・日本のスレート産業黎明期との接点までは分からなかったが、産業遺産の在り方、家並みの様子と技術者らの関わりを把握することができた[文 36), 文 42)]。
（参照 URL）
・https://www.nfrc.co.uk　・https://www.nfrc.co.uk/heritage-roof-specialists
・https://historicengland.org.uk　・https://www.spab.org.uk

（台湾）
・老七佳石板屋は、中央山脈最南部の屏東縣から台東縣に広く分布するパイワン族の集落である。麓の集落からの案内は、老七佳石板屋聚落文化協会の代表を務め、屏東大学で教える先住民

族の K 氏(58)。力里渓の川中を突き進む悪路と山岳ルートの果てに入口に着くと、お神酒で祖先、地の神々に祈祷した。1958 年、老七佳は官指導により遷移が進められ、1972 年には台風被害により周辺部落とともに再び遷移した。住居形式は、矩計の平面構成で居間、寝間、穀倉、豚舎に大別され、平入りの切妻屋根が木造架構によって架けられる。梁間方向にはスレート積みの外壁をつくり、丸太を桁行方向に架けた単純な架構だ。軒桁には伝統紋様が彫刻され、文字を持たない原住民族が表す家族の姿や、太陽や蛇を神化させた紋様となっている。室内の床はスレートが敷かれ、窯や寝床、棚などもすべてスレート。住居を継承するのは原則として長子である。
・霧台村岩板巷は、ルカイ族の集落である。急峻な山肌を石垣で耕作地化した段々畑は、山岳集落の圧倒的な景観美を見せる。住居の屋根、外壁はもちろんのこと、塀、擁壁、路面、さらには屋外卓など、圧倒される光景だが、敬けんなキリスト教の集落でもある。路肩には彫刻の施されたスレート盤のレリーフが設置され、石材の採取、搬出、加工、施工に関する絵柄がある。石材の調達は付近の山腹で自掘りしていたが、10 年ほど前からは政府方針で禁止されたという。
・あわせて、日本統治期における近代建築遺産を視察した。国立台湾文学館(旧台南州庁) は、現在は国立台湾文学館となっている。中央部の屋根はマンサードでスレート葺きである。1916 年、台南州庁として竣工した。設計は森山松之助(1869-1949)。修復された屋根石の産地は不明だが、創建当時に陸前地方のスレート産業との関わりがあったかどうかが気になるところである。
・このほかも多数視察したが、日本のそれは同一の産地から出た資材であるのに対し、日治時代の近代建築と先住民集落の対比は強い印象を与え、異文脈で明快に区分できるものといえる[文28)]。

【work09】地技型生業と町並み景観の比較研究
・九州の焼き物のまちなど、生業景を中心に視察した経緯および解明要点は **2-3-3** の実施内容に示した通りである。
・ここではこのほか、関連視察した地域と得られた情報を端的に列挙する。
・羽州瓦の家並：　北前船文化からの流れをくむ瓦産地と集落景観は、歴史的建造物には至らないが、産業史を示すものとして評価でき、東のスレート、西の瓦が対比できることが分かった。
・瓦のまち津井：　上記に関連して、淡路瓦の産地には阪神淡路大震災をこえて復興の姿をみせる生業景がある。焼き物のまち同様、開かれた仕事場の空気感が明快で、伝わりやすい。
・常滑と多治見のタイル[文9)]：　焼き物のまちの生活景は同様。宮城県石巻市の文化財・観慶丸商店のように、瓦やタイルの波及は地域間連携にも資する近代特有の現象ともいえよう。
・鹿沼の建具と大谷石：　古くは日光街道沿い、戦後は首都圏の戦後復興のため産業町が開かれた鹿沼と、建築石材で不動の人気を誇る大谷石の産地を視察。往時の栄華を過去のものとして新たな展開を図る動きが印象的だった。本プロジェクトが志向している「小規模性」と対照的な存在として、好例とおもわれる。
・三条燕 KOUBA の祭典：　少々上述した。当初は著名な金属工場、工芸系の店舗がオープンファクトリーをしていたが、近年は農家も参加しており、本プロジェクトが当初掲げていた「1.5 次産業」を感じさせる企画になりつつあることが伺えた。
・三島生活工芸館：　工人まつりでは、編み籠から桐箪笥まで、人気の品が首都圏からのユーザーに買いつくされる人気ぶり。工芸とは何かをぶれずに探求する姿勢がうまく伝わっている。大野村や弘前など北東北とは比較しにくいが、それぞれの立地性を問い直すうえで参照に値する。
・養蚕・織物の先進地視察：　メッカ富岡をはじめとする群馬では、蚕糸業の現役性とともに、その生業景を伝えるための工夫が随所にあった。とくに丸森に欠けている製糸分野で、小さな工房ですべて手がけるアトリエもあり参考になった。また福島県伊達市霊山では、より手間のかか

る天蚕に挑んでおり、こちらも個性ある取組みとして注目される。ただ、特殊分野ほど後継者探しには難儀しているといい、同様な課題がある。これに対し、先述のように鶴岡では、製糸工場があることもあって、洋装で世界に打って出る戦略をとった。淘汰の先にある、互いの情報を得ながらの個性育成が印象づけられ、丸森の方向性を検討するうえで参考になった。
・嶽きみ：　農業系の生業と生業景視察が相対的に不足していたため実施。北の高原で無数の農業を試した先に、一定領域で最高のトウモロコシが出来ることを発見。鮮度が落ちないよう、都市部への出荷は限定的にし、嶽きみオーナー制度で収穫時に日本全国からのファンを集める。地技の強さと誇りを感じる、北の農村の雄と呼ぶべきで、大いに参考になる。
・イタリア視察団：　本プロジェクトに親和性のある、素材を通して衣食住の垣根を超えた創作を探求したいという建築家らのグループが、遠野～鶴岡旅程の途中で仙台経由。代表と議論がかみ合い、この種のテーマの普遍性を確認することができた。

3-4-4. 発信交流

開かれた社会技術研究とするため、情報発信の方法として、**【work10】**季刊誌発行・WEB および**【work11】**サミット＆マルシェを企画運営した。その概要は **2-3-4** に記したとおりである。

【work10】季刊コアトリエおよび WEB サイトの編集・発行
本項目は情報発信であるので特段得られた知見として記述するものはない。

【work11】コアトリエとうほくサミット＆マルシェ
2-3-4 に記したとおりである。

3-4-5. 共有検討

2-3-5 に記したとおりである。
【work12】フィールド・ワークショップ
2-3-5 に記したとおりである。

【work13】コアトリエ・オープンラボ
2-3-5 に記したとおりである。

3-4-6. 総括論考

2-3-6 および **3-1** に記したとおりである。

3-5. 今後の成果の活用・展開に向けた状況

本プロジェクトの後継活動として、代表者の所属大学内に、ヴァーチャル研究所「生業景デザイン研究所」を開設した。ここでは、これまでの「基盤調査」「生業再生」「学習支援」「景観育成」といった主要４項目を継続しながら、これを「右ねじの法則」のようなＰＤＣＡサイクルで少しずつ重ねていく構想としている（図 36-37）。

また、オープンラボの車座形式が有意義であったことや、これまで進めてきた視察地との関係性を醸成することも考えて、定例の「仮称：生業景デザイン総会＋エクスカーション」を行う、小さな学会企画のようなものを考えている。もちろん、引き続き学生が参加できるスタイルを保持することで、結果として「多世代共創」を継承できるよう進めて行く所存である。

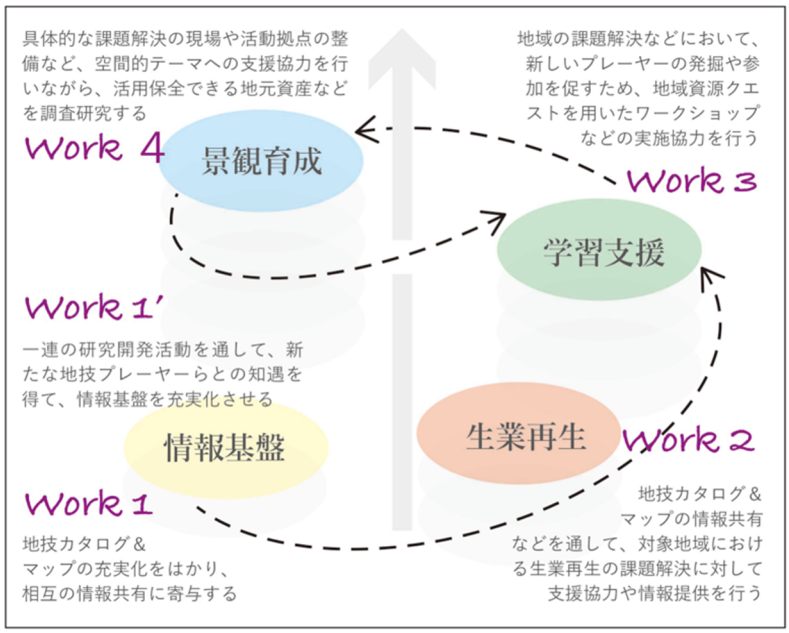


図 36 生業景デザイン研究所の進め方

図 37 生業景デザイン研究所　大学内の紹介ホームページ

4. 研究開発の実施体制

4-1. 研究開発実施者

(1) ＭＮＧ：研究開発マネジメント（ＭＮ）グループ（リーダー氏名：大沼正寛）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
○大沼　正寛	オオヌマ　マサヒロ	東北工業大学	大学院ライフデザイン学研究科	教授
宮本　　愛	ミヤモト　アイ	東北工業大学		研究支援コーディネーター
渡邊　博一	ワタナベ　ヒロカズ	東北工業大学		研究支援コーディネーター

(2) ＣＡＧ：農山漁村共同アトリエ（ＣＡ）群調査グループ（リーダー氏名：佐々木　秀之）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
○佐々木　秀之	ササキ　ヒデユキ	宮城大学	事業構想学群	准教授
菅原　香織	スガワラ　カオリ	秋田公立美術大学	美術学部	准教授
大沼　正寛	オオヌマ　マサヒロ	東北工業大学	大学院ライフデザイン学研究科	教授
宮本　　愛	ミヤモト　アイ	東北工業大学		研究支援コーディネーター
渡邊　博一	ワタナベ　ヒロカズ	東北工業大学		研究支援コーディネーター

(3) ＬＳＧ：生活景醸成（ＬＳ）と環境デザイン調査グループ（リーダー氏名：大沼　正寛）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
○大沼　正寛	オオヌマ　マサヒロ	東北工業大学	大学院ライフデザイン学研究科	教授
菅原　香織	スガワラ　カオリ	秋田公立美術大学	美術学部	准教授
阿部　　正	アベ　タダシ	東北工業大学		研究支援コーディネーター

4-2. 研究開発の協力者・関与者

氏　名	フリガナ	所　属	役　職	協力内容
田澤　紘子	タザワ　ヒロコ	公益財団法人仙台市市民文化事業団	主事	分析考察の共同、調査協力、催事コーディネーター等、プロジェクト全般協力
佐藤　純子	サトウ　ジュンコ	宮城県丸森町教育委員会	教育長	丸森まなみやげ共創活動、プロジェクト全般助言協力、サミット登壇
上野　美樹	ウエノ　ミキ	花厨		丸森まなみやげ共創マネジメント協力
阿部　倫子	アベ　ミチコ	宮城県丸森町地域おこし協力隊	隊員	丸森まなみやげ共創マネジメント統括、サミット・マルシェ・オープンラボ登壇ほか
目黒　啓治	メグロ　ケイジ	養蚕農家	JA みやぎ仙南　養蚕部会会長	丸森まなみやげメンバー、オープンラボ登壇
一條　和俊	イチジョウ　カズトシ	養蚕農家		丸森まなみやげメンバー
小野　昭一	オノ　ショウイチ	養蚕農家		丸森まなみやげメンバー
谷津　義和	ヤツ　ヨシカズ	養蚕農家		丸森まなみやげメンバー
佐藤　靖	サトウ　ヤスシ	養蚕農家		丸森まなみやげメンバー
佐藤　美穂	サトウ　ミホ	染め織り作り手		丸森まなみやげメンバー
舩山　達子	フナヤマ　タツコ	和紙工房		丸森まなみやげメンバー
石塚　裕美	イシヅカ　ヒロミ	染め織り作り手		丸森まなみやげメンバー
星　とみ子	ホシ　トミコ	佐野地織保存会	会長	丸森まなみやげメンバー、サミット・マルシェ・オープンラボ登壇ほか
菅野　中子	カンノ　ナカコ	佐野地織保存会		丸森まなみやげメンバー
横山　さくら	ヨコヤマ　サクラ	佐野地織保存会		丸森まなみやげメンバー
斎藤　冨士江	サイトウ　フジエ	佐野地織保存会		丸森まなみやげメンバー
伊藤　照子	イトウ　テルコ	佐野地織保存会		丸森まなみやげメンバー
安島　陽子	アジマ　ヨウコ	陽だまり工房		丸森まなみやげメンバー、サミット・マルシェ・オープンラボ登壇ほか

佐藤　久美子	サトウ　クミコ	陽だまり工房		丸森まなみやげメンバー
佐藤　伸子	サトウ　ノブコ	陽だまり工房		丸森まなみやげメンバー
山内　正男	ヤマウチ　マサオ	宮城県蚕糸会	事務局長	8/19 コアトリエ・オープンラボ登壇者
阿部　一郎	アベ　イチロウ	南三陸町戸倉小学校養蚕指導員		8/19 コアトリエ・オープンラボ登壇者
吉田　伸子	ヨシダ　ノブコ	結工房	代表	8/19 コアトリエ・オープンラボ登壇者
中村　鉄弥	ナカムラ　テツヤ	染織工房 琉	代表	8/19 コアトリエ・オープンラボ登壇者
宮城県農業振興部・地方振興部・大崎市	ミヤギケン　ノウギョウシンコウブ・チホウシンコウブ・オオサキシ			調査対象選考助言協力
今野　昭夫	コンノ　アキオ	今野醸造	代表	調査協力
小松　庸一	コマツ　ヨウイチ	小松屋凍み豆腐工場	代表	調査協力
中森　　徹	ナカモリ　トオル	中森凍み豆腐工場	代表	調査協力
小泉　健志	コイズミ　ケンシ	小泉麹屋	代表	調査協力
高橋　哲郎	タカハシ　テツロウ		元石盤葺職人	陸前スレート千軒講の活動協力等
菅原　邦義	スガワラ　クニヨシ		元石盤葺職人	陸前スレート千軒講の活動協力等
後藤　欣作	ゴトウ　キンサク		元石盤割職人	陸前スレート千軒講の活動協力等
寺川　重俊	テラカワ　シゲトシ	寺川ムラまち研究所	所長	陸前スレート千軒講の活動協力等
小林　裕幸	コバヤシ　ヤスユキ	文化財建造物保存技術協会		スレート保存技術研究協力
野口　辰二	ノグチ　タツジ	野口板金	元　代表取締役	スレート保存技術研究協力
阿部　忠義	アベ　タダヨシ			陸前スレート千軒講の活動協力等
阿部　博之	アベ　ヒロユキ			陸前スレート千軒講の活動協力等
藤田　　岳	フジタ　ガク			陸前スレート千軒講の活動協力等
三浦　彩子	ミウラ　アヤコ			陸前スレート千軒講の活動協力等
西原　まり	ニシハラ　マリ			陸前スレート千軒講の活動協力等

佐久間　修	サクマ　オサム			陸前スレート千軒講の活動協力等
片岡　鉄郎	カタオカ　テツロウ			陸前スレート千軒講の活動協力等
阿部　礼子	アベ　レイコ			陸前スレート千軒講の活動協力等
半澤　裕一	ハンザワ　ユウイチ			陸前スレート千軒講の活動協力等
沼倉　貴宏	ヌマクラ　タカヒロ			陸前スレート千軒講の活動協力等
小野寺　和伸	オノデラ　カズノブ			陸前スレート千軒講の活動協力等
佐々木　正文				陸前スレート千軒講の活動協力等
佐藤　和広				陸前スレート千軒講の活動協力等
山田　忠則	ヤマダ　タダノリ	とよま振興公社		陸前スレート千軒講の活動協力等
後藤　十九二	ゴトウ　トクジ	とよま振興公社		陸前スレート千軒講の活動協力等
雄勝歴史研究会	オガツレキシケンキュウカイ			陸前スレート千軒講の活動協力等
小松　英雄	コマツ　ヒデオ	雄勝町在住		陸前スレート千軒講の活動協力等
阿部　久一	アベ　キュウイチ	石巻市	市議会議員	陸前スレート千軒講の活動協力等
藤倉　泰治	フジクラ　ヤスハル	矢作スレート屋根を守る会	代表	陸前スレート千軒講の活動協力等・サミット登壇
永沼　あずさ	ナガヌマ　アズサ	宮城県雄勝町復興応援隊	隊員	コアトリエ調査協力・サミット登壇
小林　淑子	コバヤシ　ヨシコ	有限会社魁設計		オープンラボ登壇
鈴木　蘭	スズキ　ラン	くさかんむりカフェ	店主	オープンラボ登壇
徳水　博志	トクミズ　ヒロシ	一社）雄勝花物語	共同代表	オープンラボ登壇
佐藤　偉仁	サトウ　ヨシヒト	佐藤茅葺店	代表	2017 コアトリエ調査協力・2018 サミット登壇
古屋　睦子	フルヤ　チカコ	佐藤茅葺店	職人	2017 コアトリエ調査協力・2018 サミット登壇
木村　　望	キムラ　ノゾム	阿仁マタギ		2018 サミット登壇
鈴木　英雄	スズキ　ヒデオ	阿仁マタギ		2018 サミット登壇
高橋　了介	タカハシ　リョウスケ	北秋田市地域おこし協力隊	隊員	2018 サミット登壇
中島　郁子	ナカジマ　イクコ	wire factory	代表	2019 コアトリエ調査協力（三条現地コーディネート）
時田　和幸	トキタ　カズユキ	秋田良品市庭ごえん	代表	2019 コアトリエ調査協力

佐藤　友亮	サトウ　ユウスケ	佐藤木材容器	代表	2019 コアトリエ調査協力
半田　理人	ハンダ　マサト	シェアビレッジ町村	家守	2019 コアトリエ調査協力
渡邉　幸穂	ワタナベ　サチホ	五城目町地域おこし協力隊	隊員	2019 コアトリエ調査協力
柳澤　　龍	ヤナギサワ　リュウ	(社) ドチャベンジャーズ	代表	2019 コアトリエ調査協力
こむれ　みほ	コムレ　ミホ	秋田市新屋ガラス工房	スタッフ	2019 コアトリエ調査協力
高橋　信一	タカハシ　シンイチ	株式会社高橋しょっつる屋	代表取締役	オープンラボ登壇
仙葉　善一	センバ　ゼンイチ	仙葉善治商店	代表取締役	オープンラボ登壇
青木　将幸	アオキ　マサユキ	青木将幸ファシリテーター事務所	代表	2017 コアトリエ調査協力(淡路瓦コーディネート)
道上　哲治	ミチガミ　テツハル	朝日窯業株式会社	常務取締役	2017 コアトリエ調査協力(淡路瓦)
登里　康生	ノボリザト　ヤスオ	有限会社登里製瓦	社長	2017 コアトリエ調査協力(淡路瓦)
道上　大輔	ミチガミ　ダイスケ	大榮窯業株式会社	瓦師	2017 コアトリエ調査協力(淡路瓦)
武藤　吉彦	ムトウ　ヨシヒコ	正勝刃物鍛冶	五代目	2017 コアトリエ調査協力(秋田　刃物鍛冶)
竹中　博雄	タケナカ　ヒロオ	竹中商店	代表取締役社長	2017 コアトリエ調査協力(秋田　昆布)
須藤　謙一	スドウ　ケンイチ	須藤凧屋	代表	2019 コアトリエ調査協力(三条六角凧)
今井　寛	イマイ　ヒロシ	三条マルシェ実行委員会	委員長	2019 コアトリエ調査協力(三条マルシェ)
三条市役所		営業戦略室・地域経営課		2019 コアトリエ調査協力 (三条凧合戦・三条マルシェ)
石山　真季	イシヤマ　マキ	秋田県立大学	助教	2019 地技カタログ＆マップ取材団
李　雪	リ　セツ	秋田県立大学	助教	2019 地技カタログ＆マップ取材団

八島　咲子	ヤシマ　サキコ	秋田県立大学大学院	2019 年度 M２生	2019 地技カタログ＆マップ取材団
金　雄大	コン　ユウタ	スタジオ VK	代表	2019 地技カタログ＆マップ取材団 動画撮影･編集
髙丸　倫	タカマル　リン	秋田県立大学	2019 年度 ２年生	2019 地技カタログ＆マップ取材団
立山　大星	タテヤマ　タイセイ	秋田県立大学	2019 年度 ２年生	2019 地技カタログ＆マップ取材団
大屋敷　凌佑	オオヤシキ　リョウスケ	秋田県立大学	2019 年度 ２年生	2019 地技カタログ＆マップ取材団
佐々木勇憲	ササキ　タケノリ	秋田大学	2019 年度 ２年生	2019 地技カタログ＆マップ取材団
佐伯　ちひろ	サエキ　チヒロ	弘前大学	2019 年度 2 年生	2019 地技カタログ＆マップ取材団
江頭　宏昌	エガシラ　ヒロアキ	山形大学	教授	調査助言、サミット登壇
早坂　正年	ハヤサカ　マサトシ	BLUEFARM Inc.	代表	調査協力、サミット登壇
伊藤　邦明	イトウ　クニアキ	東北大学	名誉教授	プロジェクト全体助言
古川　哲哉	フルカワ　テツヤ	東北工業大学	准教授	まなみやげパンフレット制作指導
西大立目　祥子	ニシオオタチメ　ショウコ	青空編集室	代表・ライター	助言・執筆協力・手づくり市場関係調査への助言等
向井　康夫	ムカイ　ヤスオ	向井いきもの研究所	主宰	調査協力
高橋　博之	タカハシ　ヒロユキ	よっちゃん農場	代表	特定 PJ にかかる調査協力、サミット・オープンラボ登壇
高橋　道代	タカハシ　ミチヨ	よっちゃん農場	共同	特定 PJ にかかる調査協力、オープンラボ登壇
高橋　雄一郎	タカハシ　ユウイチロウ	BLUEFARM Inc.	共同	調査協力、TOJI WEEK 協力
横山　賢一	ヨコヤマ　ケンイチ	BLUEFARM Inc.	共同	調査協力
大沼　伸治	オオヌマ　シンジ	大沼旅館	代表	調査協力、TOJI WEEK 協力
小渡　章好	コワタリ　ノブヨシ	（有）建築研究所マイス	代表取締役	プロジェクト全体助言
武山　　倫	タケヤマ　ヒトシ	東北工業大学	教授	オープンラボ登壇等
熊谷　秋雄	クマガイ　アキオ	（有）熊谷産業	代表取締役	石材に関する研究協力

高橋　直子	タカハシ　ナオコ	（株）伝統建築研究所	代表取締役	オープンラボ登壇等
澤村　文雄	サワムラ　フミオ	雄勝硯生産販売協同組合	理事長	陸前スレート千軒講の活動協力等
木村　　満	キムラ　ミツル	雄勝硯生産販売協同組合	副理事長	陸前スレート千軒講の活動協力等
千葉　隆志	チバ　タカシ	雄勝硯生産販売協同組合	事務局長	陸前スレート千軒講の活動協力等
佐々木　信平	ササキ　シンペイ	信玄工房	スレート葺国選定保存技術者	陸前スレート千軒講の活動協力等
今泉　俊郎	イマイズミ　トシオ	歴史研究家		陸前スレート千軒講の活動協力等
菅野　哲也	カンノ　テツヤ	写真家		陸前スレート千軒講の活動協力等
佐々木　英俊	ササキ　ヒデトシ	メディカル・トリートメント	代表取締役	陸前スレート千軒講の活動協力等
舛岡　和夫	マスオカ　カズオ	東北工業大学	名誉教授	プロジェクト全体助言
菊地　良覺	キクチ　リョウガク	東北工業大学	教授	プロジェクト全体助言
伊藤　美由紀	イトウ　ミユキ	東北工業大学	准教授	プロジェクト全体助言
酒井　忠順	サカイ　タダヨリ	庄内藩	代表取締役	プロジェクト創始協力
宇生　雅明	ウジョウ　マサアキ	庄内映画村（株）	代表取締役	プロジェクト創始協力
清野　　忠	セイノ　タダシ	松ヶ岡開墾場		プロジェクト創始協力
船木　　實	フナキ　ミノル	国立極地研究所	元　准教授	陸前スレート千軒講の活動協力等
津村　泰範	ツムラ　ヤスノリ	長岡造形大学	准教授	陸前スレート千軒講の活動協力等
村田　明子	ムラタ　アキコ	株式会社 woonerf	所員	コアトリエ調査協力等
後藤　泰男	ゴトウ　ヤスオ	Lixil 研究所		近代建築史研究助言
岡崎　紀子	オカザキ　ミチコ	近代建築史専門家		近代建築史研究助言
庄子　晃子	ショウジ　アキコ	東北工業大学	名誉教授	東北近代史研究助言協力

斎藤　広通	サイトウ　ヒロミチ	近代仙台研究会	事務局長	東北近代史研究助言協力
吉村　典子	ヨシムラ　ノリコ	宮城学院女子大学	教授	東北近代史研究助言協力
鈴木　南枝	スズキ　ナミエ	まちづくり研究家		プロジェクト全体助言・協力
藤澤　孝二	フジサワ　コウジ	和・笑・輪	代表取締役	コアトリエ調査協力
相田　　聡	アイダ　サトシ	相田合同	代表取締役	調査協力、サミット登壇
寺井　良夫	テライ　ヨシオ	SAVE IWATE 和グルミプロジェクト	代表理事	コアトリエ調査協力・サミット登壇
濱田　直樹	ハマダ　ナオキ	うぶごえプロジェクト	代表	サミット運営協力
小野寺　昭子	オノデラ　ショウコ	茶房クレイン	代表	マルシェ出展協力
桃生　和成	モノウ　カズナリ	Granny Rideto	代表	プロジェクト全体助言・協力
桃生　尚典	モノウ　ナオマサ			コアトリエ調査協力
齋藤　英樹	サイトウ　ヒデキ	東北工業大学	技術教育指導員	コアトリエ調査協力・オープンラボ登壇
萩原　　陵	ハギワラ　リョウ	東北工業大学	技術教育指導員	牡鹿慰霊碑製作協力
中村　琢己	ナカムラ　タクミ	東北工業大学	講師	記念シンポジウム実施協力
謝　一麟	シャ　イーリン	三餘書店	店長	台湾視察調査協力
陳　瀅羽	チン　エイウ	三餘書店		台湾視察調査協力
鍾　尚樺	ショウ　ショウカ	三餘書店		台湾視察調査協力
郭　東雄	カク　トウユウ	ピントン大学	准教授	台湾視察調査協力
Terry Hughes	テリー　ヒューズ	建築修復コンサルタント		英国視察調査協力
John Owens	ジョン　オウエンズ	ペンリンスレート採石場	営業課長	英国視察調査協力
前野久美子	マエノ　クミコ	ブックカフェ火星の庭	代表	台湾視察調査協力
尾形　　章	オガタ　アキラ	たかぎ木工		コアトリエ調査協力
高橋　伸一	タカハシ　シンイチ	ストロー工房	代表	コアトリエ調査協力
青田　全尚	アオタ　ゼンショウ	青田ファーム	代表	コアトリエ調査協力
大和　匡輔	ヤマト　ショウスケ	松岡シルク	代表取締役	コアトリエ調査協力

板橋　淳也	イタバシ ジュンヤ	三島生活工芸館	館長	コアトリエ調査協力
村上　美栄子	ムラカミ ミエコ	ANEKKO	代表	コアトリエ調査協力
野沢　和幸	ノザワ カズユキ	野沢農園	代表	コアトリエ調査協力
中家　正一	ナカヤ ショウイチ	大野木工生産グループ		コアトリエ調査協力・サミット登壇
中村　　隆	ナカムラ タカシ	大野木工生産グループ		コアトリエ調査協力・サミット登壇
関向　廣志	セキムカイ ヒロシ	大野木工生産グループ		コアトリエ調査協力・サミット登壇
齋藤　寛子	サイトウ ヒロコ	イラストレーター		サミットフライヤーイラストレーション
田中舘　一久	タナカダテ カズヒサ	193tree	代表	ホームページ・サミットフライヤーデザイン
渡邉　武海	ワタナベ タケミ	メディアストラータ	代表	サミット会場・ホームページ改修デザイン等
高橋　周吾	タカハシ シュウゴ	メディアストラータ	プログラマー	ホームページ改修デザイン等
櫻井　一弥	サクライ カズヤ	東北学院大学	教授	サミット会場設営助言
大平　啓太	オオダイラ ケイタ	大平工務店		屋台設営協力
本郷　紘一	ホンゴウ コウイチ	SDC Inc.	代表	マルシェ会場協力
福田　圭祐	フクダ ケイスケ	仙台市		マルシェ会場協力
勝　邦義	カツ クニヨシ	Ishinomaki2.0		東北近代史研究協力
渡邊　義孝	ワタナベ ヨシタカ	建築家		国内視察調査助言
関本　欣也	セキモト キンヤ	Turn Around & Hang Around	代表	屋台設営協力・スタジオ開墾貸与協力
田所　愛子	タドコロ アイコ	建築家		コアトリエ調査協力
豊田　晧平	トヨタ コウヘイ	豊田木工		コアトリエ調査協力
脇坂　圭一	ワキサカ ケイイチ	静岡理工科大学	教授	コアトリエ調査協力
鈴木　和宏	スズキ カズヒロ	稲井石材商工業協同組合	理事長	牡鹿慰霊碑プロジェクト協力
亀山　桂太	カメヤマ ケイタ	稲井石材商工業協同組合	事務局長	牡鹿慰霊碑プロジェクト協力
小野　行雄	オノ ユキオ	日本日時計の会	事務局長	牡鹿慰霊碑プロジェクト実施協力

内山　立哉	ウチヤマ　タツヤ	火づくりのうちやま	代表取締役	コアトリエ調査協力
田齋　道生	タサイ　ミチオ	田齋鍛冶店		コアトリエ調査協力
清水　重人	シミズ　シゲト	大日本蚕糸会蚕糸科学研究所	所長	コアトリエ調査協力
新保　博	シンボ　ヒロシ	大日本蚕糸会蚕業技術研究所	所長	コアトリエ調査協力
木村　崇之	キムラ　タカユキ	有限会社木村木品製作所	代表取締役	オープンラボ登壇
熊野　彰	クマノ　アキラ	熊野祠		オープンラボ登壇
石村　眞一	イシムラ　シンイチ	石村工業株式会社	代表取締役	オープンラボ登壇
竹中　雅治	タケナカ　マサハル	登米町森林組合		オープンラボ登壇
鞍田　崇	クラタ　タカシ	哲学者・明治大学	准教授	記念シンポジウム登壇
田村　尚子	タムラ　ナオコ	写真家		記念シンポジウム登壇
吉田　和樹	ヨシダ　カズキ	宮城大学		
高橋　　結	タカハシ　ユイ	宮城大学		
西尾　葉月	ニシオ　ハヅキ	秋田公立美術大学	2018 年度２年生	グラフィカルレコーディング担当
松山　さくら	マツヤマ　サクラ	秋田公立美術大学	2018 年度２年生	グラフィカルレコーディング担当
川口　朱徳	カワグチ　アキノリ	秋田公立美術大学	2019 年度３年生	2019 コアトリエ調査協力（三条六角凧）
真島　　葵	マジマ　アオイ	秋田公立美術大学	2019 年度３年生	2019 コアトリエ調査協力（三条六角凧）
伊藤　諒佑	イトウ　リョウスケ	東北工業大学	2017 年度 4 年生	
鈴木　正樹	スズキ　マサキ	東北工業大学	2017 年度 4 年生	
佐藤　真太郎	サトウ　シンタロウ	東北工業大学	2017 年度 4 年生	
村山　早紀	ムラカミ　サキ	東北工業大学	2017 年度 4 年生	
喬　文琪	キョウ　ブンキ	東北工業大学		
木村　一気	キムラ　イッキ	東北工業大学大学院	2018 年度 M2 年生	

伊藤　結子	イトウ　ユイコ	東北工業大学	2018 年度 4 年生	特定 PJ パンフレット制作
田桑　礼子	タグワ　レイコ	東北工業大学	2018 年度 4 年生	特定 PJ パンフレット制作
佐藤　豪	サトウ　タケシ	東北工業大学	2017 年度 4 年生	特定 PJ 実施協力
木村　美紘	キムラ　ミヒロ	東北工業大学	2017 年度 4 年生	特定 PJ 実施協力
船山　祐佳	フナヤマ　ユウカ	東北工業大学	2017 年度 4 年生	特定 PJ 実施協力
星　祐亮	ホシ　ユウスケ	東北工業大学	2017 年度 4 年生	特定 PJ 実施協力
佐藤　翔	サトウ　ショウ	東北工業大学	2017 年度 4 年生	特定 PJ 実施協力
斎藤　喬太郎	サイトウ　キョウタロウ	東北工業大学	2017 年度 4 年生	特定 PJ 実施協力
久保田　麻祐子	クボタ　マユコ	東北工業大学	2017 年度 4 年生	特定 PJ 実施協力
鈴木　花菜	スズキ　カナ	東北工業大学	2017 年度 4 年生	特定 PJ 実施協力
佐々木　悠里	ササキ　ユリ	東北工業大学	2018 年度 4 年生	特定 PJ 実施協力
佐藤　　極	サトウ　キワミ	東北工業大学	2018 年度 4 年生	特定 PJ 実施協力
阿部　亨美	アベ　ユキミ	東北工業大学	2018 年度 4 年生	特定 PJ 実施協力
阿部　華子	アベ　ハナコ	東北工業大学	2018 年度 4 年生	特定 PJ 実施協力
小林　愛菜	コバヤシ　アイナ	東北工業大学	2018 年度 4 年生	特定 PJ 実施協力
大極　裕介	ダイコク　ユウスケ	東北工業大学	2018 年度 4 年生	特定 PJ 実施協力
千葉　寛杜	チバ　ヒロト	東北工業大学	2018 年度 4 年生	特定 PJ 実施協力
後藤　春希	ゴトウ　ハルキ	東北工業大学	2018 年度 4 年生	特定 PJ 実施協力
岡本　優花	オカモト　ユカ	東北工業大学	2018 年度 4 年生	特定 PJ 実施協力
佐々木　宏和	ササキ　ヒロカズ	東北工業大学	2018 年度 4 年生	特定 PJ 実施協力
小野寺　伸	オノデラ　シン	東北工業大学	2018 年度 4 年生	特定 PJ 実施協力

村上　皓海	ムラカミ　コウミ	東北工業大学	2018 年度 4 年生	特定 PJ 実施協力
佐藤　将希	サトウ　マサキ	東北工業大学	2018 年度 4 年生	特定 PJ 実施協力
川合　啓太	カワアイ　ケイタ	東北工業大学	2018 年度 4 年生	特定 PJ 実施協力
林　　弘樹	ハヤシ　ヒロキ	東北工業大学	2019 年度 4 年生	特定 PJ 実施協力
渋川　成哉	シブカワ　セイヤ	東北工業大学	2019 年度 4 年生	特定 PJ 実施協力
英　　才貴	ハナブサ　トシキ	東北工業大学	2019 年度 4 年生	特定 PJ 実施協力
佐藤　恵美子	サトウ　エミコ	東北工業大学	2019 年度 4 年生	特定 PJ 実施協力
紺野　仁希	コンノ　ニキ	東北工業大学	2019 年度 4 年生	特定 PJ 実施協力
大村　琴里	オオムラ　コトリ	東北工業大学	2019 年度 4 年生	特定 PJ 実施協力
小久保　優佳	コクボ　ユウカ	東北工業大学	2019 年度 4 年生	特定 PJ 実施協力
石黒　涼太	イシグロ　リョウタ	東北工業大学	2019 年度 4 年生	地技カタログ取材協力
佐々木　菜穂	ササキ　ナオ	東北工業大学	2019 年度 3 年生	地技カタログ取材協力
大野　紫音	オオノ　シオン	東北工業大学	2019 年度 3 年生	特定 PJ 実施協力
安部　志穂	アベ　シホ	東北工業大学	2019 年度 3 年生	特定 PJ 実施協力
佐藤　優作	サトウ　ユウサク	東北工業大学	2019 年度 3 年生	特定 PJ 実施協力
三浦　七海	ミウラ　ナナミ	東北工業大学	2019 年度 2 年生	地技カタログ取材協力
淺田　菜月	アサダ　ナツキ	東北工業大学	2019 年度 2 年生	特定 PJ 実施協力
佐々木実奈	ササキ　ミナ	東北工業大学	2019 年度 2 年生	特定 PJ 実施協力
鎌田　遥月	カマタ　ハヅキ	東北工業大学	2019 年度 1 年生	地技カタログ取材協力
島貫　玲奈	シマヌキ　レイナ	東北工業大学	2019 年度 1 年生	地技カタログ取材協力
佐藤　碧伊	サトウ　アオイ	東北工業大学	2019 年度 1 年生	地技カタログ取材協力

熊谷　瑞穂	クマガイ ミズホ	東北工業大学	2019 年度 1 年生	地技カタログ取材協力
阿部　夏実	アベ ナツミ	東北工業大学	2019 年度 1 年生	地技カタログ取材協力
横山　鮎香	ヨコヤマ アユカ	東北工業大学	2019 年度 1 年生	地技カタログ取材協力

5. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

5-1. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

5-1-1. 情報発信・アウトリーチを目的として主催したイベント

年月日	名　称	場　所	概要・反響など	参加人数
H29/7/6～7/8	スレート千軒講ワークショップ@雄勝	雄勝町大須地区	河北新報紹介、石巻市外からも参集	約 20 名
H29/8/19～8/20	スレート千軒講ワークショップ@入谷	南三陸町入谷地区	域内の別業種（ワイナリー等）の方も参加	約 15 名
H29/9/29～10/1	スレート千軒講ワークショップ@登米	登米市登米地区	宮城県内外から参集、文化庁文化財技術講習会と協力して連日開催	それぞれ約 50 名
H29/11/24～11/26	スレート千軒講ワークショップ@矢作	陸前高田市矢作地区	岩手県内外から参集	約 30 名
H29/12/19	丸森シルクコアトリエオープンイベント	丸森町陽だまり工房	宮城県内外からも参集、創作物をはじめて持ち寄って展示販売	約 15 名
H30/3/17	丸森シルクコアトリエ「春の装い」	丸森町陽だまり工房	宮城県内から参集、関心層が参集	約 20 名
H30/8/11～8/12	丸森コアトリエ「夏展」	丸森町陽だまり工房	地元周辺、県内から、親子連れなど多世代の人々が参集	約 40 名
H30/9/1	コアトリエとうほくサミット&マルシェ	せんだいメディアテーク＋勾当台公園市民広場 LIVE+RALLY PARK.	東北一円から関係者が集い、情報共有・交換を行ったほか、日本建築学会大会のプレイベントとしても位置づけ、近隣の市民来訪	約 150 名
H30/12/15～12/16	丸森コアトリエ「冬展」	丸森町陽だまり工房	「まなみやげ」として販売、地元周辺、県内から	約 30 名
H31/3/16	丸森コアトリエ「春展」	丸森町陽だまり工房	「まなみやげ」として販売、地元周辺、県内から	約 30 名
R01/8/21	生業景デザイン研究所開設記念シンポジウム「この地から醸成する東北の生業景」	東北工業大学一番町ロビー２階ホール	東日本各地から参集、本プロジェクトの後継活動を紹介しつつ、その方向性を示唆、確認する機会に	約 80 名

5-1-2. 研究開発の一環として実施したイベント

年月日	名　称	場　所	概要・反響など	参加人数
H28.10.18	第 1 回全体会議	大沼研	プロジェクト概要（目標・計画・体制）及びスケジュールの確認・検討	30 名
H28.10.30	CAG 連携打ち合わせ	大沼研	CAG 連携体制、役割分担等の検討	8 名
H28.11.29	LSG 研究会議	大沼研	千軒講の組織化に向けて	6 名
H28.12.16	LSG 研究会議	大沼研	民家 DB 構築と実地調査の予定検討	6 名
H28.12.22	CAG 会議	大沼研	共同アトリエの共通理解に向けた討議、DB の進捗状況報告、直近の調査研究計画等	8 名
H28.12.23-24	LSG スレートワークショップ	宮城県雄勝町、入谷、登米町	生活景醸成およびスレート千軒講の共通理解に向けた討議、現地視察等	14 名
H29.1.8	CAG 手づくり市視察会議	薬師堂手づくり市	共同アトリエの参集の場としての手づくり市の視察	10 名
H29.2.6	CAG 会議	大沼研	研究協力者による共同アトリエ事例の報告、キーワードの抽出、DB の作成方針に関する討議	7 名
H29.2.11	LSG スレート建築保全調査	宮城県雄勝町、登米町	被災地を含む石巻沿岸の遺構残存状況確認、千軒講啓発の計画	5 名
H29.2.20-22	CAG 合宿ワークショップ	山形県鶴岡市	松ヶ岡開墾場を主要事例とした有形無形資源活用と生業景、在来作物の継承保全、共同アトリエ群の構造化試行＋事例抽出 WS	14 名
H29.3.20-21	LSG 建材試作実験ワークショップ	宮城県登米町	スレート加工現場の再現と、新たな製品開発や利用法の検討（石材素材視察、ずり石と湿式構法、石材カットと	20 名

			寸法形状および利用方法）	
H29.3.24	年度末全体会議	大沼研	H28 年度研究活動報告及び総括、次年度計画の検討	12 名
H29.3.28	LSG スレート民家集落史研究会議	大沼研	スレート民家研究識者からの情報提供及び研究計画への助言、研究方針の検討	6 名
H29/05/26	丸森第１回コアトリエ会議	丸森町Ｓ邸	その後のコアトリエ活動のきっかけとなった	約 15 名
H29/07/11	丸森第２回コアトリエ会議	丸森町養蚕農家M邸・Ｓ邸	養蚕農家の実情と今後の協力可能性を学んだ	約 15 名
H29/08/28	スレート民家調査@石巻河北	北境地区・飯野川地区ほか	４大産地以外の景観卓越地区の内情を視察	約 10 名
H29/09/16	丸森第３回コアトリエ会議	丸森町Ｆ邸	シルク和紙の工程を学んだ	約 15 名
H29/10/06 ～10/07	燕三条ＫＯＵＢＡの祭典視察ツアー	燕・三条両市内各地	コアトリエと公開方法の参考とした	8 名
H29/10/14	丸森第４回コアトリエ会議・シルクフェスタ協力	丸森町陽だまり工房	丸森コアトリエを実際に創出する気運が高まり、計画と施工に着手	約 15 名
H29/12/08 ～12/08	大崎農と食のコアトリエ研究相談	宮城県振興局大崎合同庁舎	大崎の世界農業遺産と関連の動きを知り、今後の動きを検討	約 10 名
H29/12/19	丸森第５回コアトリエ会議	丸森町陽だまり工房	自分たちで改修したコアトリエで展示販売	約 15 名
H30/02/09	丸森第６回コアトリエ会議	丸森町陽だまり工房	次年度計画を討議	約 10 名
H30/03/17	丸森第７回コアトリエ会議	丸森町陽だまり工房	紹介パンフレットなどについて討議	約 15 名
H30/04/13	丸森コアトリエ会議＆域外者案内	丸森町陽だまり工房、石塚養蜂園、佐野地織保存会	宮城県内外からも参集	約 15 名
H30/06/29 ～06/30	スレート千軒講ワークショップ@雄勝	石巻市雄勝町大須地区集会所	住民、技術者、関心層ら、域外からも参集	約 15 名
H30/09/26	地域資源ジャーニーマップ実装ワークショップ（のち「クエスト」と改名）	宮城県丸森町	主に丸森町地域おこし協力隊員、教育局関係者が参集	約 25 名
H30/12/02	国選定石盤葺師佐々木信平氏による文化	宮城県登米市豊里町・信玄工房	宮城県内から新たな技術者らが参集	約 25 名

	庁技能講習会への協力			
H31/03/09	茅葺き民家の保全と茅野の育成に関するワークショップへの協力	宮城県南三陸町入谷・ひころの里	宮城県内から参集	約 20 名
H31/03/16	スレート千軒講ワークショップ@雄勝	石巻市雄勝町大須地区集会所	住民、技術者、関心層ら、域外からも参集、陸前高田矢作からの住民チームも参加し、地域間連携の素地を形成	約 20 名
H31/03/23	登米町海老喜商店ディスプレイデザイン発表会への協力	宮城県登米市登米町	スレート葺きの旧店舗を改装する試みで、東北工業大学中村研の取り組み。当研究室は設計支援協力、その後にヘリテージマネージャー関係者と、今後のスレート千軒講の可能性について相談した	約 20 名
H31/04/06-07	CAG 合宿ワークショップ	秋田県五城目町	五城目市、シェアビレッジ町村、佐藤木材ほか、日本海側東北におけるアトリエとつなぎ手の動きを視察調査	5 名
R01/05/22-29	地技カタログ＆マップ学生取材団会議	大沼研	最終的なデータのとりまとめを再確認しつつ補完するための学生取材団の結成会議	25 名
R01/08/07	地技カタログ＆マップ学生取材団調査後会議	大沼研	それぞれのヒアリング調査の成果と課題を出し合い、今後に備えるための会議	18 名
R01/08/19-20	コアトリエ・オープンラボ	東北工業大学一番町ロビー 1 階ギャラリー	これまでの特定 PJ の集大成および関連領域の動きを把握するため５セッションに分け、2 日間で多様な課題解決ワークショップを開催した	５回とも 25～40 名程度

5-1-3. 書籍、DVD など論文以外に発行したもの

（1）タイトル、著者、発行者、発行年月、反響　など

・季刊コアトリエ　１号、～未来に伝える東北の生業と生活景～，東北工業大学、H29.3
・季刊コアトリエ　２号、～未来に伝える東北の生業と生活景～、東北工業大学、H29.6 月
・季刊コアトリエ　３号、～未来に伝える東北の生業と生活景～、東北工業大学、H29.10 月
・季刊コアトリエ　４号、～未来に伝える東北の生業と生活景～、東北工業大学、H30.1 月
・季刊コアトリエ　５号、～未来に伝える東北の生業と生活景～、東北工業大学、H30.3 月
・季刊コアトリエ　６号、～未来に伝える東北の生業と生活景～、東北工業大学、H30.8 月
・季刊コアトリエ　７号、～未来に伝える東北の生業と生活景～、東北工業大学、H30.12 月
・季刊コアトリエ　８号、～未来に伝える東北の生業と生活景～、東北工業大学、H30.3 月
・季刊コアトリエ　９号、～未来に伝える東北の生業と生活景～、東北工業大学、R01.8 月
・コアトリエ１０号、総集編、東北工業大学、R01.12 月
・大沼正寛・阿部正「陸前地方の天然スレート建築 第１回 東京駅のスレート屋根をみつめながら」（公社）日本建築士会連合会『建築士』連載記事，Vol.68, No.797, H31.2 月
・大沼正寛・阿部正「陸前地方の天然スレート建築 第２回 雄勝 −スレート産業の黎明」（公社）日本建築士会連合会『建築士』連載記事，Vol.68, No.798, H31.3 月
・大沼正寛・阿部正「陸前地方の天然スレート建築 第３回 近代洋風建築を包んだ天然スレート」（公社）日本建築士会連合会『建築士』連載記事，Vol.68, No.799, H31.4 月
・大沼正寛・阿部正「陸前地方の天然スレート建築 第４回 石巻地方と仙台 −産地周辺での波及と近代化の風」（公社）日本建築士会連合会『建築士』連載記事，Vol.68, No.800, H31.5 月
・大沼正寛・阿部正「陸前地方の天然スレート建築 第５回 登米スレートの登場と大正昭和の普及」（公社）日本建築士会連合会『建築士』連載記事，Vol.68, No.801, H31.6 月
・大沼正寛・阿部正「陸前地方の天然スレート建築 第６回 入谷と矢作の石材開発―雄勝と登米の間で」（公社）日本建築士会連合会『建築士』連載記事，Vol.68, No.802, H31.7 月
・大沼正寛・阿部正「陸前地方の天然スレート建築 第７回 スレートへの『屋根替え』がつくる景観」（公社）日本建築士会連合会『建築士』連載記事，Vol.68, No.803, H31.8 月
・大沼正寛・阿部正「陸前地方の天然スレート建築 第８回 天然スレート屋根の構法と技術」（公社）日本建築士会連合会『建築士』連載記事，Vol.68, No.804, H31.9 月
・大沼正寛・阿部正「陸前地方の天然スレート建築 第９回 文化的景観と産業遺産の両義性 −台湾・英国を眺めながら−」（公社）日本建築士会連合会『建築士』連載記事，Vol.68, No.805, H31.10 月
・大沼正寛・阿部正「陸前地方の天然スレート建築 第１０回 スレート千軒講−ゆるやかな活用保全をめざして−」（公社）日本建築士会連合会『建築士』連載記事，Vol.68, No.806, H31.3 月
・大沼正寛・阿部正「陸前地方の天然スレート建築 第１１回 屋根下の生業景 −コアトリエの可能性−」（公社）日本建築士会連合会『建築士』連載記事，Vol.68, No.807, H31.11 月

5-1-4. ウェブメディア開設・運営

（1）ウェブサイトや SNS アカウント、動画の配信などについて、URL、立ち上げ年月、反響等

・コアトリエ−この地に技ありプロジェクト、http://co-atelier.jp、2018 年 3 月
・https://m.facebook.com/profile.php?id=1993796587552696&ref=content_filter

5-1-5. 学会以外（5-3. 参照）のシンポジウムなどでの招へい講演など

（1）シンポジウムなどの名称、演題、開催年月日、場所、反響など

・矢作まちづくり報告会、天然スレートのある景観とまちづくり、2018 年 2 月 4 日、矢作コミセン、30 名ほどの住民が参加、その後は幾つかの民家を巡回視察、後日修復物件が増えた）

・ラジオ出演（大沼正寛）Date FM（ＦM仙台）「Hope for MIYAGI（MP:石垣のりこ）」にて、サミット＆マルシェの紹介，2018 年 8 月 27 日（月）12:30~12:50

5-2. 論文発表

5-2-1. 査読付き（ 0 件）

（1）著者、発表論文名、掲載誌（誌名、巻、号、発行年、公開 URL（あれば））

（2）

5-2-2. 査読なし（ 14 件）

（1）佐藤豪・伊藤諒佑・大沼正寛・阿部正・竹内泰、登米市登米町日根牛北沢におけるスレート開発略史と残材利用のための山林の概況把握、日本建築学会東北支部 計画系研究報告集 第 80 号、2017 年 6 月

（2）大沼正寛・竹内泰・阿部正・菅原香織・佐々木秀之、東北地方の文化的景観・伝統工芸・産業遺産等からみた陸前スレート民家・集落の位置づけ−有形無形地域遺産と生業景の継承をめざした複眼的考察−、日本建築学会大会（中国）学術講演梗概集、6077、pp153-154、2017 年 9 月

（3）阿部正・竹内泰・大沼正寛、南三陸町山内家主屋の建設・屋根替えプロセスと葺き工法の概要、日本建築学会大会（中国）学術講演梗概集、6078、pp155-156、2017 年 9 月

（4）阿部正，大沼正寛，竹内泰「陸前地方のスレート民家における産地周辺の保全状況とその特徴」日本建築学会東北支部研究報告集 計画系 第 81 号 B-13, pp91-92, 2018 年 6 月

（5）佐々木悠里，大沼正寛「大崎市における凍り豆腐生産と生業景の保全について」日本建築学会東北支部研究報告集 計画系 第 81 号 B-14, pp93-94, 2018 年 6 月

（6）木村一気，大沼正寛「東北地方における「手づくり市場」の運営概況」日本建築学会東北支部研究報告集 計画系 第 81 号 B-15, pp95-98, 2018 年 6 月

（7）阿部正，大沼正寛，竹内泰「昭和 30 年代のスレート屋根替え民家についての考察」日本建築学会大会（東北）学術講演梗概集 E-2 分冊, pp37-38, 2018 年 9 月

（8）佐々木秀之，菅原香織，宮本愛，大沼正寛「現代における市・マルシェの動向と地域資源ジャーニーマップを用いたソーシャルデザイン」日本建築学会大会（東北）学術講演梗概集 E-2 分冊, pp139-140, 2018 年 9 月

（9）佐々木秀之，菅原香織，宮本愛，田澤紘子，大沼正寛「地域資源ジャーニーマップの開発プロセスに関する考察」日本デザイン学会第 1 支部大会・第 9 回研究発表大会梗概集 pp5-6，2018 年 10 月

（10）林弘樹・渋川成哉・大沼正寛・阿部正・竹内泰「陸前沿岸地方におけるスレート民家の配置・平面と生業の関係　石巻雄勝大須 K 住宅をもとに・その 1」日本建築学会大会（北陸）学術講演梗概集 6062, pp129-130, 2019 年 9 月

（11）渋川成哉・林弘樹・大沼正寛・阿部正・竹内泰「陸前沿岸地方におけるスレート民家の屋根構法と造形意匠　石巻雄勝大須K住宅をもとに・その２」日本建築学会大会（北陸）学術

講演梗概集 6063, pp129-130, 2019 年 9 月
（12）阿部正・大沼正寛・竹内泰「『阿部家史料』にみる本吉郡入谷のスレート産業に関する考察」日本建築学会大会（北陸）学術講演梗概集 9343, pp685-686, 2019 年 9 月
（13）大沼正寛・阿部正・斎藤広通・内山隆弘・高橋直子・伊藤則子「東北大学片平学生ホールにおけるスレート屋根替え年代の考察」日本建築学会大会（北陸）学術講演梗概集 9344, pp687-688, 2019 年 9 月
（14）Masahiro ONUMA, Yasumasa SHIMIU, Kuniaki ITO: The Enfolding Form for the Bereaved Families and the Souls of Victims on the Seashore of Ishinomaki City "Oshika Ring of Hope," Proceedings of the IASS Annual Symposium 2019 – Structural Membranes 2019 "Form and Force," October 2019, Barcelona, Spain

5-3. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

5-3-1. 招待講演　　（国内会議　0　件、国際会議　0　件

5-3-2. 口頭発表　　（国内会議　13　件、国際会議　1　件）

（1）佐藤豪（東北工業大学）・大沼正寛ほか３名「登米市登米町日根牛北沢におけるスレート開発略史と残材利用のための山林の概況把握」日本建築学会東北支部研究報告会、由利本荘市文化交流館カダーレ、2017 年 6 月 17 日
（2）大沼正寛・竹内泰・阿部正・菅原香織・佐々木秀之「東北地方の文化的景観・伝統工芸・産業遺産等からみた陸前スレート民家・集落の位置づけ–有形無形地域遺産と生業景の継承をめざした複眼的考察–」日本建築学会大会（中国）学術講演、広島工業大学、2017 年 9 月 3 日
（3）阿部正・竹内泰・大沼正寛「南三陸町山内家主屋の建設・屋根替えプロセスと葺き工法の概要」日本建築学会大会（中国）学術講演、広島工業大学、2017 年 9 月 3 日
（4）阿部正，大沼正寛，竹内泰「陸前地方のスレート民家における産地周辺の保全状況とその特徴」日本建築学会東北支部研究報告会、青森県観光物産館アスパム、2018 年 6 月 16 日
（5）佐々木悠里，大沼正寛「大崎市における凍り豆腐生産と生業景の保全について」日本建築学会東北支部研究報告会、青森県観光物産館アスパム、2018 年 6 月 16 日
（6）木村一気，大沼正寛「東北地方における「手づくり市場」の運営概況」日本建築学会東北支部研究報告会、青森県観光物産館アスパム、2018 年 6 月 16 日
（7）阿部正，大沼正寛，竹内泰「昭和 30 年代のスレート屋根替え民家についての考察」日本建築学会大会（東北）学術講演、東北大学、2018 年 9 月 6 日
（8）佐々木秀之，菅原香織，宮本愛，大沼正寛「現代における市・マルシェの動向と地域資源ジャーニーマップを用いたソーシャルデザイン」日本建築学会大会（東北）学術講演、東北大学、2018 年 9 月 6 日
（9）佐々木秀之，菅原香織，宮本愛，田澤紘子，大沼正寛「地域資源ジャーニーマップの開発プロセスに関する考察」日本デザイン学会第 1 支部大会，秋田大学，2018 年 10 月 7 日
（10）林弘樹・渋川成哉・大沼正寛・阿部正・竹内泰「陸前沿岸地方におけるスレート民家の配置・平面と生業の関係　石巻雄勝大須 K 住宅をもとに・その 1」日本建築学会大会（北陸）学術講演、金沢工業大学、2019 年 9 月 5 日

（11）渋川成哉・林弘樹・大沼正寛・阿部正・竹内泰「陸前沿岸地方におけるスレート民家の屋根構法と造形意匠　石巻雄勝大須K住宅をもとに・その２」日本建築学会大会（北陸）学術講演、金沢工業大学、2019 年 9 月 5 日
（12）阿部正・大沼正寛・竹内泰「『阿部家史料』にみる本吉郡入谷のスレート産業に関する考察」日本建築学会大会（北陸）学術講演、金沢工業大学、2019 年 9 月 6 日
（13）大沼正寛・阿部正・斎藤広通・内山隆弘・高橋直子・伊藤則子「東北大学片平学生ホールにおけるスレート屋根替え年代の考察」日本建築学会大会（北陸）学術講演、金沢工業大学、2019 年 9 月 6 日
（14）Masahiro ONUMA, Yasumasa SHIMIZU, Kuniaki ITO: The Enfolding Form for the Bereaved Families and the Souls of Victims on the Seashore of Ishinomaki City "Oshika Ring of Hope," Proceedings of the IASS Annual Symposium 2019 – Structural Membranes 2019 "Form and Force," 10 October 2019, Barcelona, Spain

5-3-3. ポスター発表　（国内会議　0　件、国際会議　0　件）

5-4. 新聞報道・投稿、受賞など

5-4-1. 新聞報道・投稿

（1）河北新報 2017 年 5 月 11 日 特集・探る「生業とくらし-保全を」大沼正寛教授
（2）河北新報 2017 年 6 月 30 日一面・河北春秋
（3）日本屋根経済新聞 9 月 18 日「民家２千棟、維持へ」
（4）河北新報 2017 年 10 月 16 日朝刊「天然のスレート価値見直す『スレートアカデミー』」
（5）東京新聞 2018 年 1 月 23 日朝刊「東北復興日記」第 239 回「コアトリエと生活景」大沼正寛 教授
（6）東京新聞 2018 年 2 月 6 日朝刊「東北復興日記」第 240 回「土着の風景を問う」阿部 正氏
（7）東京新聞 2018 年 2 月 13 日朝刊「東北復興日記」第 241 回「シルクの魅力を発信」阿部倫子 氏
（8）東京新聞 2018 年 2 月 20 日朝刊「東北復興日記」第 242 回「毎月 8 日楽しむ定期市」西大立目 祥子 氏
（9）菅原香織（秋田公立美術大学）「東北の技、見つめなおす」東京新聞「ＳＤＧｓ東北の未来へ」2018 年 9 月 18 日朝刊

5-4-2. 受賞

無し

5-4-3. その他

無し

5-5. 特許出願

5-5-1. 国内出願（　0　件）

5-5-2. 海外出願（　0　件）

補注

(1) 河北新報 2017 年 10 月 16 日朝刊「天然のスレート価値見直す『スレートアカデミー』」

参考文献

（産業・生業・地域・工芸系　発行年順）
1)「季刊無尽蔵 第一号～第十五号」皓星社，1977～1981
2) 新荘泰子「秋岡芳夫とグループモノ・モノの 10 年―あるデザイン運動の歴史」玉川大学出版部，1980 ほか、秋岡芳夫によるグループモノ・モノから東北裏作工芸への展開について
3) 永原慶二・山口啓二編「講座・日本技術の社会史 第三巻 紡織」日本評論社，1983
4) 宮本常一「塩の道」講談社，1985
5) 顧ら「開講初期（1842～1867 年）における中国生糸輸出の研究」日蚕雑 62(5), pp358-366, 1993
6) Jill Norris: The Last Handloom Weavers, Paradise Mill, Macclesfield Museum Trust, 1996
7) 南博編著「近代庶民生活誌 第 12 巻（農民・漁民・水上生活者）」三一書房，1996
8) 河北新報社編「むらの工場・産業空洞化の中で」河北新報社，1997
9) 中部産業遺産研究会「ものづくり再発見―中部の産業遺産探訪」アグネ技術センター，2000
10) 鈴木俊彦「協同組合の軌跡とビジョン」農林統計協会，2006
11) 佐藤利明「地域社会形成の社会学・東北の地域開発と地域活性化」南窓社，2007
12) 湯本誠・酒井恵真・新妻二男編「地域産業の構造的矛盾と再生―北海道・東北・沖縄と英国の事例研究―」アーバンプロ出版センター，2007
13) 大日本蚕糸会「シルクレポート No.1~63」2008-2019
14) 「全国手づくり市アート＆クラフトマーケットガイド」プレマガジン，2010
15) 伊藤正昭「新地域産業論　産業の地域化を求めて」学文社, 2011
16) 関満博・酒本宏「道の駅／地域産業振興と交流の拠点」新評論，2011
17) 延岡健太郎「価値づくり経営の論理」日本経済新聞出版社，2011
18) 関満博編「震災復興と地域産業２―産業創造に向かう『釜石モデル』」新評論，2013
19) 松田久一「ジェネレーショノミクス」東洋経済新報社，2013
20) 産業観光推進会議「産業観光の手法・企業と地域をどう活性化するか」学芸出版社，2014
21) 内山節「半市場経済　成長だけでない『共創社会』の時代」角川新書, 2015
22) 松本武祝「東北地方『開発』の系譜　近代の産業振興政策から東日本大震災まで」明石書店，2015
23) 保城広至「歴史から理論を創造する方法　社会科学と歴史学を統合する」勁草書房，2015
24) 藤山浩「シリーズ田園回帰１・田園回帰 1%戦略：地元に人と仕事を取り戻す」農山漁村文化協会，2015
25) 小田切徳美・筒井一伸「シリーズ田園回帰３・田園回帰の過去・現在・未来：移住者と創る新しい農山村」農山漁村文化協会，2016
26) 西堀耕太郎「伝統の技を世界で売る方法」学芸出版社，2018
27) 筧裕介「持続可能な地域のつくり方　未来を育む『人と経済の生態系』のデザイン」英治出版，2019

（建築・景観・現象学系　発行年順）

28）千千岩助太郎「台湾高砂族の住家」丸善株式会社，1960
29）石田潤一郎「INAX ALBUM 5 スレートと金属屋根」INAX，1992
30）エドワード・レルフ（高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳）「場所の現象学」筑摩書房，1999
31）温井亨「生活・生業の場としての歴史的風景保全の研究史に関する考察」ランドスケープ研究 64(5), 457-460, 2001
32）文化庁文化財部記念物課編「日本の文化的景観」同成社, 2005
33）小林亨「食文化の風景学」技報堂出版，2007
34）日本建築学会編・後藤春彦ほか著「生活景―身近な景観価値の発見とまちづくり」学芸出版社, 2009
35）藤木庸介編著「生きている文化遺産と観光：住民によるリビングヘリテージの継承」学芸出版社，2010
36）梶本元信「北ウェールズ交通史論」日本経済評論社，2010
37）文化庁文化財部記念物課監修・［採掘・製造、流通・往来及び居住に関連する文化的景観の保護に関する調査研究会］編「都市の文化と景観」同成社，2010
38）垣内恵美子「文化的景観を評価する　世界遺産富山県五箇山合掌造り集落の事例」水曜社，2012
39）金田章裕「文化的景観　生活となりわいの物語」日本経済新聞出版社，2012
40）大沼正寛「建築資産の経年醸成価値 ： 大切な場所とその持続性」日本建築学会総合論文誌第 10 号 pp63-68，2012）。
41）後藤治・二村悟・小野吉彦「食と建築土木―たべものをつくる建築土木」LIXIL 出版，2013
42) David Gwyn: WELSH SLATE; Archaeology and History of an Industry, Royal Commission on the Ancient and Historical Monuments of Wales, 2015
43）オープンシティ研究会　岡村祐・野原卓・田中暁子「まちをひらく技術―建物・暮らし・なりわい―地域資源の一斉公開」学芸出版社，2017